

【完結】届け、ホシガリ
スポーツ！

お菊さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガラル地方チャンピオン・ダンデが陥落した。シンオウ地方でそのニュースを聞いた
主人公は十年ぶりにモンスターボールを握りしめる。ダンデにもう一度だけ会うため
に。大人になつてしまつた無才のトレーナーよ、リザードンポーズならぬホシガリス
ポーズでガラルに挑め！

これは一人の大人が一つの区切りをつけるための物語。

※剣盾時間より二年後のガラルが舞台です。

※ジムリーダーなどは剣盾ごちやごちやです。

目 次

ナックルシティと、ラテラルタウン
117

ようこそ、初めてのガラルへ ━━

ガラルポケモン、初ゲット ━━

ジムチャレンジ、スタート ━━

到着、ターフタウン ━━

決戦、ヤロー！ ━━

初めまして、ワイルドエリア ━━

キャンプと、女子トーキー ━━

決戦、セイボリー！ ━━

いらっしゃいませ、防波亭へようこそ

84

決戦、ルリナ！ ━━

キバナ、砂地に吠える ━━

105 93

道を選ぶのは、君だ ━━

お先真っ白、カンムリ雪原 ━━

古傷とマフラーと、ポフイン ━━

決戦、オニオン！ ━━

本日は、休憩日和 ━━

お弁当です、ヨロイ島 ━━

ちよつと待つてよ、ハンサムさん

187

いらっしゃいませ、防波亭へようこそ

決戦、ビート！ 前編 ━━

決戦、ビート！ 後編 ━━

紅茶の香りに、ポフインを添えて

208 195

178 171 155 147 135 125

ジムチャレンジ、終了
届け、ホシガリスボーズ

223

250 238

ようこそ、初めてのガラルへ

さあ、あなたもやつてみよう。

両手を固く握りしめたまま両腕を真っ直ぐ上に伸ばす。

ゆっくり手を下ろし始め、右の握りこぶしは右の頬に、左の握りこぶしは左の頬にくつつける。

そして渾身の大声で叫ぶんだ。

「——ホシガリス、ポオオズ!!」

届け、ホシガリスピーズ！

空港の搭乗ゲートをくぐり、生まれて初めてガラルの地を踏みしめた。

シンオウより温かく全体的に活氣がある。あちこちから聞こえてくるガラル語に、改めて自分が本当にガラルに来たことを実感した。

シンオウ地方。ガラルとは土地柄も文化も言語も違う場所で、かの有名なカントーなんかとは同じ言語を使う。土地全体がやや寒冷で、最北端のキッサキシティにいたつては一年中雪が降る豪雪地帯だ。以前にはギンガ団という組織がひどいことをしていたが、チャンピオン・シロナ達によつて組織は壊滅したと聞いている。

自分はそんなシンオウのノモセシティに住んでいる。近くにノモセ大湿原という有名な湿原があり、ポケモンと自然の保護及び研究が行われている。逆に言うと、それとジムしか名所のないめちゃめちゃ田舎だ。

「ようこそ、お客様。空飛ぶタクシーは始めてかい？ それならアーマーガアも始めてだね。見た目から凶暴に見えるかもしねないが、こいつは人懐こいから大丈夫さ。スピードはイマイチだが揺れは少ない、ゆつたりした観光にはうつてつけだよ」

ガラルに来たらまず探せと言っていた『空飛ぶタクシー』。空港を出てすぐに見つけた乗り場に近づいたら向こうから声をかけられた。黒光りする甲冑を思わせる羽を

まとつた鳥ポケモン、アーマーガアは主の言う通りだと言わんばかりに「カア」と一鳴きする。ヤミカラスにどことなく似ているが、近縁種だろうか。

「それでどちらに？ ジムチャレンジなら二日後開会式があつて、その後から試合が始まるからそれまで観光？ ……ほう、ラテラルタウンか。あそこには英雄の像があるからド定番だ。……ああ、人に会うのか。それでも見ていいなよ、かつてガラルを救つた英雄達の像を！」

あれを見つけたソニア博士の本を読んだかい？ などと続く運転手の会話を適当に相づちを打つて聞き流していく。申し訳ない、観光に来たんじゃないし、歴史を知るために来たんでもないんです。

「また移動の必要があつたらぜひこの番号にかけてくれ！ スマホロトムに登録させとけば何かあつてもすぐ呼べるからな！」

飛び去つて行く運転手に頭を下げながら聞き慣れない言葉を反芻する。スマホロトム、スマホロトムか。……あいつ扇風機や冷凍庫だけじゃなくて、スマホにまで入り込んだのか。それにあの言い方だと、何匹もいるつてこと？ シンオウじやあまり見つからないんだけど、やっぱり土地ごとの違ひつてあるんだなあ。

「こんにちは。君、もしかしてマキシさんから連絡を受けた……？」

しばらく待つていると、近づいてきた人に声をかけられた。白髪の男性が黒と紫を基調としたユニフォームを着てこちらの様子をうかがっている。おかしいな、確かに自分はマキシマム仮面にここで人と待ち合わせるよう言われたけど、相手はジムトレーナーであつてスポーツ選手じやないはず。

「そうそう、マキシマム仮面。有名な覆面レスラーでシンオウ地方ノモセシティのジムリーダー。水タイプのエキスパートにしてプロレスファンも抱える、我らがシンオウが誇るヒーローの一人。個人的なつながりはないけど、今回ガラルに来るために力を貸してくれた大恩人だ。」

「私はレイジ。この街にあるラテラルジムのトレーナーだよ。シンオウと違つてこっちではトレーナーは公式戦の時、ユニフォームを着るルールがあるんだ」

レイジさん。確かに待ち合わせの相手の名前だ。生まれも育ちもガラルだけど縁あってマキシマム仮面と知り合いだつたらしく、今回のジムチャレンジをフォローしてくださるのだ。そんな大切な人をジロジロ見てしまつたことを詫びる。

「いいんだよ。土地が違えば文化も違う。さあまずは私の家へどうぞ。ガラル以外の土地からのジムチャレンジヤーは珍しいから、今から色々教えてあげよう」

そう。わざわざ遠いシンオウからここガラルに来た理由。それはここで行われてい

る年に一度のジムチャレンジに参加するためだ。

レイジさんの家にお邪魔し、お茶をいただいてから本題に入る。まずレイジさんが渡してくれたのは白い封筒に入れられ、厳重に封がされた手紙。

「これが推薦状だ。いくらマキシさんがジムリーダーでも他地方だからね、推薦状は作れない。だから私名義で作つておいたよ。これをエンジンシティのスタジアムにいる受付に渡せば申請完了になる。なくさないように……つて、10歳の子どもならともかく、君のような大人にわざわざ言うことではないね」

そう。自分は23歳、立派に仕事をしている大人だ。ノモセの近くにある飲食店スタッフとして、店長の手伝いとして日々料理を作つてている。結婚はしてないけど独り暮らしをしてて、今も職場には長期休暇を取つてここに来ている。……ジムチャレンジ期間が終わつたらシンオウに帰らなくてはならない。

「次にユニフォームだけど、チャレンジヤーには無料で一着おそろいのユニフォームが配られる。……これだね、白いやつ。それとは別にガラルの各ジムはジム専用のユニフォームを販売してゐる。大人の君なら分かると思うけど、ジムの運営資金のためであり、同時に宣伝のためもある。君が望むならウチのラテラルジムユニフォームをあげ

ようか？ ゴーストタイプのジムらしい配色だろう？」

なるほど、ユニフォームの真ん中にプリントされているマークはジムのロゴなのか。俗に言う人魂の形をしていたのはゴーストタイプだからか。この人には大変助けられている。ユニフォームはありがたく着させてもらうこととした。

「開会式には白い方を着るルールだから、公式戦の時からそつちを着るように。次にタウンマップは持つてるかい？ ……なかつたか。それならあげるよ。持つていきなさい。それとこれも。チャレンジャーに渡されるバッジホルダーだよ。ジムからもらつたバッジはこれにはめておくようにな。それとスマホはあるかい？ ……ロトム？」

ああ、入つて無くても失格とかにはならないから大丈夫さ」

良かつた。スマホにロトムが入つてなければならない、なんてことになつてたらお先真つ暗だつた。

「多少不便だけど活動できることはないと思うよ。そういうやシンオウにはそもそもロトムはいるのかい？ ……いるけどスマホには入つてない。ふうん、やつぱりポケモンは同じでも生態は違うんだねえ」

レイジが「なあ？」と声をかけるとポケットからスマホが飛び出して「ロト！」と電子音で応えた。さすがはゴーストタイプ使い、当然ロトムも持つていたか。そんな視線を感じてか「スマホロトムはバトルに使わないよ」と教えてもらう。一切バトルはせず、

日常のパートナーなんだそうだ。ガラルすごい。

「こちから渡すものはこれで全部だけど、エンジンシティで買い物しておくものを教えるよ。バトルじゃなくてジムチャレンジに必要なものさ。本当は自転車が欲しいけどそれは無理だろう。となると必要なのは——、カレーだね」

……カレー？

「カレー知らないのかい？」

いやいや知ってる。良く知ってる。トレーナースクール生人気給食トップ10に入るみんな大好きカレーライス。でも何で今、カレー？

「ああ、ジムからジムへ移動する時大抵キャンプで食べるのがカレーなんだ。ポケモンも大好きだよ？」一緒にカレーを食べたイーブイがブラッキーに進化するなんて話もよく聞くし

ポフインは。シンオウでポケモンとの絆を上げるつて言つたらポフインである。その文化は存在しないのか。せっかくポフインケースと小鍋も持ってきたのに。

ちなみにポフインはポケモン用の焼き菓子で、見た目は人間が食べるマフィンのような物。ただその生地に煮詰めた木の実を使うため、その木の実の出来に味が左右される。煮詰めるのが上手い人が作つたポフインは高額だが買い手は多く、特にコンテストやポケウッドに出るポケモン達がコンディションを調整するために食べるのだ。

「ポフインはないなあ。木の実は人の敷地でなかつたら自由に取つていいから作ることはできると思うよ。ただ、ワイルドエリアではカレーを何人かと作る方が効率がいいから覚えておくといい」

ワイルドエリア？ その問い合わせにレイジは含みを持たせた笑顔を浮かべ 「その時になつたら説明されるよ」とだけ告げる。今は入る資格がないらしい。どんな所なのだろう、ワイルドエリア。

「ということで、ここでできる説明は終わりかな。開会式は明後日だから、今日はラテラルジムが抑えるホテルに泊まりなさい。明日エンジンシティに行つて必要なものを買って受付をすませる。いよいよその次の日が開会式。そこから君のジムチャレンジが始まるんだ」

そこでレイジは一度呼吸を整えると、「最後に二ついいかな」と前置きした。続きを促す。

「マキシさんに聞いてるんだけど。君のジムチャレンジの目的がチャンピオンになることじやなくて……、前チャンピオンのダンデに会うことだつてのは本当かい？」
うなずく。

「そうか。今のダンデがいるバトルタワーに行くにしても実績が必要だから、ジムチャレンジで手っ取り早くその実績を作るんだね？」
うなずく。

「その……。どうしてダンデに会いたいのか、聞いても？」

申し訳ないが、言いづらい。別にやましいとか悪いことをするためとかじやないのだが、涙を誘うような動機でもなければこれが本当に正しいのかも分からぬ。はつきり言えば、手紙でも済むようなことなのだ。

ただ、どうしても。どうしてもポケモンバトルという形を取りたかった。どうしてもトレーナーとして会いたかったのだ。

答えに窮していると「無理には聞かないよ」と気をつかつてもらつてしまつた。

「最後の一一つ目だけど。君のポケモンを見せてくれないかな。この歳までトレーナーをやつてると、ポケモンを見ればある程度の人となりは分かるからね」

うなずいて腰に手を伸ばし、二つのモンスター・ボールを投げた。

「グレッグルと……、ええと、こっちのポケモンは？ ガラルでは見たことないポケモンだね」

一匹目はグレッグル。どくづきポケモン。青い体、さらしを巻いたような胴、人のような二足歩行。ノモセ大湿原のマスコットポケモンもある。

そして二匹目はこおろぎポケモン、コロトック。赤茶色の体にナイフのような二本の腕、こちらも虫でありますながら二足歩行。確かにガラルにはいないポケモンだ。

「ふーむ、なるほど……。こっちのコロトック、特に君に懐いているね。付き合いも長そ
うだ」

その通り。コロトックは十年前からの付き合いだ。グレッグルは一年前に捕まえた
ので、確かに懐きは差がでている。こればっかりは仕方ないことだ。

「ありがとうございます。もう私から言うことはないよ。ダンデはバトルタワーのオーナーになつ
てからも度々他の場所で目撃されているらしい。君の目的が果たされたといいね」

ありがとうございます。お礼と共に、マキシさんに託されていたノモセ名物を渡す。
湿原で土産物販売されている『グレッグルまんじゅう』だ。15個入りで、とても精巧
なグレッグルの顔の形をしたまんじゅうに紫いもあんがぎつしり詰まっている。食べ
たときに口が紫色になる様子が毒の再現そのままと言われる、ある意味有名なお菓子
だ。

「……素敵なお土産ありがとうございます」

明らかにひきつったレイジさんに向けて、グレッグルがとびつきりのウインクとサム
ズアップをかましていた。

ガラルポケモン、初ゲット

十年前、シンオウ地方。

『皆様、大変お待たせいたしました！　いよいよエキジビションマッチが始まります！　今回は共に若くしてチャンピオンの座についた、天才同士の対決となつております！』

スタジアム中に歓声が響く。誰も彼も、瞳を輝かせてトレーナーの入場を待つている。隣に座つてお父さんはすでに涙を浮かべながら『シロナ』と書かれたうちわを握りしめている。そんな父を母が般若の形相で眺めている。

『まずは我らがシンオウが生んだ才媛！　考古学者でありながらチャンピオンの座を守る、シンオウ最強のトレーナー、シロナアアツ!!』

大歎声と共に入ってきたのは長い金髪を揺らす女性、シロナ。隣からうおおとういう嗚咽が聞こえてきた。これはお父さん、一ヶ月は家事全部やらされるな。

『対するチャレンジャーはガラルが産んだ奇跡の少年！　公式戦デビューの年にチャンピオン就任、以後防衛成功記録を更新中！　ガラルポケモンリーグ委員会委員ローズ氏

も見守る中、入場するは、新進気鋭の若き天才、ダンデエエツ!!

おおお、と会場が沸き上がる。シロナの相手にとつて不足なしと判断されたからだ。わざわざガラル地方から応援に来た人たちもいるらしく、聞き慣れない言葉も耳に届く。

「まあ、カワイイ顔した男の子ねっ！　あなたより少しだけ年上ってとこ？　……あら？　そんな驚いた顔してどうしたの？」

——あのダンデさん、さつきまで一緒にいた。

この返答を聞いてポカンと口を開けていた母を、今でもよく覚えている。

ガラルに着いて二日目。ラテラルタウンを出てエンジンシティへ。レイジさんが呼んでくれた空飛ぶタクシーでたどり着いたそこは、ラテラルタウンと違つて都会だつた。田舎者の自分にはラテラルタウンの方が落ち着く。

「いらっしゃいませ」

トレーナーグッズ専門店に入る。そういえばさつき昇降機に乗つてみたが、思ったより勢いがあつてびっくりした。吹つ飛ばされるかと思った。

「カレー鍋ですか？ こちらのキャンプセットの中に入つてます。テント、鍋、調理器具一式、寝袋、あとウチのイチオシ、トロツゴン製石炭ですね。着火しやすいのでこれがあればカレーがすぐに適温になりますよ！」

手痛い出費だ。社会人トレーナーは親からの仕送りなどないので、自分の財力でジムチャレンジをしなくてはならない。特に自分のような他地方の人間は帰りの交通費もバカにならないので、節約しなくてはならないところにコレである。

「ジムチャレンジ期間のホテルですか？ 確かにスポミーインは無料提供されますが、毎日律儀に戻る人は少ないです。基本的に道中でポケモンを捕まえたりバトルしながら進むので、キャンプで寝泊まりしながら町から町へ移動しますね」

そりやそうだ。自分も一度だけジムバッジを集めようとしたことがあるが、ジムからジムへの道中出会うポケモン、トレーナーなどとの戦いを経て強くなるのは大切なこと。キャンプのための金を浮かせてホテルから最短距離でジムを巡つてもいいが、ポケモンの成長は間違いなく阻害されるだろう。

「お買い上げありがとうございました！」

爽やかな笑顔の店員に見送られ、重たくなつた荷物を見る。大丈夫、シンオウに戻つ

たらこのキャンプセットで湿原キャンプしよう。そうすれば無駄にならない。そうさ、未来への投資だと考えれば大して高い買い物じゃない。うん。……うん。

「いよいよ明日、ジムチャレンジの開会式だ！ 望遠レンズは持ったかい？ お気に入りのジムリーダーを間近に見るチャンスだよー！」

露店のおじさんが声を張り上げている。そうだ、明日だ。明日からとうとうジムチャレンジだ。このジムチャレンジ中にダンデさんに会えなければ、ほぼ自分の望みは絶たれることになる。

「キリリ！」

「グエロツ」

町中の公園、人気の少ない場所で。ポフインケースを取り出した。そしてコロトックとグレッグルをボールから出す。前祝いだ、作つておいたポフインをあげて士気を高めてもらおう。蓋を開け、一つ取り出してグレッグルに。

「グエグエ」

ニコニコ笑いながらポフインをかじる。次はコロトックだとケースの中に指を入れ

るが空を切る。あれ、落としたかな。地面を見ても落ちていない。

「キリ、キリリリ！」

珍しいコロトックの激しい声を受けて顔を上げれば、コロトックが鋭い腕で何かを押さえつけていた。灰色の毛が生えたソレは、押さえつけられるがままにピクリとも動かない。

「キリリ！ キリリリ！」

声を聞けばだいたい分かる。どうやら捕まえたそいつがポフインを盗んだらしい。それを見つけたコロトックがとっさに押さえつけたのだ。自慢じやないが料理だけではなくポフイン作りにも自信がある。今回作ったオボン味ポフインはコロトックの大好物で、だからこそ怒り心頭、命令も無しに動いたのだろう。

怒るコロトックを見て、グレツグルが半分くらい食べかけのポフインをコロトックに差し出そうとしている。大丈夫だグレツグル、気持ちは嬉しいが毒タイプのお前が食べたポフインをあげたらコロトックが瀕死になる。だから安心して全部食べててくれ。

「グレ……」

申し訳なさそうにゴクンと飲み込み、コロトックが押さえつけていた下手人をグレツグルが持ち上げる。ようやくこそ泥の顔を見ると。

ほおぶくろをパンパンに膨らませたまま長い尻尾を丸めた灰色のポケモンが、キラキラと輝く瞳をこちらに向けていた。

「キキキイ……」

口の回りにポフインの食べかすを付け、ほおぶくろから少しづつポフインを飲み込むたびに味に感動しているのか体がブルッと震えている。最初は輝いていた目もしだいに恍惚に満ちた濁つた目に変わつてくる。なんだこいつ、泥棒のくせにちょっと嬉しい反応をするじゃないか。思わず照れてしまつた。

「…………

まずい、コロトックがシザークロスの構えをしてる。目が尋常じやないくらい鋭い光を宿してる。——主ともども殺す気だ！

「キキイツ」

気がついたらほおぶくろの中身がなくなつたようで、両手でほおぶくろを優しく撫でながら満ち足りた表情を浮かべている。そのポーズが妙に印象に残つた。と、次の瞬間そいつはグレッグルの腕から飛び出すと、一直線に旅の荷物の中に飛び込んだではない

か。ポフインを取り出す時にチャックを開けたままだつたのが災いした。

「キリリリイ！」

「グレ、グレエツ！」

シザークロスを発動する寸前、グレッグルがどうにかコロトックを羽交い締めにする。あ、危ない、そのまま発動したら例のこそ泥がミンチになる上に公園中に荷物が散乱してしまう。もう一度キャンプセットを買うのは勘弁願いたい、余分な金はないんだ！ 助かつたぞグレッグル！

「キキツ」

リュツクからお騒がせポケモンがピヨコーンと顔を出す。残念だな、鞄の中にはさつき買ったキャンプセットに付随しているカレールーくらいしか食べ物はない。だからお前がいくら探してもポフインはないのだ、ざまあみろ！ と笑おうとした顔がひきつった。

……そのポケモンが手にもつていたのはカレールーではなく、空のモンスターボールだつたのだ。

「キツ！」

待て待て待てこつちは金欠だからたくさんの中のポケモンを育てることはできないしこのジムチャレンジ期間も最高六匹まででどうにかやりくりしないといけないいうわああ

あアイツ自分でモンスター・ボールのスイッチ押して中に入つたあー！

ピコン、ピコン、ピコン、……パチッ。

お決まりのゲット成功を示す音を鳴らし、モンスター・ボールは非情にも泥棒の住みかとなってしまった。一瞬の出来事にコロトックもグレッグルも、そして自分も固まつて動けない。しばらく放心した後、ゆっくりと顔を見合わせると、はあ、と悲しいため息をもらす。

「グレ……」

コロトックを解放したグレッグルがモンスター・ボールを拾つてきてくれる。今回の旅、金錢的事情はあれど確実にジムチャレンジをクリアするために手持ちを増やしたいと思つてたのは事実。とんでもない形ではあるが記念すべきガラルゲット第一号とさせてもらおう。

「キリ！ キリ！ キリー！」

コロトックが両腕で腹をかき鳴らし、かなりパンクな感情を訴えてくる。ごめん、食べ損なつた。ポフィンはホテルで作り直して改めて食べよう。

「キキーッ！」

その瞬間ボールから飛び出し喜び勇んで駆け回る謎のポケモン。そんなに気に入つてくれたのか。こいつがやつたことは泥棒だけど、その反応は料理をする者には効果バツグンなのが辛い。結局我慢の限界を超えたコロトックのうとうを受けて爆睡した新しいポケモンを連れて、ホテル・スポミーインに向かうこととしたのであつた。

ジムチャレンジ、スタート

「……なるほど。お前のやりたいことは良く分かつた。確かに心残りつてのはそのままにしない方がいい。解決できるならそれにこしたことはねえ」

ノモセシティ、ノモセジムの一室。ジムリーダーのマキシは目の前の人間をじっと見る。ガラルのバトルタワーに行くため、ジムチャレンジに参加したい。どうやつたら推薦状を得て参加できるだろうか。そんな相談だった。

「悪いが俺は推薦状を出せないんだ。ガラルの人間が出すのが最低条件なんだと。その代わりガラルのジムトレーナーとかならだいたい誰でもOKみたいだな。子どもにやらせたい親が推薦状依頼を最寄りのジムに出すのが一般的らしいぜ」

ガラルにいる俺の知り合いに頼めば推薦状くらいは用意できるだろう。ただ、もつと根本的な問題がある。

「だがな。分かるだろ？ ジムチャレンジはポケモントレーナーが強くなるためのイベントだ。その上お前はただ参加するんじゃなくてダンデに会うためにガラルのバトルタワーに行かないといけねえ。こっちのバトルタワーとシステムは同じだろう、ただ単

に『ジムチャレンジに参加したトレーナーです。タワーに入れて下さい』ってんじや門前払いされるがオチだな。つまり、ジムチャレンジである程度の結果を残さなきゃつてんだ』

シンオウにもバトルタワーはある。そこに行くには強いトレーナーであることが条件だ。それこそジムバッジ全部持つのは最低条件で、タワーではより過酷なバトルが待ち構えているという。ガラルの物も同様だろう。マキシが言うのも最もだ。

「プロレスも同じよ。レスラーになるのは簡単だが、売れるためには結果が必要だ。無名のレスラーなんざゴロゴロいる。スポットライトに照らされた舞台へ上がれるのは、例え前座に出るのだって実績がなければ一生かかつても無理だ」

マキシはおうしつ！と叫びながら立ち上がる。そして目の前の人間を指差しながら宣告した。

「お前は十年以上前に一度だけジム巡りをして、一つだけジムバッジを得て終わつたんだろ？ 当時のポケモンたちも一匹を除いて野生に返したんだな？ そんなお前に推薦状の手伝いするにや条件がある。――このノモセジムをクリアしろ！ できたらツテに依頼してやる。このマキシマム仮面に二言はねえ！」

仕事をしている者にいまさらいくつものジムを巡るのは無理だ。職場に迷惑がかから。だが、全く戦えないトレーナーを他地方に送り込むのは向こうに失礼になる。目の

前にいるこいつが本気なら、ウチのジムをクリアしようと努力するはず。口先だけならどんな夢も語り放題だ。

「見せてみろよ、お前のやる気。俺は頑張る奴の味方だぜ！」

『それはホシガリスに間違いないね』

捕まえたポケモンを知るためにレイジさんに電話をすると、ガラル全土にいるメジャーなポケモン、ホシガリスだと判明した。ノーマルタイプで特性は『ほおぶくろ』。あの行動、納得の特性である。

『わりとタフだけど鈍足だよ。特殊攻撃、特殊防御は無いからそこに注意してバトルに 出すといい。もちろん特性を活かして木の実を持たせてね』

ポケモン図鑑などポケモン研究所とコネを持つ人間くらいしか持てない垂涎の代物 だ。普通のトレーナーは行動や生態から推測しながらそのポケモンのことを理解して いくことで、ポテンシャルを引き出すことができる。

「キリキリ」

レイジさんにお礼を言つて電話を切りつて振り返ると、コロトックとグレッグル、そ

してホシガリスが仲良く同じ皿からポフインを取つて食べている。ホテルに入つてポフインを作り直し手持ちの三匹に振る舞つたところ、すつかり三匹は打ち解けていた。ホシガリスもある程度木の実を渡しておけば、盗み食いなどをする危険はないようだ。

「グレ」

袖を引つ張られたので下を見ると、グレッグルが皿を示している。……待つて、多めに作つたはずのポフインが無くなりつつある。どれだけ食べるのホシガリス。ガラルの木の実が取り放題で本当に助かつた。

『……明日の天気は晴れですが、キバ湖周辺は霧がかかるでしょう。他のワイルドエリア内天気は以下の通りです』

いよいよか。いよいよ始まるジムチャレンジ。どうなるかななんて分からぬ。すでに想定外の形で三四目が手に入つてゐる。この先も楽にいけるとは思つてない。とにかく今できるのは、ポフインをもつと作り置きしておくことだ。それが終わつたら寝よう。次にベッドに入れるのがいつになるか分からぬのだから。

快晴のエンジンシティに花火が上がつてゐる。大勢の観客がスタジアムに集まり、開会式の始まりを今か今かと待ちわびてゐる。

『さあいよいよ今年も始まります、ガラルで最も盛り上がるイベント、ジムチャレンジ！一昨年のチャンピオン交代という劇的な体験はまだ我々の心を熱くします。今年もあるような戦いが待っているのでしょうか？』では、大会委員長のダンデ氏に代わります』

控室にいる大勢の子どもチャレンジャーに形見の狭い思いをしていたが、ダンデさんの名前に弾かれるように壁のスクリーンを見る。そこには確かにあのダンデさんが映っていた。心臓が跳ねる。ダンデさんは挨拶、様々な諸注意を説明していく。

『……最後になりますが、今年のジムチャレンジ、本当はエンジンシティはカブさん担当だつたのですが、急遽帰郷する必要が出てしまったため、外れてもらいました。その代わりとして、メジャージム昇格寸前の二つのジムリーダーから好きな方を選んで挑めるようになっています』

『はい、こちらは毒タイプ専門のクララさんとエスパータイプ専門のセイボリーさんですね。最近頭角を現してきた二人なのでダンデさんも楽しみなのではないですか？』

『そうですね。一人とも今までにいないタイプのジムリーダーなので期待しています。この点が例年までとは違うので、確認をお願いします。以上です』

『はい、ダンデさんご説明ありがとうございました。それでは今年は九人のジムリー

ダーに入場していただきましょう！』

フィールドがライトで照らされ、入場口から九人のジムリーダーが姿を現す。途端に会場は黄色い悲鳴で埋め尽くされた。戦う順番にジムリーダーを確認していく。

一つ目、ターフタウンのヤロー。

二つ目、エンジンシティのセイボリーもしくはクララ（日替わりで好きな方一名）。

三つ目、バウタウンのルリナ。

四つ目、ラテラルタウンのオニオン。

五つ目、アラベスクタウンのビート。

六つ目、スペイクタウンのマリイ。

七つ目、キルクスタウンのマクワ。

八つ目、ナックルタウンのキバナ。

驚くほど若いジムリーダーばかりだと感じつつ、タウンマップに素早く今までの情報を書き込んで行く。地の利がない以上こういった情報が攻略の助けになるはずだ。シンオウに帰るという明確なタイムリミットがある以上、無駄な行動は避ける必要がある。

『そしてそして！ 八つのジムリーダーを下した者の中から一名のみ、ファイナルトーナメント

ナメントへ進むことができる！ 本気のジムリーダーを下した先に待つのは、我らがチャンピオンその人だ！』

プシューとスマーキーが立ち上ぼり、まだ子どものチャンピオンが入ってきた。スポンサーが印字されたマントが妙に大きく見える。この子がダンデさんを倒したチャンピオンか。不思議な雰囲気を感じる。きっとそれは神に愛された才能なのだろう。

『これから、ジムチャレンジが始まります——』

チャンピオンのあいさつが終わり、最後に自分を含めたチャレンジヤーがフィールドに入場して開会式は終わった。最後の方は放送の声は聞こえていなかつた。

離れた所にいたダンデさんを、じつと見つめていたからだ。

今はまだ、数多のチャレンジヤーの一人でしかない自分が彼の目にとまるのは不可能だ。でも、このジムチャレンジの中でどうしても存在を認知してもらわなくてはならない。やりたいことと、伝えたいことがあるから。

『……以上で開会式を終わります。最初はターフタウンからです。皆さんの健闘をお祈りしています！』

熱氣にあふれるエンジンシティスタジアムを出る。チャレンジヤーのほとんどは十

代だ。「絶対チャンピオンになる!」「ワンパチと一緒に勝てるもんね!」と盛り上がりしている。一方で自分と同じ、あるいは年上のチャレンジャーは誰も彼も無言で真剣な表情をしている。自分と同じで何らかの『動機』を抱えているのだろう。

「ターフタウンは三番道路からガラル鉱山を抜けて、四番道路の先にあるんだよ!」トレーナー達は我先にと街の外へ向かう。その先にある夢に向かつて走り出す。さあ自分も向かわなくては。

行こう、みんな。

ジムチャレンジのその先で、ダンデさんに会うために。

到着、ターフタウン

……俺は、迷っていた。

初めて来たシンオウ地方、空港までは順調だつた。空港からスタジアムに向かう途中、見たことないポケモンを見つけて追いかけたのがいけなかつた。

「リザードン、ダメか？」

空から降りてきた相棒に問うが、眉間にシワを寄せて首を横に振る。仕方ないことだ、リザードンだつてシンオウは初めてなんだ。空から見たつてここがどこだか分かる訳がない。

「ん？ でもあつちに屋根が見えた？ そうか、そこまで行けばなんとかなるかもしけないんだな！ よし今すぐ行くぞリザードンつて何で俺の服を引っ張るんだ！ え？ そつちじやない？」

結局リザードンに乗つて空を飛び、屋根の方に行く。ところがそこは廃屋か何かで人はいなかつた。困り果てたところに、ガサガサという草むらをかき分ける音。ハイパーボールを構えたダンデの前に、年の近い子どもが飛び出してきた。

「——野生のトレーナーだな!?」

……それが、ダンデさんが自分にかけた初めての言葉だつた。

「キキッ！」

ホシガリスに攻撃の指示を出すと、ガラル鉱山で出てきた野生のコロモリに飛び上がつて噛みついた。コロモリは甲高い声で叫ぶとヨロヨロしながら飛び去つていく。ホシガリスはたくましい笑顔を浮かべてコロモリを見送ると、すぐさま木の実をくれとねだつてきた。ふんぞり返つて指示への連携はまだまだだし、第一木の実はバトル前にあげたばかりじやないか。

「キキキイ……」

もらえないと人生、いやリス生が終わつたような顔で落ち込むので見ていて辛くなる。こちどら料理人の端くれだ、飢えで嘆かれるのは辛すぎる。

「こんにちは、あなたのポケモン元気ですか？　疲れてるなら手当てしますよー」
鉱山を出てすぐのところにボランティアらしい人が立ち、トレーナーに声をかけていた。ガラルでは地域全体でジムチャレンジを応援するのが当たり前らしく、野生のポケ

モンが多く出る場所の近くには必ずボランティアがいて治療してくれる。なんてありがたいんだ、きずぐすりを買うお金が浮く。

「ターフタウンですか？　ええ、この道をまっすぐ進んでいけば着きます。今時期はとにかくジムに挑むトレーナーが多いから、町に着いたらすぐジムに予約いれた方がいいですよ」

そうか、開会式に参加したチャレンジャー全員がターフタウンに向かうつてことは、ジムへの挑戦は順番になる。チャレンジヤーは山ほどいても、ターフタウンのジムリーダーはヤローただ一人なのだ。

「ジムチャレンジ、頑張ってくださいね！」

礼を言つて道を進む。野生のポケモンと遭遇したり休憩したりしながらよいよターフタウンのスタジアムが見えた頃だ。

「わあああああん!!」

けつこう近い所から子どもの悲鳴が聞こえてきた。横の小高い丘を見れば、白いユニフォームを着た子どもが泣きながら坂を駆け降りている。その後ろから白い毛玉が転がり落ちてくる。……いや、毛玉じやない。モツコモコでフワフワな白い毛を持った、目の横で三つ編みに毛を束ねたおしゃれなポケモンだ。そいつが走ることを諦め、慣性の法則のままに坂を勢い良く転がり落ちているではないか。

「わあああウールーが止まらないよおお！」

「グメエ～！」

あいつウールーっていうのか。つてぼーととしてられない。子どもは今にも足がもつれそうだし、ウールーの速度は上がるばかりだ。声を上げながら子どもとウールーの間に入り込んだ。

「グメエツ～！」

見事に腹に突っ込んできたウールー。さつき食べたボブの缶詰が胃を逆流しかける。肺にあつた空気が全て鼻と口から出ていき、あまりの衝撃に自分が初めて友達に腹パンくらつた時のことを思い出した。いやあれも辛かつたよ、子ども心に。

「ああつ～？」

ウールーの直撃を避け、すっかり腰を抜かした少年がさらに悲鳴を上げる。ねえ待つてこれ以上の惨劇が来るの？ そう思つて顔を上げると。

さらに二匹のウールーが、こちらに向かつて転がり落ちてきていた。

やめてよ。もう無理だよ。一匹の衝撃ですでに意識が十年以上遡つたんだよ。二匹なんて、まだお母さんのお腹の中にいた頃に戻っちゃうよ。

ジムチャレンジはおろか人生を諦める羽目になると思わなかつたため、精神への過負荷を避けるため思わず目を閉じた。さよならガラル、さよならカントリーロード。

「……つと、元気なウールー達だなあ。はしゃぎすぎると危ないぞ？」

ジンギスカン鍋になると思い込んでいたが、いつまでたつても衝撃がこない。恐る恐る目を開ければ、どこかで見た男性が二匹のウールーを抱き抱えていた。嘘、あの衝撃を人間の身でいなしたの？ この人実はメタモンなのでは？

「すみません、助かりました。おかげで怪我人無しですわ。本当に本当にありがとうございます」

そう言つて目の前の男性、ヤローさんは深々と頭を下げる。まだ小脇に二匹のウールーを抱えたままである。

「ジムチャレンジのためにウールーを集めていた最中でしてね。これで全部です。あなたのど根性も見せてもらいました。ジムチャレンジ、楽しみにしますよ」

これお礼ですか、とげんきのかけらをもらつた。そのままヤローさんは自分の腹に食い込んでいたウールーをひつぺがし、腰を抜かして泣きじゃくる子どもをなだめに行く。……ジムチャレンジにウールーを使う？ またあの体当たりされるの？ シンオ

ウのものとだいぶ違うなこの土地のチャレンジは！

とんだ大波乱があつたものの、無事にターフタウンに着いた。スタジアムに行つて申し込みをする。すでに大勢のチャレンジヤーが見える。これは明日になつても無理かもしれない。ところが。

「ヤローさんから聞いています。ウールーがお世話をかけたそうで。特例で明日の朝一番にお受けしますとのことですので、明朝にいらしてください」

なんと、情けは人のためならず。ありがたい。今日しつかりと準備して挑ませてもらおう。

「当日こちらでチャレンジヤーの確認をしたらあちらから入り、ジムごとに異なるミッショニンに挑戦してもらいます。ミッショニンをクリアしたら一度手持ちのポケモンの回復などをし、スタジアムでジムリーダーとのバトルです。勝てば一つ目のジムバッジを進呈します。なお、勝つまで次のエンジンシティでのチャレンジに挑むことはできません。他に質問はありませんか？」

一番気になつてたことを聞く。

「……ジムミッショニンの内容は言えませんが、その、ウールーを体当たりさせることだけは絶対にありませんよ。あなたののような大人はともかく、子どもにそれやつたら傷害罪になりますからねませんし」

じやあ何に使うの、ウールー。

受付を終え、買い物をすませた夜。ターフタウンの丘や遺跡の周りにはいくつものテントが設営されていた。自分のような朝にチャレンジする者がホテルに帰らず残つたからだ。

「キリリ、キリリー」

十年来の相棒、コロトックが腹を腕の鎌でこすり、ゆつたりしたメロディを奏でている。コロトックは仕事のパートナーでもあり、食材を切つたり店で一曲奏でてくれたりするデキるやつだ。その素晴らしい演奏を聞いてホシガリスはニヤニヤしながら舟をこいでいる。あいつ夢の中でも木の実を食べてるに違いない。

「グレグレ」

一方のグレッグルは明日ポケモンに持たせる道具のチエックを手伝ってくれている。好戦的な性格でありながら自分なんかと一緒にいてくれる貴重な仲間だ。バトルしなくともサンドバッグさえあれば満足するらしく、店の裏でよくサンドバッグ相手に暴れている。この二匹がいなければ自分はここにいない。それだけは間違いない。

「すぴー……すぴやー……」

寝入ったホシガリスを無視し、荷物をまとめながら明日の試合の注意事項を思い出す。ポケモンは最大六匹まで使用可能で、入れ替えも自由。回復も適宜可能で持たせる道具は一匹につき一つ。それと気になることを聞かれた。

『ダイマックスはさせますか?』

ダイマックス。軽く聞いたところによると、ポケモンを巨大化させるバトル形式らしい。だからこそシンオウのようなジム内でバトルではなく、スタジアムに移動してのバトルになるとのことだ。巨大化ってどういうことだろう。

実はダンデさんに会いたいなどと言いつつ、ガラル地方の試合は見たことがない。テレビで放映されなければ基本的に他の地方の試合なんて見ることはないし、テレビで流すのはそもそも自分達の土地の試合だ。そういったよその試合を流す衛星番組は高いから契約していない。

そもそも一年前まで自分はトレーナーですらなかつた。子どものときにトレーナーを夢見てあつさり現実を突きつけられ、今や料理人になりたての大人にすぎない。ノモセジムを攻略するのに一年かかったのだ、自分に相変わらず才能がないのは誰より分かつている。

「あつ、流れ星! ねがいぼしのかけら、落ちてないか探しに行こうよ!」

どこかのテントから聞こえた声にうながされ、見上げた黒い空を横切った銀色の光。ダンデさんに会えますように。三回早口で唱えてポケモン達をモンスターボールに戻し、寝袋に入つてランプを消した。

決戦、ヤローー！

「勝者！ チャレンジヤー！」

はあはあ、と荒い息をついてブールサイドに座り込んだ。コロトックも限界だつたのか、宣言が終わつたとたんにひっくり返つてしまふ。フローゼルをモンスター・ボールに戻したマキシマム仮面はニカツと笑つて拍手した。

「終わつちまつたか。お前と戦えて楽しかつたぞ。何より、俺もお前も楽しめる試合ができた良かつた。……久しぶりの勝利の味はどうだ？」

まだ膝がガクガクと震えていたが、気持ちは昂つていた。勝てた。ジムリーダーに勝てた。一年かかつたけど、勝つことができた！ 自然と顔が笑顔になる。

「約束だ。向こうの知り合いに推薦状の依頼をしておく。今ならギリギリ今年のジムチャレンジに間に合いそうだな。ところでお前の目的の話、俺も考えてみたんだがよ。……保険をかけておくのはどうだ？」

ターフタウンのスタジアムコート入場口。ラテラルタウンジムのユニフォームに身を包み、緊張で震える体で呼ばれるのを待つ。ジムミツションはまさかのウールーをゴールまで誘導する牧羊犬体験だつた。コロコロ転がるウールーは可愛いが、誘導のために走り回るこつちはたまつたもんじやない。

『それではジムリーダー、チャレンジャー、共に入場して下さい』

きた。ついに呼ばれた。ガツチガチに固まつたまま、なんとかコートの中央まで歩く。向かいからはヤローさんも歩いてくる。中央で向き合うと、ヤローさんは和やかな笑顔を見てくれた。

「そんなに緊張しないでください。大丈夫、まだ一つ目のジムですよ。昨日ウールーを受け止めたど根性があれば、僕らに勝てるはず。……よそで少しジムの経験があると聞いりますんで、ダイマツクスさせてもらいますわ！」

よろしくお願ひします、とだけ返して二人は距離を置く。朝一番だというのにスタジアムにはそれなりに客がいる。轟く歎声の中、ついにジムリーダーとの戦いが始まつた

！
「頼むぞお、ヒメンカ！」

「グレッグル！」

フィールドに現れたのは見たことのないポケモン。花を模しているから間違いない草タイプではある。問題は複合タイプがあるかどうか。こちらのグレッグルは毒と格闘タイプなので、毒が効くなら試合を有利に進められる。

「うーんこれは……、ヒメンカ、りんしよう！」

「グレッグル、どくばり！」

可愛らしい声を上げて歌い出すポケモン。しかしこちらのどくばりを明確に嫌がつてかわしたのを見逃さない。あの避けよう、間違いなく毒の複合ではない。どくばりが決まれば有利になる。

「グレッグル、ちようはつ！」

「落ち着けヒメンカ！ 挑発に乗っちゃダメだ！ こうそくスピンで無視してつつこめ！」

グレッグルが力チンとくる顔をするもスピンをかけたヒメンカは見ていない。グレッグルがちらつとこちらを見た。……なるほど、受けるのか。

「グレッグル、待ち構えろ！」

「待ち構え……、ん、そうか、グレッグルは格闘タイプ。リベンジ狙いかあ。ヒメンカ、そのまま倒す勢いで突つ込んでやれ！ 腰を入れるんじやあ！」

これだからプロのポケモントレーナーは嫌だ。強くないトレーナーの頑張つて構築

した手をいとも容易く見抜いてくる。ただし今回は十年前と違つてジムチャレンジを進む明確な理由がある。見抜かれたからと負けられない！

二匹のポケモンがぶつかり合う。グレッグルが圧されていく。かなり厳しい表情になつたが、それでもヒメンカの花部分を全身で掴み、見事回転を止めてみせた。

「グレッ！」

氣合いの一吠え、掴んだヒメンカに膝蹴りを叩き込んだ。リベンジは後攻で必ずダメージを受けるが、代わりに相手に大ダメージを与える技。まともな一撃を受け、ヒメンカは甲高い悲鳴を上げながら後ろに下がろうとする。

「逃がすな！　どくばり！」

グレッグルが素早く腕を振り抜くと、射出されたどくばりがヒメンカに刺さる。ヒメンカはしばらくまだ戦おうと歯を食いしばっていたが、やはり毒は効果抜群だったようでへなへなと倒れてしまつた。

「よーしよし。頑張ってくれたなあヒメンカ。ありがとなあ」

ヤローは優しい声でポケモンを労る。次のボールから出てきたのはまた見覚えのないポケモン。ヒメンカに似た顔をしながら頭の部分が綿のようになつてている。順当に考えれば進化形か。

「このワタシラガが最後のポケモン。うん、グレッグルとの絆。ポケモンへの理解も十

分あつて良いトレーナーですわ』

今出したばかりのフワフワ漂うポケモンにヤローは再びボールを向ける。取り替え
るポケモンはいないつて自分の口で言つたばかりでは? そんな心の声が表情に出て
いたのだろうか、ヤローはいたずらつ子のような笑顔で告げた。

「もう少し下がった方がいいかな。——ダイマックスするからのう!」

ヤローのリストバンドが赤色に輝き、手に持つたボールも同じ色に発光する。ワタシ
ラガをボールに戻したその時だ。

ボールが、人の顔よりもはるかに大きくなつた。

啞然とする中、観客もヤローも慣れたようにその現実を受け入れる。巨大化したボ
ルを優しくポンポンと叩いてから後方に力一杯投げ上げると、観客席から大きな歓声が
響く。ボールから出てきたワタシラガは段階的に文字通り『巨大化』し、紅色の雲を身
にまとわせてヤローの後方におさまつた。

『顔つきからカブさんと同郷かなつて思つとつたんですが、当たらずも遠からずですか

ね。これがダイマックス。初めてのダイマックスが僕なら光栄だなあ』

ダイマックス。これが、ダイマックス。想像してたのはせいぜい一回り大きくなる程度のもの。それがどうだ、スタジアムの高さほどに大きくなつたではないか。威圧感も存在感も全てが桁違い。好戦的なグレッグルもさすがに見上げたまま固まっている。

「ジムチャレンジ最初の関門としての責務を果たさんとなあ。聞いといてくださいね？」

はつ、と我に返る。ヤローさんはわざわざ説明の時間をとつてくれるつもりなのだ。この人が一つ目のジムを任せられている理由が分かつた気がする。

「まず大前提として、ダイマックスしたポケモンは体力が飛躍的に上昇します。ダメージを負つた状態でダイマックスしても、加算される形で体力が増えます。さすがにダイマックスと同時に全回復つてのはないですわ」

つまり、経験則で倒せるダメージを叩き込んでも倒れない可能性が高いってことか。『次に、ポケモンが持つ技は基本的に効果が一律になるんだなあ。各タイプの技は『そのタイプ技として発生する効果』が同じで、ダメージの値が元々の技を反映するようになつります』

草技は草のダイマックス技に統合されるが、元々攻撃力が高い技ならダイマックスしても大きなダメージの技になるということ。なおステータス変化系統の技は全て『ダイ

ウォール』という防御技になるらしい。

「また、通常の技がダイマックスポケモンには通用しないってパターンもあるんで気をつけてください。あと状態異常は通ります。それと最後にダイマックスは各試合一度きり、一匹のポケモンのみ、時間で強制的に元に戻りますんで」

そう言うと、ワタシラガがぐぐつと体を浮かばせた。説明は終わりということか。今 の説明から引き出されるこちらの行動は……！

「グレッグル！ ピントレンズでよく狙つて！ 頭の綿はダメだ、顔か足の植物部分のどつちかにどくぱり！ せめて毒を残すんだ！」

「良い判断ですわ。そう、分かると思いますがこの巨体から放たれる技は『外す』つてことはあり得ない。——ワタシラガ、ダイアタック！」

目をこらして針を打ち込む場所を狙うグレッグル。そのグレッグルに、ワタシラガの巨大化した足部分の草が叩きつけられた。地震と間違えるほどの衝撃の後、爆煙の中から緩やかに浮き上がるワタシラガ。下にはコートの芝に倒れて動かないグレッグル。

「んー、一匹目は……？ 見たことないポケモンだなあ。多分むしタイプだと思つどるんだけど。どうじやろか？」

グレッグルを労りつつコロトックを出す。ボールから状況は分かつていたろうに、それでもワタシラガを見上げて固まる。しかしフルフルと首を振ると両手の鎌を交差さ

せ、戦闘意思を示した。

「良い顔をします……、ん？ ワタシラガ？ ……あちやー、毒が残つたか」

ワタシラガが巨大化したことで低くなつた苦悶の声を上げる。見れば目の近くにどうばかりが刺さつてゐる。グレッグルの最後の一撃は見事に爪痕を残していたのだ。

「コロトック、シザークロス！」

「やつぱりむしか！ むしタイプは苦手なんですわ。ここは足場を固める方が大事とみた。ワタシラガ、ダイソウゲン！」

羽を使って飛翔したコロトック、足部分に深く斬撃を入れる。一瞬敵の体が震えるも、ワタシラガは頭の綿部分を震わせて大量の種をばらまいた。それはコロトックを巻き込みながら大地に落ち、一瞬で種子を芽吹かせる。フィールド中が植物に覆われると大地が緑の光に包まれ、コロトックとワタシラガも同じ色に輝いた。

「グラスフィールド。微量とはいえ、この大地に隣接する全てのポケモンは体力を回復する。毒のダメージもあるけど、これなら遅延するはずじやあ！」

舌打ちをしてしまう。こんな巨大な相手、コロトックの耐久力では長時間相手にできない。だからこそ毒とシザークロスで大ダメージを稼ぎたかったのだが、回復されるとは計算外。コロトックも回復するとはいへ、あのダイアタックを受けたらもたないだろう。

「踏ん張れよ、ワタシラガ！　ここが粘りどころ！　農家は粘りが大事なんじゃあ！」

コロトックが指示を出す前にすでに羽を震わせ飛翔の準備をしている。そうか、分かつてくれるか。お前といいグレッグルといい、自分には過ぎたポケモンばかりだ。

「——シザーコロス！　ぎんのこなで威力を上げろ！」

「させちやならん！　ダイアタック！」

迫る巨体をギリギリでかわし、コロトックは渾身の力で顔面を斬りつける。ワタシラガは苦しそうな鳴き声を発しつつ、コロトックごとコートに倒れこんだ。押しつぶし。巨大だからこそできる技だ。

「コロトック……！」

「ん……、ダイマックスは時間切れか」

ワタシラガの体が赤色に輝き、みるみる本来の大きさに戻っていく。両者倒れたままだつたが、ワタシラガはふらつきながらも立ち上がった。

「さすがの根性じや、ワタシラガ！　……次のポケモンがいなければ僕の勝ちにさせてもらいますけど、どうします？」

コロトックを戻しながら状況を確認する。自分の手持ちはあと一匹いるが、先の二匹に比べると戦闘慣れもしてないし、意志疎通もそこまでではない。だがワタシラガもグラスフィールドの効果で少し回復しているとはいえ、あと一回攻撃が決まつたら倒せそ

うだ。どうする、あいつを出すか……!?

「……頼む、ホシガリス！」

「ん、ホシガリス。毛並みが良い子だなあ」

コートに出されたホシガリスは、一瞬状況が飲み込めておらず、キヨロキヨロと周囲を見る。ワタシラガを確認し、最後に自分を確認した。ご主人、マジでやるの？ と目が訴えている。

「……相手がもう一回グラスフィールドで回復する前にお前の攻撃が通れば勝てる。阻まれたら負ける。頼むよホシガリス。後で新作のポフインあげるから！」

ポケットからポフインケースを見せつける。中には新しいブレンドで作つたポフインが入つている。ホシガリスは視線をワタシラガとポフインケースの間を何度も何度も往復させ、目を閉じて考えて考えて、最後はちょっと泣きそうな顔でワタシラガを睨み付けた。

「うんうん、覚悟を決めたかあ。それなら容赦はしないぞ。ワタシラガ、マジカルリーフ！」

「ホシガリス突つ込め！ 接近して思いつきりかみつく！」

ダツと四つ足で駆け出すホシガリスを、虹色に輝く木の葉が的確に捉えて切り裂いて

いく。痛いのだろう、キキッと悲鳴を上げながら必死に走る。

「今だ！ オレンの実！ ほおぶくろで体力をさらに回復！ これなら間に合う！」

ホシガリスは尻尾から器用に木の実を取り出すと一口で食べる。ついでにとほおぶくろに残っていた食べかすも食べて気力も取り戻し、ワタシラガに飛びかかつて噛みついた。

「頑張れワタシラガ！ 耐えるんじや！」

「ホシガリス！ 噛め！ 絶対離しちゃダメだよ！」

「一匹」はもみくちゃになりながらコートを動き回る。ようやく動きが止まつた時、荒い息をついていたのは、ホシガリスだつた。ワタシラガは目を回している。

「勝者、チャレンジヤー！」

わあああと今日一番の歓声が響く。勝つた、勝つたのだ。座り込みそうになるが、その時言葉がよみがえる。

『ところでお前の目的の話、俺も考えてみたんだがよ。……保険をかけておくのはどうだ？』

『保険、ですか？』

『そうよ。俺たちレスラーが少しでも上に行くためにやることもある。……パフォーマンスだよ、パフォーマンス！ 勝った時にとびつきりの何かをかましてやるんだよ。ほら、ダンデはリザードンポーズつてウリがあつたんだろう？ だつたらお前も何かポーズすんのさ。目立てば向こうから声をかけてくれるかもしねえじゃんか！』

「どうか、今だ、今しかない。最も観客に注目されている今しかない。でも何のポーズにしよう。コロトック？ グレッグル？ どつちもあまり特徴がないし、コロトックはガラルでは知られてない。どうしよう……！」

「キキ？」

はつとすると、目の前に、そう、そいつがいた。思い出すポフインを食われた時のポーズ。それにレイジさんも言つてた、こいつは……、ホシガリスはガラル全土にいるポケモンだつて！

両手を握つて高く突き上げ、ゆっくり下ろして両頬に付ける。そして。

「——ホ、ホシガリス、ポオオオズ！！」

叫んだ。上ずつたけど、叫んだ。一瞬スタジアムが静まる。直後、どわああという大爆笑が降ってきた。ポーズのまま固まってしまい、嫌な汗が背中を滝のように伝う。

ヤツチマツタ。

今すぐ腹を裂いて死ぬか、と思つて前を見ると、ヤローさんも笑つている。でもそれは大笑いでも嘲笑でもなく、楽しそうな笑顔だつた。そのまま指さした先を見てみると。

「キツ！ キキツ！」

ホシガリスが、ホシガリスポーズをしながら大喜びでコートを駆け回つている。観客の笑いも嘲りではなくホシガリスをよく訓練されたポケモンと判断しての、ショーを見て笑つている類の物だつた。でもどうして？ たつた今たまたま思い付いたポーズなのに。

「いやーかわいいものを見せてもらつたなあ。よく練習したもんですわ。ホシガリスポーズ、キバナさんあたりが聞いたらSNSでやつてくれるかもしないと思うと楽し

みじや

違うんです、これは本当に今思い付いたポーズで、ホシガリスと打ち合わせなんてしてないんです。それにこのバトルもホシガリスを出す予定すらなかつたんです。「それなら、きっとホシガリスは嬉しかつたんだと思うなあ。ポケモンバトルに勝つた時に、主人はよりによつて自分の真似をしてくれたんだつて。嬉しくて嬉しくて、ああやつてみんなに見せつけとるんですわ」

すつ、と手を出すヤロー。それが握手だと気づいて、改めてこの人に勝てたつてことを実感した。……勝てたんだ、ジムリーダーに！

「まずは一つ、おめでとう。次も頑張つて。応援しとります。またホシガリスポーズ見せてくださいな！」

こうして。ターフタウンのジムチャレンジは、見事一発でクリアしたのであつた。

初めまして、ワイルドエリア

十年前。シンオウ、エキジビションマッチ。

リザードンとガブリアスがぶつかり合う。ガブリアスの地面技はリザードンに届かないが、リザードンの炎技はドラゴンのうろこを焼くことはできない。

互いにいくつかの手を封じられた上で戦いだが、だからこそ激戦だ。

「ガブリアス、りゅうのキバよ！」

「リザードン、エアースラッシュだ！」

接近しようとするガブリアスを空中に逃げながら迎撃するリザードン。ガブリアスはあなたをほるで回避しながら姿を消す。

「生ガブリアスかっこいい!! なあ母さん、分かるだろ!? あれがクールビューティー・シロナなんだ！ この世にあれほど最高な人はいないんだよ！」

「ええ……。分かったことがあるわ……。浮気より腹が立つパターンもあるってことをね……。鼻水たらしながら見惚てるんじゃないわよ……」

サメハダーより凶悪な表情になつたお母さんがちらつとこつちを見た。気配で何となくこつちを見たのが分かつただけだけど。

「で？ あなたもクールビューティーにメロメロとか言うの？」

ううん、と最低限の言葉で答える。今は一瞬すら惜しいので、できれば話しかけないでほしい。

あの空を駆ける炎竜とそのパートナーを、一秒でも長く目に焼き付けていたいのだから。

ターフタウンからエンジンシティに戻る途中、ガラル鉱山の奥。岩陰に無理矢理寝袋を出して引きこもつてているのは、ホシガリスポーズ考案者たる自分である。

「ホシガリスポーズ、良かつたボルよ！」

スタジアムの熱気から離れたとたん、恥ずかしさが頭から爪先までを駆け抜け、オマケにモンスター・ボールのコスプレをしたボール人間に声をかけられたことで羞恥心が爆発し、何とかガラル鉱山まで逃げてきたがそこで引きこもりになつてしまつた。マジ無理もうシンオウに帰れない。

『ぶわーっはっはっは！ そうかそうか一勝してポーズしたが、恥ずかしくなつちまたか！』

すぐる思いでマキシマム仮面に電話する。国際電話だから後で通話料めちやくちやかかるけど、背に腹は代えられない。

『なに、その恥ずかしいって気持ちはそのまま持つていいんだ。人前で何かをするつてのは想像以上に緊張し、視線を大げさなくらい感じるもんよ。新人レスラーも決めポーズやつた後部屋に引きこもる奴はいるしな』

そうなのか。自分が異常なんじやないのか。

『しばらくは人に言われるだろうし自分で思い出しても恥ずかしくなる。でも割りきれ！ やつちまつたぜはっはっはつて吹つ切るんだ。それより、ここからがお前の目的、本番だろ？ できるだけ勝つて、できるだけポーズして、できるだけダンデの目にとまるようしねえとな』

そうだ、そうだつた。むしろスタートを切つたばかりだつた。ここから走つていかないといけないのに、寝袋引きこもりを敢行している場合じやなかつた。

『頑張れよ！ 応援してるぜ！ ……ところでグレッグルまんじゅう、レイジのやつにウケたか？』

ホシガリスを野生のポケモンと戦わせてみたりしながらエンジンシティに戻つてきた。うーん、このホシガリス、戦いの指示は行動に移すまで嫌々やるから時間がかかる。防御の指示は瞬時に反応するんだけど。どちらか言えば耐久仕様か。ダイマックス相手にどこまで通用するのか。

「なあなあ、お前どっちのジムリーダーにする？」

「えー、毒タイプかエスパータイプかでしょ？ タイプ相性ならエスパーなんだけど、ほら、あのジムリーダーじゃん？ まだ毒の方がマシかなーって」

「えー！？ 僕ゼッタイあの女ヤダよ！ あれ若作りのオバサンじゃん！ だつたらまだ変人の方がいい！」

「うつそ、あっちの方がやだよ！ 何言つてるか分からないし、ボールくるくる浮いてるんだよ！？」

……どういうこと？ 近くを通りすぎたジムチャレンジャー二人の会話に首をかしげていると、街の東側と西側に二人のジムリーダーが出てきているという。恐る恐る見に行つてみると。

「ハア～イ！ クララよ！ 今年のジムチャレンジはクララの毒ジムでけつてえ～い！ わけワカメのエスパー選ぶなんてありえなあ～い！ クララをヨ・ロ・シ・ク～！ クララにクラクラ～！」

一方。

「皆さん！ ワタクシこそ未来予知で決まってるニューリーダー・セイボリー！ ここでワタクシを選ばないとウールーよりも人生下向きローリングしますよ！ さあヤドンのように揺れぬ心でレツツエスパージム！」

……どういう、ことだ。

「あはは、クララさんとセイボリーさんには参つちまうよな。ほら、今年は特例で二人からどつちか選んで挑むんだけど、実は選ばれた数が多い方が来年のメジャージム昇格へ近づくことが決まってるんだ。選ばれるつてことは支持されてるつてこと。ジムリーダーは腕だけじゃなくて人柄も大事だからね」

ポケモンセンターで話しかけてきたおじさんに聞いてみて納得した。どうやらこの二人のジムリーダー、どつとも性格に難がある上に必死すぎて空回りしている。ヤ

口一さんが神々しく見えてきた。爪の垢を煎じて飲むべきだ。

「君はどつちがいいんだい？」

実はそれは悩んでいた。手持ちの相性がどちらとも悪いのだ。まだエスパーがマシか。正直草ジムはウチのエース二人と相性が良いため強気でいられた。ところがそれでもダイマックスのせいで敗北寸前に追い込まれた。となるとエスパーも毒もダイマックスを使ってくるはず。多少は有利に立ち回れないと勝つ可能性すらなくなることになる。

「もし手持ちが不安なら、ワイルドエリアに行つて捕まえてくればいいんじやないかな？」

「ワイルドエリア？ そういうえばレイジさんも言つていたな。あれはジムバッジを一つでも持つていないと入れないとという意味だつたらしい。ちようどこのエンジンシティからも行けるようだ。確かに今のままだと不安も残る。行つてみよう。

「雨合羽があつた方がいいぞ！ なければ買つてきな。あとマフラーも」

窓から見えた空は快晴。今日は過ごしやすい気温。……雨合羽にマフラー？ おじさんは冗談を言つているようには見えない。念のため、とその二つを買つて行くことに。ブティックの店員によると、マフラーは一年中売つているらしい。何か嫌な予感がする。

このマフラーが、後に自分達を救つてくれるとは思つてもいなかつたのであつた。

広大な土地、日まぐるしく変わる天候、たくさんのポケモン。ノモセ大湿原よりも広大なそのフィールドに、開いた口がふさがらない。世界つて広いな、本当に。

「こちらはワイルドエリアの南半分になつてますよ」

半分!?

「あ、私はワイルドエリアスタッフです。何かあればいつでも相談にのりますよ」

サングラスを付け白いウエアを着た男性がにこやかに笑う。これはありがたい。初めてなので色々聞いてみる。捕まる数に制限はなく、キャンプも人の邪魔にならなければどこに設営しても大丈夫。ポケモンのレベルは高いのも低いのもいるので、相手のレベルが高すぎたら逃げることも必要。

「また、あなたのジムバッジの数ではエンジンシティより北側には行けません。説明はだいたい以上になります。初めての方にプレゼントをどうぞ」

差し出されたのは、カツブ麺10個セット。ありがたいけど、キャンプではカレーを作るつて聞いたんだけど。違つたのかな?

「これをカレーに入れるんですよ。いや違った、これにカレーを入れるんですよ」

それはもう別の料理なのでは？ 料理人として物申したいが必死に飲み込んだ。文化をバカにするのは簡単だが、そこに学びもある。ある、うん、あるはずだ。

「それでは、良いワイルドエリアの時間を！」

お礼を言つて、人生初のワイルドエリアへ。そのワクワクはほんの少しの間に吹き飛ぶことになつたが。

少し進んだところでピンクの顔に黒い体をした無表情のクマに追いかけられて羽交い締めにされ、

水場にあつたハーブを拾おうとしたらギヤラドスが顔を出し、リンゴを見つけたら木の上からリンゴに擬態したポケモンが降つてきて脳天を揺らし、

朽ちた塔がある所へ近づいたらフワンテの群れがわらわら沸きだし、とどめにハガネールに見つかって追い回された。

どうなつてんだ、こここの治安！

ヘロヘロになり、ようやくあまりポケモンや人がいない場所を見つけてたのでテントを

設営する。休ませて、マジで。ポケモン達をボールから出しテントに座り込んだ。コロ
トックの静かなメロディに緊張がほぐれると同時に抗えない眠気に襲われ、深い眠りの
中に沈んでいくのであつた。

キャンプと、女子トーク

ポケモンと人の関わり方には、大きく三つの種類がある。

一つ、ポケモントレーナー。ポケモンを戦わせることを仕事とし、スポンサー や研究機関の援助を受けて地方を代表する存在になるために切磋琢磨する者達。たくさん捕まえる人もいれば一つのタイプに絞る者もいる。育成環境は支援があればあるほど良くなる。

二つ、ポケモン研究機関。いまだに未知なことが多いポケモンを研究、調査するための組織。地方の自治体の援助を受けながらトレーナーと協力関係になることが多い。規模は様々だが、ポケモンを育成する環境としてはトップクラス。

三つ、普通に生活する人々。ポケモンを家族として迎える、仕事のパートナーにするなど様々な目的でポケモンを連れている。基本的に一家族で一匹か二匹くらいなことが多い。家庭環境で暮らせるようなポケモンが好まれるため、氷や毒、ゴーストなどが選ばれることは少ない。エサ代などの問題もあり、育成環境はピンキリである。

自分は三番目だ。だからたくさんは捕まえられないし、面倒を見ることもできない。
もし捕まえるにしても職場に連れても問題ないポケモンにしないといけない。

……今でも一番目になりたいという未練がある。でも料理人になりたいのも間違いない。決めきれていないのだ。この旅でそのことにも決着をつけられたらいいなと思う。それもこの旅を決めた理由なのだ。

「その時にね？ ヤローくんが言つちやつたワケよ。『僕が一番目のジムチャレンジやります』つて！ ダンデくんも『それがいい』だなんて！ だつたら私だつて二番目が良いつて言つたのに！」

「まーそうよねえ。でもルリナも分かつてるんでしょ？ ヤローくんはともかくルリナまで二番目は体裁上無理だつて」

「分かつてるわよ……。あの問題児二人に一つ目のジムチャレンジは任せられない。だからつてヤローくんと違つてメジャージムじやない。その辺を加味したからこそ順番なんだつて、分かつてるわよ……」

「あ、こつちもおわりくれる？ ごめんねやらせちゃつて！」

どうしてこうなった。

話は少しさかのぼる。コロトック子守唄で見事撃沈し、ふと誰かに起こされて目が覚めた。そこにはグレッグルがとホシガリスがいて、どこかを指差している。そちらを見ると、コロトックが大人のお姉さん達に絡まっていた。

「むしタイプなのは間違いないわよね……。ストライクみたいな鎌、複眼、顔つきなんかから判断できる。でもこのお腹の器官は何かしら？　ス trin g d a r e みたいに弾くことで演奏できてたことを考えると、意志疎通の器官なのかな。メロディを奏でてたことを考えると……」

「もーソニアつたら、一度こうなると中々戻つてこないんだから。……あ、君たちのご主人様、起きた？」

慌てて飛び起き駆けつける。コロトックは困っているものの何かされた訳ではないらしい。ソニアと呼ばれた方の女性に見覚えはないが、もう片方の女性はついこの前見た気がする。確かバウタウンのジムリーダーだつたような。

「私について知つてるの、それだけ？　……ふーん。あなたよその人？　シンオウかあ。なら仕方ないのかなあ。こつちのソニアも数年前にブームの人になつたんだけど、まあ

ガラルの中の話よね」

そつかあと言ひながら決して嫌そうではない。二人は喧騒に疲れて人のいないとこに来たかつたという。ジムチャレンジが始まつて忙しいから、貴重な息抜きという訳だ。

「そうそう、なんでキャンプなのにカレー作つてないの？……あ、そつか。ガラル以外ではそこまでカレー流行つてないのね。じやあさ、一緒にキャンプしましょ！　こつちでのカレーについて教えてあげるから。ソニア、それでいいでしょー！？」

ジムチャレンジはいいのだろうか。

「今何時か知つてる？　夜7時過ぎ。もう今日の分は終わつてるわよ」

ルリナはボールから見たことのないポケモンを出した。ドダイトスのような、ゼニガメのような、背中に甲羅をつけた水色のポケモン。口がかなり鋭利で噛まれたら危なそうだ。

「カジリガメっていうの。キャンプでは互いのポケモンと一緒に遊ばせることもできるのよ。つて、あなたのホシガリスとソニアのワンパチ、もう打ち解けてる」

ワンパチの背中にホシガリスが乗つて走り回つている。グレッグルがカジリガメに何やら声をかけ、少し離れたところで軽いバトルのようなものをやつている。どちらも好戦的なようだ。

「じゃあカレー作りましょーか。リンゴあるみたいだし、リンゴカレーで」やつとコロトツクの観察に満足したソニアも加わって、三人でカレーを作る。これでも料理人だ、配合さえ聞けば味を想像しながらカレーくらい作れる。木の実はイアの実をチヨイス。お疲れの二人にはリンゴ自体の甘味と酸味に加え、イアの実の酸味と水分を加えることできつぱりしてくどくない味付けにした。

イアの実を入れたすっぽくちアップルカレーの完成だ！

「あ、おいしい！ カレーなのにこつてりじゃない！」

「カジリガメも喜んでる。あなた料理上手なのね」

誉められると嬉しくなつて、思わずニコニコしてしまう。人間と違つて初めてカレーを食べるだろうコロトツクとグレッグルは最初こそ怪訝な表情だったが、ワンパチが勢い良く食べたのを見てそつと一口。目を見開き、そこから一気にカレーを口に運んでいった。お気に召したようだ。

「あーおいしかった！ そうそう、おいしかったと言えばこの前ホップがね……」

そうして女子トークが始まり、冒頭に至る。コロトックがムーディーなメロディを奏でているのもあって、二人の話は尽きないようだ。ワンパチとホシガリスは走り回り、カジリガメとグレツグルはまだカレーを食べている。と、その時だつた。いつの間にか自分の背後に誰かが立つていた。

「イヌヌワン?」

それに気づいてワンパチが声を出しが、警戒というより困惑の吠え声だ。慌てて振り返ると、立つていたのは人ではなくポケモンだつた。緑の帽子のように見える大きな葉を頭にかぶり、鳥のようなくちばしを持ちながら人に近い手と足を持つ。でも一番の特徴は、体を小刻みに揺すつていることだ。なんともリズミカルに……、ん? コロトックのメロディに合わせて揺れてる?

「あれ? コロトック、演奏やめちゃうの?」

「ねえルリナ……。そこにいるの、ルンパッパじゃない?」

「あ、本当ね、ルンパッパ」

演奏を止めたコロトックとルンパッパが見つめあう。と思つたら、突然コロトックがギン! と激しく腹をこすつた。ルンパッパも足を肩幅に開いて腰を落とす。次の瞬間コロトックがかなりの速度でメロディを奏で始めた。ルンパッパも負けじと激しいステップを繰り広げる。突然の展開に人間達は口を開いて固まつている。

「ワン！ イヌヌワン！」
「キキッ！」

ワンパチとホシガリスは楽しそうに二匹の間に入つて両者を見ている。一方のカジリガメとグレツグルは遠巻きに様子をうかがつてゐる。人間達は真剣な表情で突然のダンスバトルを始めた二匹から目が離せない。何だか分からぬけど一つだけはつきりしていることがある。あいつのステップ、キレイキレだ。

「……ルンパツパつて、確か良いリズムを求めてるんだって聞いたことある。そのリズムに合わせて体を動かすことで自分のパワーを増幅させるんだとか」

ぼそつとソニアが解説した。そういうえばコロトックも奏でるメロディで感情を伝えるとか聞いたことがある。じゃあ何だ、コロトックの感情に合わせて踊つてるのか。あんなに真剣に。

「——ンツパ！」

ルンパツパが息を込めた声を出して、フニッショ。コロトックもルンパツパもはあはあと荒い息を吐いている。だが互いに歩み寄ると、がしつと抱き締めあつた。深い友情が芽生えたようだ。思わず拍手してしまう。

「わあーすごい。……つてカレー食べるの？ ルンパッパも？ ジやあ、よそうね？」

清々しい表情をした二匹は隣同士に座ると、ソニアがよそつてくれたリングカレーを食べ始めた。ルンパッパも味が気に入つたようで大喜びでガツガツ食べている。でもいいのだろうか、野生のポケモンにカレーあげてしまつて。

「いいのよ。むしろそうやつて仲間になるポケモンも少くないんだから。このルンパッパもゲットしてあげれば？」

ここには確かに新しい仲間を探しに来た。でもこのポケモンは果たしてバトルにだせるようなポケモンなのだろうか。

「ルンパッパは草と水の複合タイプ。ヤローくんも本気の時は手持ちで使うことがあるわ。しかもあまりいを覚えるから、かんそのはだのグレッグルとも相性抜群ね。雨だとグレッグルは体力が回復するし、苦手な炎技も威力が減退するし。ルンパッパ、あなたにとつてマイナスにはならないと思うわよ？」

「次はエンジンシティ？ クララさんがセイボリーさんかー。あたしだつたらグレッグルには悪いけどセイボリーさんを選んでホシガリスとルンパッパで耐久、最後はコロツクでノックアウトに持つてくかな。ルンパッパはスタミナもあるしね」

大変ありがたい。ポケモンの知識がある人達からの助言は正直お代を払う必要があるくらい貴重なものだ。まあ、この二人はお代払つたら逆に怒りそうなので感謝を述べ

るだけにする。

「そうそう、使つてないからこれあげる。しめつたいわ。バトルで天候を雨にした時、普段より長く雨にしておけるの。ルンパッパを持たせてあげて。さすがに天候を上書きされるのは防げないから注意して」

思わず二人の顔を見比べてしまう。この後悪い組織に大金を脅し取られたりしないだろうか。

「はつきり言つてね、あたしもルリナも君だから優しくしてるんじゃないんだ。『あたし達を知らない人』だつたからキャンプにお邪魔したり、思いつきり話をさせてもらつた。最近はどこに行つても視線を感じたり声をかけられたりでうんざりだつたから。利用させてもらつた分の対価を払つただけ」

「そうよ。それに私はあなたがバトルに来ても一切容赦しないわ。ルンパッパがいたつて負けるつもりはない。……安心して、そつちのポケモンを知つてるからつてジムバトル用のポケモンを変えたりはしない。逆にあなたが対策をすることで初めてジムに挑む資格を得たとすら考えるわ」

そのアイテムは口止め料よ、とまで言われればすんなり受けとるのが大人というものの。彼女達はきっと数日もすれば自分のことなど忘れてしまうだろう。それでいい。大人になつてまで無駄な執着やしがらみを作る必要はない。

「それじゃカレーごちそうさま！　お邪魔しました！」

「バウタウンで待ってるわ。楽しみにしてる」

二人は空とぶタクシーで帰つて行つた。残つたのは四匹のポケモンと自分のみ。嵐のようないベントだつたが、とても貴重な時間だつた。

自分は今後、彼女たちのように有名になることなんてきっとないだろう。料理人としていつかお店は出したいたが、まだ具体的なプランは決まってないくらいだ。だけどひよんなことで運命は交錯し、違う世界の住人が同じ鍋のカレーを食べることもあれば自分の料理が有名人の癒しを手伝うこともある。

この運命は、ダンデさんまでつながつてているのだろうか。

ふと目が合つたルンパッパが、ビシッと親指を立ててウインクしてきた。こいつ調子良いやつだな。何はともあれ四匹目、ジムリーダーお墨付きの一匹だ。モンスター・ボルを投げ改めてゲットし、全員で片付けをやつてからテントに入る。明日はエンジンティで受付をしよう。受付をしたらルンパッパの技とかを確認しないと、と考えながら

眠りについた。

翌日。エンジンシティに戻つて本屋に入りファッション雑誌をめくる。でかでかとルリナの写真が載つているのを見て、自分が想像以上に大物のプライベートを見たことを実感し、奇妙な感覚に襲われるのであつた。

決戦、セイボリー！

「ありがとう、助かった！」

目的のスタジアムが見えたところでリザードンが一声鳴いた。もう大丈夫だということらしい。俺は案内してくれたことを感謝し、ガシッと握手した。

「ここからならリザードンで飛んでいける。迷った時はどうしようかと思つたけど、君がいてくれて本当にラッキーだった。俺は今日のことをきつと忘れない！」

リザードンにまたがり、ゆっくりと飛翔する。手を振りながら最後に叫ぶ。
「——次会えた時は、君のポケモンを見せてくれ！ そうでなくとも夢を叶えた君と再会したい！ 楽しみにしてるぞ！」

スタジアムに到着した時、リザードンがバギヤアと鳴く。何だ、と思えばすっからかんの自分の手を見つめている。

「……あ、預けたまま忘れちゃったのか。まあいいさ、すぐに使う物じゃないしな。次会つたときに聞いてみるぞ！」

……ダンデさんから意図せず預かってしまった『それ』は、今もリュックの中に入っている。

エンジンシティジム、スタジアム入場口。スタジアムに入る前に四匹のポケモン達と作戦を確認する。ルンパッパをゲットした後もゴーストタイプか悪タイプのポケモンを狙つてみたのだが、付け焼き刃で言うことを聞いてくれるポケモンはいなかつた。そもそも一流トレーナーでもない自分に従つてくれるような強いポケモンなどそういうい。

『チャレンジャー、ジムリーダー、共に入場してください』

コロトック、グレッグル、ホシガリス、ルンパッパが作戦を理解したことを確認してからボールに戻し、スポットライトの当たるコートを歩く。中央にはすでに待ち構えているジムリーダー、セイボリーがいた。

「ようこそチャレンジャー。ワタクシのエレガントなジムチャレンジを選ぶとは、あなた中々見る目がありますよ。自慢していいです」

あれがエレガント……? このジムチャレンジはサイキックパワーで平衡感覚を失つたままゴールまで歩いて辿り着くというものだつた。後から聞いたら毒の場合も平衡感覚を麻痺させるガスを吸つてゴールを目指すんだから過激すぎる。

「ところでラテラルタウンジムのユニフォームということは、あなたゴースト使いですか？ さもありなん、エスパー対策筆頭ですからねゴースト、当然の構えです」

「いえ、これは頂き物でゴーストタイプは持つてません」

「まつ、紛らわしいっ！ まあいいです、それではバトルを始めましょう。お行きなさい、コロモリ！」

コロモリか！ 予定と少し違うけど、エスパー・飛行の複合を相手にできるのは一匹しかいない。ガラル鉱山でも戦つてからシミュレーションはできるはず。

「いけつ、ホシガリス！」

「んんく？ ホシガリスですか。ははーんさてはかみつく狙いですね？ あれはにつくき悪の技！ あんな非道な技を使うやつは体もハートもサイコブレイク！」

「……ホシガリス、飛びかかりつつ、たくわえる！」

予想通りホシガリスは怖がらずにすぐ指示に従つてくれる。勢い良く走り出すと尻尾から何かの食べ物をたくさん口に放り込みつつ飛び上がる。

「飛んで火に入るサシカマスのごとく直線的な動き！ コロモリ、エアカツター！」

「ホシガリス、のみこむ！」

たくわえるの技はたくわえている間は防御と特殊防御が上がる技。その状態でエアカツターを受けさせ、さらにのみこむを指示することで回復させる。耐久力の高いホシ

ガリスならではの戦法だ。

「そしてたいあたり！」

「ホワツ!? かみつかない……!? それなら問題ありません！ コロモリ、ねんりき！」
「ホシガリス、もう一回同じことをやって！」

再び飛びかかり、たくわえ、のみこみ、たいあたり、また走つてたくわえ、のみこむ。ダメージが蓄積したらオレンの実と特性ほおぶくろで回復。最後は思いつきりコロモリの顔にたいあたりをぶつけるという急所を狙つた攻撃で倒しきつた。

「よしつ！ よくやつたホシガリス！」

「くつ、まあやりますね。ですがまだ一匹目。次はこちらですよ、ユンゲラーー！」

ユンゲラー。このポケモンも知つていてる。エスパー使いの心強いパートナーで強力な念導力を持つポケモンだ。ここは本来の作戦でいこう。ホシガリスを戻しルンパッパを出す。さあ、初試合だルンパッパ！

「（ナゾノクサのごとき謎の行動……。どうしてあのホシガリス、かみつくをやらなかつたのでしょうか……。かみつくをやればもつと早くコロモリを倒せたはずです。わざわざオレンの実を使う必要はなかつた……）」

「ルンパッパ、あまごい！」

「つと、特性発動狙い！　これはやつかいです。ユングラー、サイケこうせん！」
ステップを踏んでいたルンパッパがよく分からぬ動きをすると、にわかにスタジアム上空を厚い雲がおおつっていく。ポツリポツリと雨粒が落ち、一気に空は雨模様となつた。ルンパッパの特性は『すいすい』。雨の時は素早さが上がる。サイケこうせんをくらはしたが、見合うだけのアドバンテージは得た！

「ユングラー！　スピードスター！　どんなに早くなつても技が当たればこつちのものです！　ヒットアンドアタック！」

「ルンパッパ、バブルこうせん！　スピードスターを撃ち落としながら攻撃！」

雨によつて威力の高まつたバブルこうせんを口から吹き出す。スピードスターが確定命中なら軌道上に技を出して全部撃ち落とすまで。輝く星をぶち抜いた高速の泡は、そのままユングラーにも炸裂した。

「押しきれルンパッパ！　もう一回バブルこうせん！　今のお前の方が早い！」

「なんの、かわすのです！　かわしたところでサイケこうせん！」

「かわせるな！　テレビポートできないなら姿を消すこともない！　お前の動体視力な

ら捉えられるつて信じてる!」

「動体視力!? サイケデリック・アイは我らサイキッカーの商売道具ですよ！ 勝手に使わないで使用料を払いなさい！」

何の話だ。

「ンッパツパー！」

ルンパツパがバブルこうせんを継続しながら自分の指で四角を作り、その四角を目のところに持っていく。まるでカメラのスコープを覗くような仕草だ。そのまま回避しようと動き回るユングラーを捉え続ける。……お前は本当はエスパータイプか？ 何だその手！ 明らかにこつちの会話内容理解した上で悪ノリするんじゃない！

「キイーツ！ 著作権侵害です！ 法廷に訴えますよ!」

いや著作権は関係ない。

「ええいワタクシのユングラーはペロツパフではありますん！ つまりは舐められるほど甘くない！ ユングラー、サイケこうせん！ 当てることに集中なさい！」

回避するのをやめたユングラーがスプーンをまつすぐルンパツパに向ける。瞳を怪しく光らせながらサイケこうせんを放つと、その光はなんとバブルこうせんの泡を生きしく両者に直撃した。二匹ともぶつ飛んでどさりと倒れるが、ルンパツパはむくりと立

ち上がつてステップを再び踏み始めた。

「ンッパ！」

このルンパツパ、調子のいい所はあるが戦闘へのポテンシャルはウチで一番だ。グレッグルを上回るその戦闘センスに舌を巻く。自分はその才能に見合う指示を出せるのだろうか。

「最後の一匹にまで追い込みましたか。やりますね、私の力を2・8%も発揮させると
は。さあ出番ですよヤドラン！ ダイマックス！ 1、2の3で巨大化しなさい！」

ヤドラン！ 今度も知つている。ポケモ……、待て、ヤドランつてあんなのだつたつけ
？ ヤドランと言えば焦点の合つてない目、ピンクの健康そうな体、尻尾に合体した
シエルダー……ええつ？ し、尻尾じやなくて、手にシエルダーがくつついてる!? ど
ういうこと!?

「フフン、うろたえることウールーの如し。ガラルヤドランは初めてのようですね?
ではその強さを思い知りなさい！」

セイボリーは超能力でボールを操ると、巨大化したボールを後方へ投げる。出てきた
ヤドランを改めて見て、さつきの言葉を確認する。『ガラル』ヤドラン。おそらく、自分

が知るヤドランとは生態が違う。油断はできない。ルンパツパを続投させる。ヤドランは水とエスパーの複合。ルンパツパなら悪くない勝負ができるはず。

「ルンパツパ！ ギガドレイン！」

すいすいで速度の上がったルンパツパが大きく息を吸い込むとヤドランの体が緑に発光し、その光もまとめて吸い込んでいく。ところがルンパツパは「おいしくない」と言いたげな顔で振り返り、ヤドランと言えばあまりダメージを受けていなさそうだ。……まずい、生態だけじゃなくてタイプも変わってる！？

「ヤドラン、——ダイアシットド！」

巨大なヤドランが左腕のシェルダーをまるで銃器のように構える。そこから紫色の液体が射出され、ルンパツパを飲み込んでコートの壁に叩きつけた。そのまま動かなくなる。

「このヤドランは、エスパーと毒なんですよ。草タイプでもあるルンパツパはジ・エンド！」

嘘だろ、毒はもう一つのジムじやなかつたのか。でも確かに毒タイプは使わないなんてルールも宣言もない。これは悪手だった、まだバブルこうせんの方が良かつたか。考えて仕方がない、まだバトルは終わっていない。

「もう一度頼む、ホシガリス！」

ホシガリスは巨大化したヤドランを見て、振り返つてこつちを見る。目だけで作戦を伝えると、泣きそうな顔でヤドランに向かって直った。

「ホシガリス、たくわえる！」

「ふふん、かみつけないホシガリスなど角のないトサキントに同じ！ ヤドラン、もう一度ダイアシッド！ 一度ダイアシッドをするたびに特攻が上がるのですます強くなります！」

再び射出された毒を受けて、たくわえていたとはいえホシガリスが耐えられるはずもなく。ふとんで目を回している。……これでダイマックスの時間をかなり削れたはず。次が勝負だ。

「コロトック！」

「ははーん！ コスマパワーで全てを悟りました！ あなたの切り札はそのむしポケモン！ ルンパッパとホシガリスはできるだけ体力を削るのが仕事！ むしポケモンは速度はあつても長期戦に向かないことがほとんどですからね！ これぞ自明の理、いや、ジメーノ・リ！」

変な口調はとにかく、その通りだ。防御型のホシガリスと雨で先手を取れるルンパッパでお膳立てをし、エスパーに相性有利なコロトックがとどめをさす。これがソニアさんの言っていた今回の作戦だ。見抜かれたところで勝負は終盤。毒とエスパー複合の

相手に虫技は等倍だが、もうすぐダイマックスが終わると踏んで置み掛ける！

「コロトック、シザーコロス！」

「ヤドラン、ダイストリーム！ 上がった特効で押し流しなさい！」

雨の中飛び上がったコロトック、ヤドランの左腕を切り裂くも直後噴射された水流に飲み込まれた。雨が強まる中ヤドランの体が赤く光り、元の大きさに戻っていく。コロトックもなんとか起き上がりつてヤドランを見据えた。

「コロトック、いける!? よし、とどめばり！」

「ヤドラン、シェルアームズ！」

同時に動いた二匹のポケモン。素早さならコロトックが上だ。回避されなければ勝てる！ ……そのはずだつた。

「え……？」

コロトックのとどめばかりが刺さる前に、突然ヤドランが素早く腕を構えたのだ。それは今までの行動からは想像できないほどに素早く、コロトックが攻撃する前に毒液を発射する。一歩及ばなかつたコロトック、ほぼゼロ距離で攻撃を受けてしまい戦闘不能となつてしまつた。

「——ガラルヤドランの特性『クイックドロウ』ですよ。一定の確率で先制攻撃をします。さすがはヤドラン、エレガントすぎです」

そんな特性あるのか。絶句しながらモンスター・ボールにコロトックを戻す。またこの展開になってしまった。あと一撃なのに、相性不利の一匹しか残っていない。

「そちらの最後のポケモンは……、んん!? グレッグル!? グレッグルなんて毒と格闘の複合! エスパーが苦手な複合ではありませんか! これはもうボンツ、ですね!」

そう、格闘と毒それがエスパーを苦手とするため、エスパー技を受けたら間違いなく一撃で落ちる。だが他のポケモンは戦闘できる体力がない。負けないためにはここで出すしかないのだ。

「どどめですよヤドラン! シエル——」

その先が言葉になることはなかつた。今度はセイボリーが「え?」と呟くことになつたからだ。攻撃指示を出した時すでにグレッグルはヤドランに接近し終わつており、ジャンプしながら裏拳をヤドランの側頭部に叩き込んでいたのである。

「や、ヤアーン……」

ヤドランは聞き覚えのある抜けきつた声を出してゆつくりコートに横になると、そのままやすやと眠りだした。一応戦闘不能扱いらしい。

「ん、んな、なあつ!? まさか今のは、『ふいうち』!?

「そうです。悪タイプ技のふいうちです」

「な、まさかあの虫ポケモン以外にもエスパー対策をしてあつたんですか!? あなたのホシガリス、効果のある『かみつく』ド忘れしてたのに!」

「いいえ、覚えてました。……万が一この展開になることを考えて、あえて使わなかつただけです」

今回の作戦は二段仕込みだつた。理想はソニアさんが教えてくれたルンパツパとホシガリスでなるべく敵を削り、とどめを相性の良いコロトックにやらせて勝つというも。しかし何かあつた場合はグレッグルまで回し、相手に何かされる前にふいうちで倒す。そのためにホシガリスにはかみつくをさせなかつたのだ。

「わ、ワタクシに、グレッグルにエスパー対策があると分からせないための、布石……!?」「コロトック以外が効果抜群の技をしなければ、コロトックこそが切り札だと思うでしよう? 実際そうなれば楽なのでそうなるように戦つてました。グレッグルは最後の最後の奥の手だつたんです。危険な賭けでした」

もしもまだヤドランに余裕があつたら。もしも先制技を封じられるサイコフイールドを出させていたら。そんな不安の残る中、最大限のやれることをやりきつた勝利だつた。

「勝者！ チャレンジヤー！」

わああ、という歎声が響く。ターフタウンよりかなり弱い声量だが十分だ。見ている人が一人でもいる限り、パフォーマンスをする理由になる。

「ホシガリス、ポーズ！」

腹の底から大声を出す。目の前でグレッグルが同じポーズを取つてくれた。あれ、教えたつけ？ ちらりと振り返つたグレッグル、パチンとウインクして向こうを向いてしまつた。

「あり得ぬ、いや、アリ・エース！ まさかこんな形で敗北など！ ですが認めてさしあげます。ワタクシまだ6・3%しか本気を出しておりませんので。ちつとも悔しくありませんので」

ショックのあまり落としたモンスター・ボールを超能力で浮かばせながら、嫌そうに手を出す。その握手に応える。二つ目のジムミツション、クリアだ。いよいよ次は、ルリナさんの待つバウタウン！

いらっしゃいませ、防波亭へようこそ

焦っている。今までにはほど焦っている。ヤローさんに追い込まれた時と同じくらい、本当に焦っている。

「グレグレ」

グレッグルが示した先を見て覚悟を決めた。背に腹はかえられない。いずれ訪れる危機を事前に回避する必要がある。
そうだ。——バイトしよう。

エンジンシティジムクリアから数日。第二鉱山を抜けてバウタウンに到着した。気持ちいい潮風が吹き抜けこの町で、自分はだらだらと冷や汗を流していた。どうしてか。それは視線の先にある、明らかに薄っぺらくなつた財布が原因である。

「ンッパ！」

貧乏ゆすりが止まらない主を見かねてルンパツパが楽しそうに踊ってくれるが、苦笑

いしか返せない。ガラルに来る前に旅のお金は計算しておいたが、大きな誤算があつたせいで経費が足りなくなるかもしれないのだ。散財の理由は予想外のものだつた。

カレーである。

キャンプセットを買つてしまつた時から金を浮かすために毎日野宿をし、少しでも経費を減らすために他の人と一緒にカレーを作つていたら……、カレーを作ること自体にハマつてしまつたのだ。同じリンゴカレーでも普通、甘口、苦口、辛口、渋口、すっぱ口と大まかに分かれ、さらに木の実の配合で無数のレパートリーが生まれるのがたまらない。

シンオウに帰つたら、ガラル式カレーとポフインをメインにしたお店を開こうか。実は料理人を目指していても具体的な方向は決まってなかつたが、そう思つてしまふくらいにカレー作りは楽しかつた。楽しすぎて——、気づけば食費の予算を大きくオーバーしていた。

「キキッ？」

今日もポフインをかじりながらホシガリスがこつちを見てくる。その期待に満ちた

目は財布を緩める魔性の瞳だ。見つめられるたびに嬉しくなつて米を追加購入してしまう。はつきり言つて米は安くない。おまけにガラルの米よりシンオウの米の方がおいしいから、ガラルでシンオウ産の米を買うとより高くつくのだ。

「キリリー、キリ」

呆れた声でコロトックがいくつかのポフインをホシガリスに取られる前に手もとにかき集めている。おや、と思うとグレッグルがいない。どうやらグレッグルの分を取つといてくれているらしい。こいつがいなかつたらもつと食費が厳しいことになつていたに違ひない。ありがとうコロトック。

「グレグレ」

そんなグレッグルが戻ってきた。手に何か紙を持つてゐる。何だかんだグレッグルも仲間を気遣つて行動することが多い。ありがたい、本当にありがたい。渡された紙を見てみると。

『私の成功体験講演会

「飲食店の皿洗いから出世したサクセス・ストーリー』

……なるほど。焦りすぎて盲点だつた。お金がなければ稼げば良い。自分は料理人見習いだ、それこそ飲食店で皿洗いだつてお手の物。このスキルで日雇いをさせてもらうのだ。

グレッグルが近くの店を教えてくれている。シーフードレストラン、『防波亭』というらしい。示されたレストランに足を向ける。もしここで断られてもエンジンシティ駅構内にもレストランがある。それらのどこかで一日だけでも雇つてもらおう。

「えつ料理人!? 助かるなあ、厨房手伝つてもらえるなら賃金はずむし、まかないも出すよ!」

『防波亭』に行き事情を話すと、一発OKでバイトとして雇つてもらえることになつた。元々人手不足ではあつたらしい。手持ちのポケモン達も連戦で疲れていることからレストランの裏手で休ませてもらうことに。ただしコロトックだけは別だ。

「うつそ玉ねぎのみじん切りいけるの!? ぼうじんゴーグルつければ玉ねぎで複眼がひどいことにならないんだ! すごいね君のポケモン!」

シェフが感動した声でコロトックを褒め称える。コロトックめちゃくちゃ喜んでいるな、あの反応。

「なあ頼む! そのポケモン、ジムチャレンジ期間の間だけ貸してくれない!? もちろん賃金はその間も出すから! ……頼むよお! ここまで精密に野菜を切れるポケモ

ン、初めて見たんだよう！ なあ、同じ料理人を救うと思つてさあ！」

めちゃくちや心が揺れたが、唇を噛み締めてお断りした。コロトツクの目が冷えていた気がする。ジムバトルでも貴重な戦力だ、もちろん貸し出すはずがないじやないか、ははは。

店長はダメかあーとため息をつきながらも料理を作る手を止めない。さすがである。ちらちら盗み見しているが、やはりレストランを任せられるようなシェフの手際は素晴らしい。勉強になるところしかない。

「そうだ、まかないの夕飯、何がいい？ シンオウの人ならガラルらしい料理にしようか？」

カレー！

「カレー？ カレーでいいの？ ジャアリングカレーにしようか？ ……ふんふん、イヤの実で前に作ったことがあるのね。よーし分かつた、楽しみにしてなよ！」

「じゃあ、カレーをおいしく食べるためにも運動しないと！ てことでちょっと出前しつけてねー！」

……調子いいなこの人。

「はーいおまたせ！ イアの実を使つたりンゴカレーだよ！」

料理を作つては出前に行き、また料理を作つては出前に行きを繰り返していたら、いつの間にか夜になっていた。こんなに料理に集中したのはいつ以来だろうか。でも同時にチラチラとポケモン達のことが頭に浮かんだのも事実。いつの間にか、料理もポケモンも比べることはできないけれど、どつちも大切なものになつていたようだ。

ポケモンバトルもできる、ポフインとカレーのお店。

なんだかいいな。ノモセジムに挑む一年間、今のガラルでの道中、決して負け知らずという訛じやない。何度も何度も負けて、悔しくて、でも次は勝ちたいと思えた。

特にノモセに挑んだ時は、ノモセジムのトレーナーにこてんぱんに負けるところからスタートだつた。でも、ダンデさんに会うという決意が支えてくれた。

ただ食事を楽しむこともできるし、ポケモントレーナー同士がバトルを気楽に楽しむこともできる。そんなお店があつてもいいんじゃないかな。

「ふふん、疲れて物思いにふけるのも悪くないけど、君のポケモン達を見てみな？」

シェフの声に我に返る。言われるままに見てみると、何と四匹とも瞳を輝かせながらカレーをガツガツと食べているではないか。その輝きは『いつもよりおいしいカレー』

だという驚きの光。そんなポケモン達の様子をシェフ手持ちのイエツサンが上品かつ自慢げに眺めている。慌てて一口食べると……。

「多少野菜の産地が違うとかはあるだろうけど、キヤンプで作るカレーとほぼ同じ材料、条件で作ったよ。リンゴもワイルドエリアのだし、あえて煮込み時間もそんなに多くない。イアの実を使つたリンゴカレー。でも……、断然、こっちのがウマいだろ?」

スプーンをくわえたまま固まつた自分を見て、シェフがイタズラ成功と言いたげな顔で説明してくれる。でも、そんなのおかしい。いくらなんでもそこまで自分の料理は下手ではない。ここまで味に差はつかないはず!

「そう怒んなさんな。もう一つ木の実を使つたんだ。……オボンの実。これを煮込まないですりおろし、食べる直前に入れて混ぜるんだ。そうすると辛み以外が際立つおかげで酸味のさっぱり感が増すのさ。僕オススメの調理法」

オボンの実を、すりおろす……!? 木の実を煮込む、もしくは碎く以外の方法で料理に使うとは、考えたこともなかつた。これはポフインにも応用できるかもしれない。

「僕もそこまで木の実アレンジに詳しい訳じやないから、他にも色々あるのかもね。あの負担を軽くするようにバターもできるだけ使わないでオープンでじっくり焼くとは考えられてるう。お菓子作りもやるならペロリームかマホイップのどつちかくらいガ

ラルで捕まえて帰つてもいいんじやない?」

……なんだつて?

「ペロリームかマホイップ。ほら、お菓子ベースのフェアリータイプポケモンだよ。プロのパティシエなら一匹は持つてるつてやつ。ポプラさんの切り札がマホイップじやん。……シンオウにはいないの?」

そんなポケモンいない。詳しく聞くと、その二匹はそれぞれペロッパフとマホミルから進化したポケモンで、お菓子作りに助言をしたりパティスリーの成功を約束してくれたりするらしい。是非とも欲しいが時間制限のある旅。わざわざ探しに行くことができないのが悔やまれる。

「そつかーいないのか、捕まえられたらいいね。あ、今日ここに泊まつていきなよ。従業員用のベッドあるから。よく働いてくれたからね、サービスサービス!」

次はいつベッドに入れるか分からぬこともあり、ありがたく借りることにする。それについても今日という日は自分にとつて、進む道を考えさせてくれる重要な日だった。ダンデさんに会うために来たガラルが、それ以上の意味を持ちつつある。

明日はいよいよバウタウンジム。ルリナさんへの挑戦だ。失礼のないように挑むた

めにもしつかり休息をとる。
がら、瞳を閉じた。

鍵となるルンパッパの入ったモンスター・ボールを投げな

決戦、ルリナ！

モンスター・ボールを構える。激しい水飛沫を何度も浴びて、せっかくのユニフォームがずぶ濡れだ。それももう終わる。これが最後のポケモン。ルリナさんのカジリガメを見ながらボールを投げた。

「最後は――、お前しかいない！」

『チャレンジジャー、ジムリーダー共に入場して下さい』

スイッチを切り替えて迷路を進むジムチャレンジをどうにか終えて、三度目のジムリーダーとのバトル。相手はルリナ。あのキャンプでの夜が懐かしい。コートの真ん中で向かい合うと、観衆に聞こえない小さな声で「ありがとう」と言つてきた。

「あなたが善人で助かったわ。キャンプでのことをSNSにばらまいたりされることも

覚悟してたから。でもあなたはやらなかつた。本当にありがとう。だからこそ、あなたにとつて意義のあるバトルにしてみせる」

雑誌で見た彼女は纖細で神々しいとすら思えたが、ここにいる、そしてキャンプで会つた彼女はもつと情熱的で荒々しい。どちらがではなくどちらも彼女だからこそ、これほどまでに魅力的なのだろう。

「いつてらっしゃい、アズマオウ！」

「頼む、コロトック！」

ルリナが出したのは知つているポケモン、アズマオウ。トサキントの進化系、水単体のタイプだ。こちらは虫タイプ単体、直接的な相性の有利不利はない。さてどうなるか。

「コロトック、エコーボイス！」

「アズマオウ、たきのぼり！　ひるませるのよ！」

コロトックが腹をかき鳴らすところへ水をまとつたアズマオウが突つ込んでくる。コロトックは羽を広げるとあえてアズマオウの下をくぐるように飛び込んだ。たきのぼりが上へと昇る技だからこそその回避方法だが、実はノモセジムで見たことがあつたからできたのである。

「思つたより水ポケモンと戦い慣れしてるわね。アズマオウ、スマートホーン！」

「コロトック！ エコーボイス！ 威力を上げて！」

コロトックの発する音がさらりと大きくなる。アズマオウは顔をしかめつつも立派な角に鋼をまとうと、水中を泳ぐような速度で素早くコロトックへ接近する。コロトックは再びかわそうとコートをジグザグに飛び回るも、アズマオウは的確に追い上げてくる。

「まさか必中技……！ コロトック！ 受けろ！ 良く見て急所は外すんだ！」

コロトックが空中に舞い上がり、下からの突き上げを待ち構える。突つ込んできたアズマオウを両手を交差させて受け止めた。刺さりこそしなかつたものの、思いつきり角で突き上げられ、かなり上空に飛ばされてしまう。

「そこから方向転換は難しいでしよう。アズマオウ、もう一回たきのぼり！」

「コロトック、エコーボイス！ そこから水の中にまで響かせろ！」

空中で腹をかき鳴らす。三度目のエコーボイスはスタジアムにビリビリと衝撃を与える、観客に思わず耳を塞がせるほどだ。アズマオウにもその音は響いたようで、わずかに進路がそれた。それを見逃さずコロトックが攻撃を回避、素早くコートにまで戻ってきた。

「アズマオウがここまで追い込まれるとは驚きよ。アズマオウ、スマートホーン！」
「コロトック、とどめばり！ 相手の技を受ける前に刺せ！」

鋼をまとつた角がコロトックに刺さる前に、コロトックの手がアズマオウの腹に突き刺さつていた。しばらくじたばたしていたが、すぐに目を回して動かなくなる。

「妙に手慣れてるわね。ラテラルタウンのユニフォームだからゴーストファンかと思つたけど、シンオウでは水ジムで修行でもしたの？」

「その通りです」

「アズマオウなら世界中にいるものね。それなら、この子はどうかしら？ 行くのよ力マスジョー！」

ルリナの二匹目のポケモンが姿を現した。細長く小柄な体だが鋭利な牙がのぞき、尻尾が船のスクリューのような形をしていて、どうみても魚ベースなので水は確定だが、他にタイプはあるのだろうか。油断はできない。

「コロトック、シザーコロス！」

「遅いわ。カマスジョー、こおりのキバよ！」

「こ、氷技！」

両腕を交差して構えるコロトックに目にも止まぬ早さで突撃したカマスジョー。そのギザギザの歯は冷気を帶びて白い息を残す。コロトックは避ける間もなく噛みつ

かかる。甲高い悲鳴が響いた。

「効果抜群ね。たまつたものじやないでしょう?」

「こ、コロトック! とどめばり! 少しでいいからダメージを与えることに集中!」

ガタガタと震える体で、コロトックは自分に噛みついて離れないカマスジョーの腹に手を突き立てる。しかし刺さりもしないうちにコロトックがガクリと力尽きる。相性が最悪だ、このポケモンは水と水の複合かも知れない。この二つの複合は多い。となると次は。

「頼む、グレッグル!」

氷ならグレッグルの格闘が効くと判断してのチョイスだ。ルンパツパのあまごいがあれば万全だが、この水タイプジムであまごいは悪手なので今回は組み合わせるつもりはない。

「グレッグル、ちようはつ!」

「乗つてあげなさい、カマスジョー! お返しにドリルライナー!」

「げつ!? ジ、地面技あ!? さつきは氷技で今度は地面……!?」

「水タイプポケモンを使うからって水技しか使えないってのは三流以下よ」
毒タイプを持つグレッグルに地面タイプは相性不利だ。幸いちようはつに乗つて直線的な動きがもつと直線的になつてていたので回避はできる。それでも速度が早すぎて

そう何度もかわせるものではない。

「（リベンジで受けるにはあのドリルライナーが危険すぎる。となるとこちらから攻撃しつつ回避に専念か……！）

「カマスジョー、もう一回ドリルライナー！ 相手のペースにしちゃダメ！ かき乱すの！」

「グレッグル、どくぱり！ 動きを良く見て撃ち込め！」

左右にステップを踏みながらどくぱりを撃つチャンスを待つが、あまりに早いため回避だけで精一杯だ。このままでは体力切れでどのみち負ける。いつそそれなら……！

「グレッグル！ 息を整えて待ちかまえる！ リベンジだ！」

「勝負に出たわね。いいわ。カマスジョー、突き刺してやりなさい！」

これは賭けだ。ポケモンの技は本来持っているポケモン自身のタイプと違う場合、威力が落ちる。グレッグルが地面技で大打撃を受けるのは違いないが、タイプ不一致の場合は耐えられるかもしれない。そうなればリベンジで逆転できる可能性がある。

「グレッ……」

グレッグルが腰を落とし、両手を広げて待ち構える。カマスジョーも四枚の尻尾を最大回転させる。ゴツ、という音だけを残してカマスジョーは飛び出しコートの地面ギリギリを進んで砂をまとい、グレッグルの腹に突き刺さった。

「グ、グレッグル!?」

ぐらりと体勢を崩して倒れる——と思つたその時だ。腹のカマスジョーの体を両手で掴み引っこ抜くと、倒れる反動で体をひねつて地面に渾身の力で叩きつけた。

「カマスジョー！」

素早さ特化のポケモンだつたのだろう、カマスジョーは一度ピチッと跳ねるとそのまま動かなくなつた。グレッグルはどうにか起き上がりつたものの、片ひざついた状態だ。あと一回の行動が限界だろう。

「よくやつたわカマスジョー。いよいよこちらは最後のポケモン、カジリガメ。キヨダイマックスで全てを押し流してあげる！」

カジリガメが入つたボールが赤くなるのを見ながら、違和感を感じる。キヨダイマックス？ キヨダイ？ ダイマックスと何かが違う？

「そつか、まだダイマックスしか見たことなかつたのね。ポケモンの中でも一部の個体はダイマックスした時、姿形が変わるのよ。それに合わせて専用の技も使えるようになるわ。覚悟なさい。キヨダイマックスしたカジリガメは強いわよ！」

ボールから出てきたカジリガメは、本来四足歩行なのに二足歩行へと変化している。

また、背中の甲羅が頭頂部を覆うくらい肥大化し、首が甲羅の奥へ引っ込んでいる。赤々と輝く瞳が暗がりからのぞく姿に背筋が冷たくなった。

「実はカジリガメのタイプは調べてある。水と岩。ただキヨダイマツクスについては全く分からぬから、ここからどうなるか！」

「悪いわね、かんそやはだのグレッグルを回復させる気はないわ。カジリガメ！ ダイアーク！」

「グレッグル、ふいうち！」

カジリガメの周囲に黒い光が収束していく。グレッグルはどうにかカジリガメの方に回ると尻尾にかかと落としを炸裂させた。しかし威力はそこまでではないようで、黒い光に捕らわれたグレッグルが収束する光に押し潰される。光が霧散したそこには意識を失つて動かないグレッグルが横たわっていた。

「ありがとうグレッグル。いけつ、ホシガリス、たくわえる！」

「カジリガメ、ダイロック！」

ボールから飛び出したホシガリスが尻尾から食べかすを口に含んで身構えると、カジリガメは二本の前足を思いつきり地面に叩きつけた。その衝撃で大地が隆起し岩の壁を作る。その岩の壁に頭突きをし、ホシガリス目掛けて倒してきた。

「ホシガリス、岩の隙間を探せ！ どんな小さな隙間でもいい！ そこに入つてダメー

ジを減らすんだ！」

必死に走るホシガリス。果たして間に合つたのか、上から覆い被さる岩の壁。それは地面に激突するとバキッと碎けて小さくなつたが、代わりに飛び散つた砂がヒュウヒュウと風に吹かれてスタジアム中に舞い上がる。

「すなあらし……。スリップダメージでホシガリスの体力を削ぎ落としながらカジリガメの防御力で耐久する作戦ですか……！」

「ええ。安心して、このたくさんの中砂はあなたのポケモンごとまとめて洗い流して綺麗にするから。次のジムチャレンジャーを待たせることはないわ」

その時、コートに動く影が。ボロボロになつたホシガリスが泣きながらもつちやもつちやと口を動かしている。ギリギリ体力が残つたのだろう。オレンの実と特性のおかげで少し持ち直したようだ。

「あら、タフね。でもここまでよ。カジリガメ、キヨダイガンジン！」

キヨダイ……、これがキヨダイマックスしたカジリガメの専用技か！

カジリガメの開いた口に、大気中の水分が凝縮していく。密度を増した水は光と見紛う見た目と速度で発射された。まるでウォーターカッターだ。

「ホシガリス、たくわ……間に合わない、逃げてっ！」

「無駄よ。ダイマックス、あるいはキヨダイマックスしたポケモンの技からは何があつ

ても逃れられないのだから！」

青ざめ走るホシガリスに水が直撃すると、勢いを殺さずコートの地面まで抉る。コート中に岩が飛び散る中ホシガリスはくるくると宙を舞い、ポテンと墜落してきた。涙を浮かべたまま目を回しているその姿に罪悪感が芽生える。

「最後は――、お前しかいない！ ルンパッパ！」

ボールから出たルンパッパ、すなあらしに痛がつたあとに周囲の岩にも傷ついている。しまった、ステルスロツクを引き起こす攻撃だつたのか、キヨダイガンジンは。

「……」コロトックが予想以上に強かつたせいで、キヨダイマツクスでルンパッパを仕留められなかつたのは痛かつたわね』

ギリ、とルリナが歯噛みする。その言葉が引き金だつたようで、カジリガメの大きさが元に戻る。カジリガメもほぼ無傷ではあるが、ルンパッパの草タイプはカジリガメの最大弱点。ここまで温存できて良かつた。

「ルンパッパ！ 問題ないね!? よし、ギガドレイン！」

「カジリガメ、くらいく！ 絶対離さないで！」

カジリガメが突撃してくるより早く、ルンパッパが緑の光をカジリガメから吸収する。お肌がツヤツヤしてきたルンパッパに対し、カジリガメの足元がおぼつかなくなつてくる。ルンパッパの体力が全快した時、カジリガメがズズン、とコートに倒れ伏した。

今まで一番余裕を残した勝利だ。ノモセジムの経験が活きたバトルだつた。

「ホシガリスポーズ！」

だいぶ余裕をもつてポーズできるようになつてきた。ルンパッパは軽快なステップでコートを動きながらホシガリスポーズをしている。相変わらずいつ覚えたんだそのポーズ。

「悔しいわ。キヨダイマツクスしたカジリガメならルンパッパだつて倒せるはずだつたのに、まさかアズマオウとカマスジョーが残り全員を倒しきれなかつただなんて。大したものね」

「たまたま、たまたまトサキントやたきのぼりを何度も見ていたからできたことです。現にカマスジョーのタイプは分かりませんでしたし、対応しきれませんでした」

「カマスジョーは水单体よ」

「き、器用なポケモンですね……」

ルリナと固く握手する。ジムバッジ三つ目だ。これでワイルドエリアの北半分に入れるようになつたとのこと。

次はナツクルシティを経由し、ラテラルタウンへ。レイジさんと再会の時。感謝をバトルで伝えられるだろうか。

ここまで一度でジムをクリアできていた。ここまで努力でどうにかなる。

ここからは、才能が努力を喰らっていく世界となる。

キバナ、砂地に吠える

——ポケモントレーナーになりたい。

十年前。エキジビションマッチを観終わって帰宅し、お父さんがこつてり絞られた後、両親に切り出した。

「ポケモントレーナーって、まあ13歳なら十分旅を始める頃だけど……。シロナさんかダンデさんに憧れたの?」

違う。言つてもらつた。トレーナーとしてポケモンが見たい、そうじやなくとも夢を叶えてまた会おうと言つてもらつた。

「あらあ。学校の方は休校措置を申請すればいいけど、本当にに行くの? けつこう大変つて聞くわよ? それに料理に関わる仕事につきたいとも言つてたじゃない?」

トレーナーになつても料理の勉強はきっと継続できる。大丈夫、きっとなれる、ダンデさんみたいなカッコいいトレーナーになれる!

「……旅に行くのは止めないけどな。なれる、なんて確信も無しに言うものではないぞ」

お父さんが真剣な声でそういうからびっくりした。普段からポケモンバトルをテレビで見るのが大好きなお父さんなら、大賛成だと思つてたのに。

「今のお前には分からぬとは思うが、トップトレーナーというのは絶え間ない努力、神に愛された才能、そして天に祝福された運の三つを持ち合わせた人間なんだ。ほとんどトレーナーはそんな『天才』達が羽ばたくための踏み台にすぎない。そうやつて踏みつけられて心を折つたやつを何人も知つてゐるよ、お父さんは」

静かに話すお父さんはさつきまでシロナさんを見て喜んでいた人物とは別人のようだ。その瞳と聲音は、心が凍りそうなほどの冷たさと、泣きたくなるほどの悲しさに満ちていた。

「お前には無理だ、なんて頭ごなしに決めつけるつもりはないけどね。考えておくことだよ、トレーナーになれなかつた時のことを」

その時はひどい父親だとしか思わなかつたが、二つ目のジムすらクリアできなかつた時にあの言葉は真実だつたんだと思い知つた。後から知人に聞いたところ、父もまた昔はトレーナーを目指しジムバッヂを全部集めるも四天王に歯が立たず、ゲットしたポケモンを全部逃がしていたんだそうだ。

「……お父さんは結婚してお前がお母さんのお腹にいるつて分かつた時、トレーナーへの未練をきれいさっぱり断てたんだ。これから父親になるのに勝ち続けられるか分か

らないトレーナーなんてやれない、つてね。それからテレビのバトルも楽しんで見られるようになったし、今の仕事にも食らいつけるようになつたんだ」

あれから何年かして、シンオウ中の鉄道を管理する会社に勤める父が勤続20年記念の花束をもらつた日、酔つた勢いでそう話してくれた。

……このジムチャレンジが終わつたら、父とお酒を飲みながら語り合いたいな。とうより今すぐ家に帰りたい。何で急にこんなこと思い出すんだつて、走馬灯を見てるに違いない。さっきから怖くて震えが止まらないし冷や汗も動悸も止まらないのだから走馬灯を見ても仕方ないだろう。

「すなあらし。逃がさねえぞ」

目の前に立つ人物に退路を断たれ、走馬灯及びこの世に別れを告げる準備をした。さよならカントリーロード、さよならマイライフ。

そして何より、どうしてそんなに怒つておいでなんですか。……キバナさん。

話はほんの少しさかのぼる。バウタウンからエンジンシティに戻り、ワイルドエリア

を北上して砂塵の窪地まで来た時のこと。相変わらずのポケモンの多さに驚きながらてくてく歩いていたら、何だか人が集まっている。誰かを取り囲んでいるようだ。

「ようお前ら、ジムチャレンジがんばってるか？ そろそろアラベスクタウンぐらいは行けてないと、俺サマのとこに来るのがギリギリになっちまうぞ？」

人垣の上から顔が少し見えるあたり、高身長の人物だ。声音から男性でオレンジ色のバンダナのようなものを頭に巻いている。周辺を飛び回っているのは……スマホに入った口トムか。

「悪いが今はオフなんだ。ちいと人探ししててね。……はつは、ダンデが迷った訳じやねーよ！」

ああ、そういうえば見覚えがある。ナックルシティジムリーダー、キバナさんだ。ジムチャレンジの順番が最後だから、間違いないガラルで一番強いジムリーダーなのだろう。ほへーという感想を残してその場を去ろうとした時、ふとキバナさんと目が合つた。そして直感した。

あ、見つかった。

どうしてかは分からぬけど、なぜかそう感じた。笑顔でペラペラとファンに話をし

ているキバナさんだけど、確かに一瞬、目が合つた一瞬だけ静かでいて激しい感情を感じた。明らかに自分を『こいつだ』と認識したのを理解した。

——なんかすごく、ヤバい。

これは初めて強敵にこてんぱんに負けた時の感想を述べるミニスカートのセリフではない。ミニスカートだつてもう少し語彙はある。単に言葉に表しにくいけど、明確な危機を察したということだ。このままキバナさんの近くにいるのは、なんかすごく、ヤバい。

「まだ今はナックルジムまで来られたチャレンジヤーはいねえな。一番早いやつでスペイクタウンってどこじやねえか？」

ははは、と笑うキバナさんの方を絶対に見ないようにしつつ、さりげなくその場を去る。私は何も関係ありません、と全身で表しながら早足になりたい気持ちを制しながら離れた。こういう時に走つてしまふと悪目立ちするし、何もなくとも『逃げるつてことは後ろめたいんだ！』といらぬ勘織りを受けることになるのだ。

「んじや、俺サマも人探し再会するわ。頑張れよー！」

キバナさんがファンに手を振つてエンジンシティの方に歩いていく。ああ良かつた、よく分からぬけど良かつた。きっとあの目は見間違いだつだ。それはそうだろう、どうして有名人キバナさんなんかにガンつけられなければならぬのか。

安心して移動を再開し、五分もしない時だつた。

「——やれ、フライゴン」

低く抑えた声が聞こえた。嘘だろう、イケボを一人占めするにしては最悪のタイミン
グだ。それにフライゴンつてことはジムリーダーがポケモンを使って奇襲をするのか。
あまりのことにはパニックになつていると、自分の前後にするあらしが吹き荒れ始めた。
どうやら巨大な砂の渦に閉じ込められたようだ。訳が分からぬ。

「すなあらし。逃がさねえぞ」

本気で奇襲してきたその人は、上からフライゴンに乗つてゆつくり降りてきた。初め
からこちらを油断させるために一度場を離れ、フライゴンに乗つてはるか上空から追つ
てきたというのか。でも、そんな執拗に追われるようなことをした覚えがない。だから
こそ余計に怖くて震えが止まらない。

「ロトム、頼む」

フライゴンは出したまま、キバナさんはロトムを呼び出し何かを指示する。するとロ
トムがこつちに飛んで来てスマホの画面を見せる。そこには。

『ホシガリスポーズまた見た！ 今度はルンバツバがやつてるー』

という、写真付きSNSの投稿だつた。はつきりいつて拡散数も8とかいう小さな呟きであり、炎上した訳でも大ニュースになつた訳でもない。ただ、今このタイミングでそれをこちらに見せる意味はただ一つ。

「その写真に写つてるトレーナー。……お前だな？」

お父さん、お母さん。せめて遺骨はシンオウに届けてもらえるように頼みますね。「やつぱりそうか。他地方からの挑戦者は少ないからな。アタリを付けて正解だつた」

さつきまでのひょうひょうとした態度はどこいった。真っ直ぐ見下ろすその瞳には怒りしか感じない。何をしてしまつたのだろう。ホシガリス、お前もしかしてガラルでは名前を出してはいけないポケモンだつたのか？

「……ダンデの野郎はな、子ども達にとつちやヒーローなんだよ」

ん？ と一瞬意味を掴みかねる。ダンデさんがヒーロー、それはよく分かる。ここにそのヒーローに憧れたまま大きくなつてしまつた人がいるから。

「昨年チャンピオンが変わつたが、新チャンピオンはまだ子どもだ。いくら強いつても子どもは子どもに『憧れ』はしない。『畏怖』はするけどな。だからいまだにガラルの顔つたらダンデつてことになつてる」

まあ、開会式で見たあの子では威厳はないのは分かる。しつかりしてるとは思うけど、やはり積み重ねはダンデさんの方があるし、長年チャンピオンだつたという実績は

今なお人々の心に残っている。

「だから、今でもリザードンポーズは子ども、ひいてはガラルの共通する大切なポーズだ。あいつがガラルを背負つたからこそ余計に重たい意味を持ちやがつたポーズなんだよ」

……ん？ 待て、何かピーンときた。話の先を確信した。そしてそれはキバナさんの勘違いだということも。

「子どもが憧れて真似すんのはいい。子どもがダンデみたいになりてえから自分のポケモンのポーズをするのもいい！ でもな！ 他所からきた奴が面白半分でやるのは許せねえんだよ！」

やはりか。仕方がないとはい、キバナさんは誤解している。ホシガリスポーズがダンデさんを貶めるものだと思ってる。……良い大人がポーズするのって、やつぱりおかしいのだろうか。

「俺さまがドラゴンポーズするのはSNSで映えるためつつう目的がある」

あなたもやつてているのか！

「お前は俺サマと違つてSNSやつてねえだろ！ 自分を目立たせる為じやなきや、何のためにわざわざよその人間がポーズなんかするんだよ！ ごまかすなよ、他の地方じやあ流行つてるポーズなんかねえのは調べてあるぜ！」

これはダメだ。レイジさんには恥ずかしくて言えなかつたけど、キバナさんには全部説明しないと分かつてももらえない。キバナさんに、こちらには逃げる意思はないのでフライゴンで攻撃しないで下さいとお願ひしてみる。

「……いいぜ。すなあらしを維持するために出してはおくが、お前に一切攻撃させねえ。だから理由を教えろ」

仕方なく話す。十年前シンオウで偶然出会いエキジビションマッチを見てからダンデさんのファンになつたことから、もう一度会つてバトルタワーで彼の忘れ物を渡すためにジムチャレンジに挑戦していく、その一環でホシガリスポーズがこの世に生まれたことまで全部伝えた。改めて説明すると、我ながらめんどくさい事をやつてるなあと顔が赤くなつた。

「…………」

一方のキバナさんは全部話を聞いてくれた上で、沈黙している。そして。

「……つまり、そんなめんどくせえ、ぶつちやけダンデは忘れてるだらうことのためにシンオウからわざわざ來たつてのかよ？ んで、ダンデに見つけてもらえる可能性を上げるために、ホシガリスポーズをやつてる？」
いえす。

「つは〜〜！ マジかよ！ 念のため誰かに見られないようにすなあらしを起こして正

解だつたぜ！ 超ハズいじやん！」

このすなあらし、保身のためだつたのか。びびり損である。

「ていうかダンデのやつ、わりと言つてるからな？ 『トレーナーになつたらいつかバトルしよう』ってセリフ。ダンデらしいつちやあダンデらしいけどな」

天然タラシだ。

「いや悪かった。本当に悪かった。ガラルも一昨年の事件からガラルスタートーナメントとかを経て、ようやく落ち着いてきたトコがあつてよ。そんなダンデのやつてきたことに泥かけるつもりかと思つちまつてな。俺サマらしくもねえことをしちまつた。本当に申し訳ない！」

パンツと両手を合わせて深々と謝罪された。まさかそんな事情があつたとは露知らず、こちらも紛らわしいことをやつてしまつて申し訳ない。誤解が解けて良かつた。

「これからもホシガリスピーズ、やつてくれて構わねえよ。何かあつたら俺サマのSNSまで連絡くれれば対応できると思うし。あんたの願いが叶うといいな。にしても、何かお詫びができりやいいんだが……。ダンデに会わせる、だと意味ないからなあ……」

それなら流行とかに詳しそうなキバナさんに教えてもらいたいことがある。

「カレーのレシピイ？ 本当にそんなんでいいのかよ？ 僕サマオススメは苦口ヴルストのせカレーだが……、おつ、そうだ。これやるよ。ガラルカレーのある意味真髓つてやつ？ 珍しいんだぜ」

手渡されたのはガラスのビンに入った紅色の粉。食紅だろうか。

「キヨダイパウダー。ワイルドエリアでダイマックスの巣を攻略してると時折手に入る代物でな。こいつをカレーに使うと面白いことになるんだ。今度実際にやつてみ？」

そんなもの食べて身体を壊さないのだろうか。今まで問題になつたことはないし、近くにあるヨロイ島という場所ではダイキノコにダイミツもあるらしい。ガラルすごい。「という訳で、邪魔して悪かつた。最後に一つ教えとくぜ。バトルタワーへ行くにはジムバツチを全て手に入れる必要がある。受付くらいなら入れるが、受付で待ち伏せたつてダンデにや会えないだろうな」

つまり、と言いながらライゴンの背にまたがる。スマホロトムをポケットにしまうとこう告げた。

「バトルタワーでダンデに会うなら、ジムバツチ最後の関門である俺サマを倒す必要があるつてことだ。もしここまで来られた時は、ドラゴンの恐ろしさをその身に刻んでやるから覚悟しな」

こちらを射抜く青色の瞳が秘めるのは、最初の怒りでも普段の柔らかさでもなく。獰

猛かつ貪欲な強者の余裕。ドラゴンタイプを操る男もまた竜だということか。飛び去つていく姿に再び震えそうになり、思わず唾を飲み込んだ。

「（……ありやあどうだろうな。多分、自分でも分かつてるけどナックルシティジムまでは来られないんじやないかね）」

ダンデのように無責任なことは言わない。一度言葉に踊らされてモンスターボールを手放した人間に希望的観測など、古傷に塩を塗り込むようなものだ。

「（ホシガリスピーズ、ダンデに届くといいな）」

もう会うことはないだろう。キバナは振り返ることもなく、ナックルシティまで戻るのであつた。

ナツクルシティと、ラテラルタウン

あれはダンデさんに会うよりもつともつと前。まだ10歳にもなつてなかつたと思う。家族で初めてイッショ地方のライモンシティに行つた時のことだ。あそこは巨大な遊園地があるので、たまの休みにと家族を連れてきてくれたのだ。

『お父さん、お母さん、どこ……？』

ところが遊園地で母とはぐれてしまつた。父は別行動でポップコーンを買いに行つており、初めての場所で初めての外国、分からぬ言葉が満ちる場所で一人になつたことでパニックになり、走り回つて親を探して逆に自分がどこにいるのか分からなくなつてしまつた。

『うえええん……。誰かあ……。お父さんとお母さん連れてきてよお……』

壁際で座り込んで泣きじやくつていたところに、遊園地のスタッフが声をかけてくれた。何を言つているかは分からなかつたけど、服がスタッフのもので迷子センターのイラストが書かれた建物を指差していたので大人しくついていった。

『すみません、放送を聞いてきました、ここにうちの子がいるつて……!』

館内放送が流れて15分ほどしてからだろうか、母ではなく父が迎えに来てくれた。母も私がいないとパニックになつて遊園地を飛び出してバトルサブウェイの方まで探しに来てしまつたらしい。母と合流した父が遊園地に戻つて放送に気づいたということがだ。

ただその時、異国の子どもを元気付けようと、遊園地の料理スタッフがたまたま昼時でまかないご飯が残つていたのを分けてくれていた。料理スタッフが必死の身振り手振りで『食べてごらん、おいしいよ』と示してくれたそれは今なら分かる、オムライス用のケチャップライスに唐揚げを乗せただけの余り物のご飯だつた。それでも憔悴しきつっていた子どもには人生で一番おいしい食事に思えたものだ。思わず顔を輝かせたらスタッフ達も喜んでくれたのを覚えている。

あの時の経験が料理人になりたいという夢を持つきつかけとなつた。言語や文化の壁を超えて人を笑顔にできる『料理』を学んで、いつか同じように迷える誰かに食べさせてあげたい。その夢がガラルに来たことでより明確になつたのは、嬉しい誤算としか言いようがなかつた。

ここはナツクルシティ。あれから無事にたどり着きポケモンセンターでポケモン達を回復させていると「ジムチャレンジ?」と優しいマダムに声をかけられた。毎年ジムチャレンジに挑む人と話すのが楽しみなのだという。

「まあ、シンオウ地方からいらしたの。それは大変だつたわねえ。普段のご職業は?……お料理を。素敵ね。ご専門は?」

いずれはガラルのカレーを扱う店を出したい、そしてポケモンバトルもやれる店にしたい、と話す。するとマダムは少し不思議そうな顔をした。

「確かあなた、シンオウにもそのようなお店があるのでなくて? 名前は……、そうそう『レストランななつぼし』。味にこだわりすぎのお店で、ポケモンバトルができると聞いているわよ?」

そう。その通り。シンオウにある『レストランななつぼし』は正にポケモンバトルもできるレストランなのだが、自分の夢とは相違点がいくつかある。一つは高級レストランなので万人向けではないこと。二つ目にバトルをしないと食事ができないということ。

マダムはご存知なかつたが、シンオウには知る人ぞ知る『カフェやまごや』というバトルできる飲食店がもう一つある。店の在り方などはイメージに近いが、問題は商品が

モーモーミルクただ一つきりだということ。店の規模など参考にならない部分が多い。帶に短し、たすきに長しだ。

「もつと気軽にというコンセプトをお持ちなのね。それなら、ブティックの隣にあるバトルカフェに行つてみたらいかが？ マスターにお話を伺えば何か得られるものがあるかも知れないわ」

バトルカフェ？ 確かエンジンシティにもあつた店だ。経費削減のために入らなかつた覚えがある。ここその他にシユートシティにも同じ店があるらしい。系列店があるほど人気店なら、たしかに経営のノウハウとか学べることがありそうだ。

「ああ、それでも急いだ方がいいわよ？」初めての人はキルクスタウンに向かう水路で時間がかかるもののなの。自転車がないなら手持ちになみのりができるポケモンが必要よ」

なみのりか。ルンパツパができるかも知れない。後で確認しよう。でも、もしかすると期間中に間に合わなくて必要なくなるかも知れない。そうならないことを願わずにはいられなかつた。

「いらっしゃいませ」

バトルカフェにつき、入り口を開けると渋い男性の声が出迎えてくれた。店内はいくつかのテーブル席があり、入り口の向かいにはショーケース越しにマスターがいる。お客様もそれなりに入つており、意外なことに男性客もそれなりにいる。

「ねえねえ、こつちのマカロンも食べてみなよ～」

「わ、私はいいです……」

「んもう、ウチらの前ではいいじやん、スイーツ好きなんでしょ？　それに今年は勉強優先でジムチャレンジ断つてるんだし、勉強には糖分が必要だぞ～？」

「うう、か、格闘ジムリーダーとして、あまり、その……」

女子学生達の可愛らしい声が似合う内装の店を進み、マスターの元へ。と、マスターの横でフワフワ浮遊しているポケモンがいる。見た目がまるでミルクのようなこのポケモンはもしかして……！？

「私のマホミルですよ。もしかしてマホミル見るのは初めてですかな？」

これがマホミル……！　覚えておこう。とても可愛いミルククラウンの姿をしたポケモンに笑いかけた後、こちらの事情を簡単に説明する。マスターは「なるほど」と言うと、店の奥から系列グループのパンフレットを持つてきてくれた。マクロコスモス・ライフという巨大企業の一部門が支援しているようだ。

「このお店のコンセプトや年間計画、経営方針なんかが載つてますよ。大企業の下でお店を開くんじゃなくて個人経営なら勝手は違うと思いますけど、こういう知識はあつて損はないですからね」

なるほど。今の仕事先では経営についても学ばせてもらつてはいるが、他の経営方針を知るのもまた勉強。ありがたくもらつておくことにした。

「それと、うちのコーヒーはヨシダ珈琲さんから、スイーツはアウローラさんから卸しますから、気になるならそちらにも話をうかがつてみてください。これは個人的な教訓ですが、飲み物をバカにしちゃいけません。メインとデザートは良くても飲み物が貧相だとリピーター減りますからね」

うげつ、と心に言葉が刺さつた。カレーならミネラルウォーターと子ども用にミックスオレがあればいいか、と簡単に考えていたためである。図星とはこのこと。マスターは意地の悪い顔をする。

「間違つても、ミネラルウォーターとミックスオレだけなんてダメですか?」
思わず「ひえつ」と声が出た。

「兄者、今日の我らが王の予定は把握済みですか？」

「もちろんです弟よ。エレガントな我々に抜かりなどあるはずがありませんよ」
強烈な個性を主張する髪型をした赤と青のスーツを来た二人組を三度見しながらナックルシティを出た。ラテラルタウンへは六番道路の遺跡を抜けて行く。高低差のある道をひいひい言いながら進むと、一度見たことのある景色が広がっていた。ラテラルタウン。ついにここまで来たのだ。

「はい、それでは明日の午前の部でお受けします。健闘を祈っています」

ジムに行つて予約をすると、翌日に受けられるとのこと。ターフタウンの頃よりずっと早くなつた。それだけまだバウタウン以前をクリアできていないチャレンジヤーがいるということ。自分はまだ大丈夫、今回も全力を尽くそう。

……そう、心のどこかで『大丈夫』と。思い込んでいたのだ。

翌日になり、ラテラルタウンジムのミツシヨンがスタート。乗り物に乗つてピンボールのようにジム内を縦横無尽に動き回り、行き着く先でポケモンバトルをして先を急ぐ。

「おめでとう、きみの勝ちだ。あれからルンパッパも手に入れたんだね。いよいよ次はオニオンくんとのバトル。気合いを入れていくんだよ」

フワライドとゴーストを繰り出したレイジさんの激励を受けてジムミツシヨンクリ

ア。スタジアムに移動し、観衆の見守る中。
オニオンに、敗北した。

道を選ぶのは、君だ

ご主人の声が、とても遠くに聞こえる。何か指示を出しているのだけど、聞き取れない。それほどに目の前の存在が恐ろしくて、目が離せない。

“戦えないやつは、引つ込んでな”

ゲタゲタと笑うその巨大なポケモンの意志が響いてくる。そして黒い光の攻撃に飲み込まれ意識を失つてしまつた。傷はすぐに癒えたけど、あの意志が、ずっとずっと耳元で響き続けている。

ゴーストタイプ使いのジムリーダー、オニオンとのバトル。向こうのキョダイマックスゲンガーに対しこちらの最後のポケモンはホシガリス。ところがホシガリスはキョ

ダイマックスしたゲンガーを一目見るなり怯えてしまい、動けなくなってしまった。こちらの声も届かなくなつたホシガリスは、何もできずにゲンガーの攻撃をもろに受け、負けた。ジムチャレンジ初めての一回突破失敗であつた。

「あ……、あのう……。ホ、ホシガリス、怖がらせちゃつたかもしれないです……。もし、そうだつたら、ごめんなさい……」

試合が終わつて握手した時、オニオンさんはそう言つていた。ポケモンセンターで傷を癒した後全員をボールから出してみたら、ホシガリスだけずつと震えている。ジョーイさんに診てもらつたところ、精神的な恐怖とのこと。

「オニオンさんと戦つたポケモンは、時々こうなつちやうんです。彼のキヨダイマックシティまで戻つてきていた。ラテラルタウンはレイジさんがいる、ナツクルシティはキンバナさんがいる、どちらも氣まずい。それでエンジンシティだつたのだろう。スマホには最初に来た時に連絡先を教えてもらつた空飛ぶタクシーに電話した履歴が残つていた。

そこからはよく覚えていない。あまりのショックに気づいたらもう夕方で、エンジン

「スポミーインは深夜は締まりますので、戻る時間にはお気をつけください」

今日はこれ以上街を移動する気になれず、ホテル・スポミーインに荷物を置く。それでも落ち着けず、貴重品とモンスター・ボールだけを持って夜のエンジンシティに迷い出る。店の灯りが一つ、一つと消えていつても戻る気になれず、エンジンリバーを眺めながら今までのことを思い出していた。

十年前のダンデさんとの出会い。

すぐ辞めてしまつたポケモントレーナー。

ダンデさん敗北のニュース。

ノモセジムへ挑むこと一年。

ガラルに来て始まつたジムチャレンジ。

三つのジムクリア、そして負けたラテラルタウンジム、オニオン。

初めはコロトックだけだつた。そこからグレッグル、ホシガリス、ルンパッパが仲間になつた。だが……。ホシガリスに深い心の傷を負わせてしまつた。どうすればいいのだろう。何がいけなかつたのだろう。考えても考えても答えは出ず、思考は袋小路に入り込んでぐちやぐちやだ。

『もしもし。こんな時間にこんなところでどうしたんだい？』

それは地元の言葉だった。シンオウやカントーなどで使われる、このガラルでは異国の言葉。すでに懐かしくなりつつあつたその言語に反応して振り返る。そこにはロマンスグレーの短髪、鋭く細い目の男性が立っていた。すぐ横には見たことのない炎タイプのポケモンが控えている。ペンドラーの仲間だろうか、節のある体をしたむしポケモンのようにも見える。

『そこから身を投げるのはおすすめできな……ええっ!? ど、どうしたんだい、具合が悪いのかな!?』

気づいたら涙が出ていた。懐かしい言葉と優しい気遣いに触れて、ここまでピンと張り詰めていた気持ちがゆるんでしまい、涙が止まらない。止まらないけどひとまず身投げではないだけは伝えた。ガラルの言葉で。

「あ、こっちの言葉で通じるんだね。死ぬつもりがないなら良かつた。……そうそう、僕はカブ。普段はエンジンシティジムでジムリーダーをやってるんだけど、ホウエンに帰郷しててさ。つい昨日帰ってきたんだ。それでその格好、君もジムチャレンジかな？」

スポーツミーティングに部屋があるならそこで話すかい？」

すびすびと鼻を鳴らしながら同意し、自分の部屋に案内する。ホテルにカブさんが来たらスタッフが驚いていた。さすがジムリーダー。

部屋に入つてこれまでのことを話す。一度キバナさんに話してしまつたからだろうか、もう抵抗感なく話せてしまえる。

「そうか。話してくれてありがとう。大人つてさ、子どもと違つて諦められることと諦められないことがごちやごちやになるんだよね。ある意味子どもよりもワガママとも言える。でもさ、それを貫いたり守つたりできる大人が高みを目指せるんだと僕は思うよ」

僕も、とカブさんが悲しい笑顔を浮かべる。

「一時期マイナージムに落ちてさ。あの頃は荒れたなあ。見映えの悪い戦術を使つたりしてメジャージムまで戻ってきたよ。僕はどうしても負けていることが許せなかつた。マイナーのままなんて、そんなの受け入れられなかつたんだよ。客受けがどれほど悪くてもね」

一流と呼ばれる人間達は自分とは違うと心のどこかで思つていた。でも、同じような壁や試練に對してどこまで立ち向かえるかで他人からの評価が変わるのかもしね。料理もそうだ、卵焼きを作るだけなら子どもでも作れる。しかし素材や手法の違い、工夫がそこに加わることでプロの料理人が作つた卵焼きになるのだ。

「……さて、君のホシガリスだけど。そもそも君は、ポケモン達に自分の考え方や意思を伝えたのかい？」

意思？

「どうしてジムチャレンジに挑んでいるのか、どうして勝ちたいのか。ジムチャレンジが終わつたらどうしたいのか、ポケモン達には一緒に来てほしいのか、それともガラルからシンオウには連れ帰らないのか。君の考えも分からぬ中で、特に戦いたくて君のモンスター ボールに入つた訳ではないホシガリスはずつと不安だつたんじやないかな」はつとする。そうだ、ホシガリスはバトル用に捕まえたポケモンじやない。これまでもバトルのたびにこつちを見たり、泣きそだつたりしていた。ホシガリス、君はずつとずつと『主人の考えが分からぬ』まま戦つっていたのか。それはどれだけ怖いことだつただろう。

「一度、君の手持ちのポケモン達と話してごらん？　ポケモントレーナーだけじやない、ポケモンと人が共に生きるなら、お互の考え方を理解しておかないと。悲しい誤解から人が傷ついたりポケモンが捨てられたりする事件は後を絶たない。良いきづかけだと思うよ」

それと、一枚のチケットとメモを渡された。

「君たちが向かうべき方向が決まつたら、そのメモを見なさい。そして必要ならそのチケットの場所に行つて、僕の名前を出してごらん。その道のプロがいるなら、その人に聞くべきだからね」

それじゃ、とカブさんは出ていった。部屋には自分と四つのモンスター・ボールが残る。少し考えて、ポフインを新しく作つてから四匹のポケモンをボールから出した。ホシガリスは相変わらず震え、ポフインにも興味を示さない。

——聞いてほしい。

四匹がこちらを見たのを確認し、ゆっくり言葉を選んで話す。もう一度ダンデさんに会うために、できるならバトルタワーに行けるジムバッヂ8つ分勝ちたい。無理なら一戦でも多く勝つてホシガリスポーズをする。キバナさんが気づいたように、ダンデさんも気づくかもしれないから。

そして、ジムチャレンジがどんな結果で終わつても、ポケモントレーナーとしてはそこで終わり。シンオウに帰つてポケモンバトルもできるカレーとポフインの店を開きたい。それが自分の目的で、自分の願い。

これ以上一緒にいられない、と思つたら部屋から出て行つてかまわない。ドアは開けてある。

バトルだけ協力してくれるなら、ボールに入つてほしい。

お店まで手伝つてくれる、つまりシンオウまで来てくれるなら、一緒にポフインを食

べよう。

四匹のポケモンは互いに顔を見合せている。まず動いたのはグレッグルだ。すたすたと進み出て、ポフインを取り、そのまま仲間に背中を向けて床に座った。

次に動いたのはルンパッパ。ホシガリスに「ンツパ」と何か言うと、ポフインを両手に持つてグレッグルの横に座った。

「キリリ」

コロトックはホシガリスに何かを促している。ホシガリスはまだ震える体でグレッグル、ルンパッパ、コロトック、そして自分を見る。自分は何も言わない。ホシガリスがどんな答えを選ぶにしても、後悔しないと言える。

ホシガリスはトコトコ歩くと、まずグレッグルとルンパッパの前へ。

「グレ、グレグレ」

グレッグルが何かを言い、ルンパッパもうなずいている。またトコトコ歩いてきて、コロトックの前へ。コロトックはお腹を静かに鳴らして感情を伝える。最後に自分の前に歩いてきた。じつと見つめるホシガリスは、いつの間にか震えが止まっていた。

「キキッ」

撫でて。そう言つてゐる氣がして、そつと手を伸ばした。頭にゆつくりと触れてわしゃわしゃと撫でる。また涙腺がゆるんできた。ホシガリスは目を閉じて撫でられるがままになつてゐる。と、その時。

ホシガリスの体が輝き出した。

えつ、と驚いて手を離した。残りの三匹も目を見開いてホシガリスを見ている。輝きに包まれたホシガリスはだんだんと体が大きくなつていき、光が落ち着いたそこにはふた回りほど大きくなつたホシガリス……いや、進化した新しいポケモンがいた。灰色だつた体は赤茶色に変わり、貫禄のある体により太くなつた尻尾。そして何より。

顔つきが、ものすごくふてぶてしくなつた。

「——バリスツ！」

鳴き声が、バリス……ドスドスと重々しくテーブルに近づくと、ポフインを驚掴みにしてどんどん口に放り込み始めた。それに慌てたグレッグルとルンパッパがテーブルに飛び付いて自分達の分を確保していく。なんと他のポケモンが確保した分にさえ手を出していく元ホシガリス。その様はまるで。

「ヨクバリ……、ス」

何でだろう。間違ひなくこいつの名はヨクバリスだと確信した。そんなヨクバリス、ふと目が合うと力強く「バリスツ！」と笑顔でうなずいてくれた。呆れた顔をしたコロ

トックが仲間達の仲裁に入り、各々が食べるポフインを取り分けていく。気づけば全員がポフイン、つまり最後まで来ることを選んでいた。

ありがとう。

改めてみんな、これからもよろしく。

お先真っ白、カンムリ雪原

十年前。

シンオウ地方二つ目のジムに勝てず、ポケモントレーナーを辞めようと思うまで三日もかかりなかつた。六匹もポケモンを捕まえて挑んだ自分に対し、すぐ後にチャレンジした年下の子はジムにとつて弱点タイプの手持ち含め二匹だつたのに完勝したのを見たからだ。

今なら分かる。ただ捕まえただけではなく、技の構成、相手の動き、先読みなどがきちんととしてないと何匹手持ちがいても勝てない。軽い気持ちで無計画に挑んで勝てる世界ではないのだ。でも当時13歳の自分にはそんなことも分からなかつた。だからやめることにした。

ダンデさんの言葉が甦つたが、もう一回挑もうという気持ちはどうしても持てなかつた。ふて腐れながら家に戻る道すがら、ムツクル、ビッパ、イシツブテ、コリンク、ブイゼルを捕まえた場所に近いところで逃がしていく。その五匹は一度だけ若い主人を

見ると、そのまま走り去つていった。

最後のモンスター・ボール。出てきたのは初めて捕まえたポケモン、コロボーシ。コロツクの進化前のポケモン。他のポケモンにも伝えたことを告げる。もうポケモントレーナーじゃないから、逃げていいよ。コロボーシも一度主を見上げると、とぼとぼと歩きだした。耐えられなくなりコロボーシに背を向けて走ろうとした時だつた。

「キリリイ!!」

聞き慣れた鳴き声。振り返ると、ただでさえ動きの遅いコロボーシが悲鳴のような声を上げながら追いかけてくる。他の五匹より早く捕まえたコロボーシだけは、主との間に確かに絆が芽生えていた。それにコロボーシは知っていた。逃げていいという主が、目に涙をためながらこぼさないように耐えていたことを。

コロボーシと一緒に帰宅すると、母はなにも言わずにポケフードを用意してくれた。父は「むしタイプは寒気に弱いから、暖かい寝床を用意しとくんだよ」とだけ告げて仕事を出かけて行つた。あの日からコロボーシ、そしてコロツクは唯一無二の相棒であつた。

あれから十年。

出会つてから初めて、コロツクに本気で怒られた。

……凍死させかけたために。

カンムリ雪原。一年中雪が降る地域でほとんど人は住まなくなつた場所らしい。シンオウにもキッサキシティという豪雪地帯があるから大丈夫だろう、とたかをくくつて行つたら予想以上に寒くて吹雪だつた。寒すぎたため野生のポケモンとのバトルでボールから出したコロトックが、その場で状態異常こおりになつてしまつたのだ。

「キリリリリリリ……」

慌てて避難した小さな村で、コロトックはとても低い声でさつきから恨み節をぶつけてくる。本当に申し訳ない。まさかそこまでとは思わなかつたのだ。早く目的を果たして帰ろう。

どうしてカンムリ雪原にまでやつて來たのか。話はヨクバリスに進化した時にさかのぼる。仲間達との絆が深まつたことを確認し、カブさんにもらつたメモを見てみるとに。

『君がセイボリーくんと戦う時にゴーストタイプと悪タイプを探していたと言つていたから、悪タイプのエキスピートを紹介しておく。オニオンくんに勝ちたいなら悪タイプをおすすめするね。スタッフに僕の名前を出せば会えると思うよ』

紹介、という割には一緒にあるチケットはライブハウスでのライブチケットだ。『マキシマイザス』というグループらしいので翌日さつそくバウタウンにあるライブハウスに行き……、感激した。感激ついでに物販にあつたアルバムのCD買いまくつた。また財布が軽くなつた。

「カブさんですか。面倒なことを頼んでいきやがりましたね」

感涙にむせびながらスタッフに話をしたら、よりによつてたつた今ファンになつたマキシマイザスのゲストボーカル、ネズさんが出てきたではないか。年甲斐もなくめちゃくちや緊張しながら今日ファンになりました、サイコーです、CD買いましたと報告。「……ありがたいですが、用事がそれだけなら失礼しますよ」

いけない、本来の目的を忘れていた。改めてネズさんに聞きたいこと。それは元悪タイプのジムリーダーだったネズさんに、ジムチャレンジ攻略用の悪タイプポケモンを教えてもらうことだつた。

「ええと、本気でこの先もトレーナー やるというよりは、俺みたいに副業トレーナーつて感じですか。となると気性が荒かつたりなつきにくいのは合わなさそうですね」

あれじやない、これじやないとブツブツ呟くネズさんの後方では、コロトックと同じよう胸の器官を弾いて音を出す二匹のよく似た紫色のポケモンとドラム担当の緑色の髪を持つポケモン、そしてネズさんの髪色と同じボーカル担当の白黒ポケモンが興味

深そうにこつちを見ていた。

「……悪タイプの『悪』ってのは、人間が勝手に分類した決めつけの性質なことが多いです。野生のポケモンとしては似たようなことをやるのが他のタイプにいても、人に害なすポケモンが悪タイプに分類されます。つまり、そもそも人間に敵がい心を持つ段階で扱いにくいんですよ」

そんな中で可能性があるなら、と前置きし。

「……アブソル。そつちの地方にもいるんでしょ？ 細かいことは知らねえんですけど。あれなら受け入れられさえすれば温厚で従順ですよ。ただしガラルだとカンムリ雪原にしかいないし、受け入れてくれるかはアブソル次第だから覚悟して行くことですね」

アブソル。わざわいポケモン。シンオウにも生息するがあまり見られないポケモンだ。カンムリ雪原には電車で行けるが極寒なので寒さ対策をしていくこと。日帰りは無理だろう。ますます残された時間がなくなっていくが、ここでアブソルを捕まえないという選択肢は自分の中には無かつた。

「あんたのこの先なんてどうでもいいんですがね。才能の限界を感じた大人同士、この先もやさぐれたまま頑張りましょや」

言葉と裏腹に吹つ切れた様子のネズさんに感謝を述べ、カンムリ雪原へ。そして猛吹雪の中コロトックを凍らせかけたのである。極寒をなめてた。早いとこ誰かに聞き込

みをしないとまずい。人も少ないし、この村を出て何かあつたら最悪遭難するかもしない。

「ほんとに、いーかげんにしてよオヤジ！」

「そんなシャクちゃん、やつとカンムリ雪原の伝説の全貌を暴いてこれから新しい伝説をパパと一緒に紡いで行こうぜって時なのに！　いや、ははーんシャクちゃんもうすでに新しい伝説見つけてて、パパを焦らしてるんだな!?　ド・そうだろ!?」

「は？　んなワケないから！　あたしはダイマックスアドベンチャーでチヨー良い感じにポケモン捕まえたからそろそろ帰りたいつづーの！　もういい、一人で帰るから！」

……親子喧嘩だろうか。気まずい現場に遭遇してしまった。さすがにその人達に聞き込みはすまいと思つていたが、逆に父親らしき人物と目が合つてしまつた。

「やいお前！　分かつてるな、シャクちゃんはカワイイから見とれるのも仕方ないつてもんだ。でもウチの娘とお友達になるなら、まず俺の面接を受けてもらおう！　ご趣味は？」

なぜ父親が面接するんだ。

「そつちは無視していーよ。んで、何か用？」

アブソルをどこかで見かけなかつたか聞いてみた。

「あー、見た見た。巨人の寝床っていう、マップある？　……こ、こらへんで見たし。

でも今日ぐらいためつちやヤバい吹雪の時でしか見たことないから、急いだ方がいいかも？」

「さつすがシャクちゃん！ パパ感動したぜ！ 世界一の自慢の娘だ！」

「そういう暑苦しい所がウザインだよねー……」

感謝しつつ教えられた場所に向かう。カンムリ雪原のほぼ中央を少し南下した、雪原を流れる川の近くらしい。ゴウゴウと吹き荒れる雪を搔き分けるようにして進む。まずい、思つたより遠い。行ける行けると軽率に判断した二十分前くらいの自分を止めてやりたい。戻ろうか。そう思つて振り返つた。

世界は純白に染まつていた。

まずい。ものすごくまずい。目印になると思つてたダイ木とかいう巨木さえ見えなくなつていて。キッサキシティよりは楽だと考えていた三時間前の自分を殴りたい。手をやみくもに振り回すも、触れるのは雪と風ばかり。これは本気で遭難してる。思わず雪の上に座り込んだ。

「ウオルルウー……！」

どこか、近いところでポケモンの吠え声が聞こえる。左右を見るがあいにくの吹雪で何も見えない。誰？　お迎えにはまだ早いよ？　そんな心の声が思わず口から出たのか出なかつたのか、ウルルという唸りがさらに近づいた気がする。もう一度左右を見た瞬間だつた。

「パオオオオーン!!」

鼓膜を突き破るような大きな声。はつと視線を動かすと鼻が長くて緑の背中を持つ、ゴマゾウに似ているようにも見える大きなポケモンがこちらに向かつて走つてくるところだつた。紫色の光に追われているところを見るに攻撃を受けているらしく、自分達には気づかず一直線に突つ込んでくる。どうしよう、逃げたいけどどう逃げればいいのか分からぬ！

「——ウオルル！」

ぐいっとエンジンシティで買ったマフラーが引っ張られる。べほ、とかいう変な声を上げて後ろに引きずられると、少し雪の上を移動してすぐに背中に触れる感触が土のものに変わつたのが分かつた。山肌に開いた穴か何かだろうか。引き込んでもらつた爪

先のすぐ前を大きなポケモンが走り去っていく。

「………」

そつと視線だけで外をうかがうと、知らないポケモンが空に浮いていた。全体的に紫がかつた鳥のようなポケモンで、美しく長い尾羽が風を無視して緩やかに揺れている。目元には覆いのようなものがついていて、細く鋭い眼光がみえる。あの紫、逃げてきた大きなポケモンを襲っていた光と同じ色か。しばらくその場にとどまっていたが、パッと消えてしまった。

「ウルル」

もう一度マフラーをぐいっと引っ張られる。へげつと声が出ると同時にマフラーが首から外れ、取られてしまった。少し落ち着くとようやくそこが洞窟の入り口だということが分かった。安心したとたんに疲労と寒さがどつと襲ってきて、歯の根がガチガチと鳴り出す。近くにいるはずのマフラー泥棒も視界の外にいるのか見つからない。

——ごつつ。

不安と寒さと疲労でおかしくなりそうな瞬間、それが聞こえた。洞窟の奥から何かの足音が聞こえたのだ。地面に直接倒れているからこそ足音だと断定できる。でも、一体何が。何がこんな所に住んでいるというのか。

ごつつ。

まだだ。また聞こえた。助けてくれた何かではない。あれは足音がせずにマフラーを取つた。じやあこいつは何だ。まつ、まさか、この洞窟の主か？ 聞いたことがある、アローラ地方には『ぬしポケモン』と呼ばれる通常個体より大きいポケモンがいると。つまりはこの洞窟の主で、不用意に入ってきた侵入者を撃退するために、奥から出てきたのか……！？

ごつつ。

ああ、時間を司る神に等しいディアルガよ。空間を司る神に等しいパルキアよ。どうかどうか助けたまえ、シンオウのハクタイシティにある銅像にカレー捧げるから助けたまえ！

「グメエ」

この場に絶対いるはずのないウールーの声が聞こえた瞬間、恐怖が限界を突破して失

神した。

「……そうですよ。ええ、アブソルを薦めておきました。今後はいきなり厄介ごとを押し付けやがるのはやめてくださいよ」

スマホごしに文句を言う。相手は詫びながらも迷惑じやないだろう？ などと調子の良いことを言つてくる。

「マリイやチャンピオンは才能の壁なんてしばらくは感じねえでしょうからね。そういう意味ではまあ、悪くなかったですよ。トレーナーと他の事の両立なんて、それこそルリナでもない限り無理つてもんです。久々に一度へし折れた人間を相手するのも悪くはない」

それに、と続ける。

「あんたなりの発破でしょ？ アレ。ジムリーダー降りて音楽でやつてくつて決めて二年。慢心すんなつづう。……いらねえお世話ですよ。ネズにアンコールはない。ひよつてる暇もないんでね、慢心なんて永遠にしねえですから」

それなら良かつた、今度また聞きにいくよ。そんな言葉を最後に通話を切る。

「……うつし、帰つて気合い入れて新曲完成させますか
丸めた背中が、楽しげに揺れた。

古傷とマフラーと、ポフイン

「おーい、バイウールー、そろそろカレーできるぞー！　どこ行つたんだー！？　しかし
ひつどい吹雪だなあ。ソニアの言つてた足跡は天気が回復したら探……！？　え、人
たたた大変だ死んでるのか！？」

グメエ、とバイウールーが首を横に振る。

「生きてるんだな!?　じゃあ急ごう！　悪いけど二匹でテントまで運んでくれ！」

結論から言うと、あれはぬしポケモンではなく、バイウールーというポケモンだつた。
フィールドワークに來ていたという少年に助けられ事情を説明し謝礼を払おうとする

と「いいつていいつて！ それよりダイオウドウに追われたのに大きなケガもなくて良かったな！」と笑顔で言つてもらえた。いい人すぎる。

少年はカンムリ雪原にいるとても珍しいポケモンの生態調査に来たが、吹雪のために洞窟でキャンプしていたという。ようは似た境遇という訳だ。少し一緒にここで休ませてもらうために手持ちのポケモンを出したところ、コロトックがまたしても絡まれたのはソニアを思い出させた。

「ところであの野生のアブソル、よっぽどマフラー気に入つたんだな。首に巻いて離さないぞ」

そう。何の因果か普段の行いの賜物か、ダイオウドウから自分を助けてくれたのはアブソルだったのだ。白い体毛、引き締まつた四つ足、顔の右側に紺色の角が一本だけ伸びているそのポケモンは、エンジンシティで買ったマフラーを器用に首に巻いたまま、今も逃げずに伏せの姿勢でこちらを見ている。その割には近づこうとするとウルル、と威嚇されるのだが。

「……そういうやさつきチラツと見えたんだけど、あのアブソル首に大きな古傷があるんだ。それを見られたくなくてマフラー借りてるのかもしないぞ。伝承通り災いから助けてくれたんだし、あげてもいいんじゃないかな？」

アブソルの『わざわい』ポケモンとは、アブソルが現れると災いが起ると言われた

からだ。その実態は角で災害などを察知し、先んじて人に知らせようとするからだと今では解明している。自分もそれで助かつたのだ。命の恩人、いや恩ポケだ。

「俺はカレー食べたらここ離れるから、この場所でキャンプやつてていいぞ。吹雪も落ち着いてきたみたいだし。……え、このカレー？ 寒いとこなら絶対コレ！ 体ポカポカ辛口スパイシーカレーだ！ ……スパイスの成分？ ビンのラベルに書いてあるから、好きなだけ見ていいぞ」

ありがとうと礼を言つて別れた。初めて顔を見た時ダンデさんに似てると思つたけど、初対面の子にまで重ねてしまふとか失礼だ。そんなに会いたいのか、いや会いたいけど。

さて、残つたのはアブソルだ。カレーを食べに来なかつたが逃げる様子もない。コロツク達を下がらせてから、ホテルでやつたように自分の意思を正直にアブソルに伝えてみることにした。

ジムチャレンジの戦力として力を貸してほしい。可能ならその先シンオウ地方で店を開く時も一緒にいてほしい。もしそれらがダメでも、そのマフラーはあげる。アブソルはじつと見つめながら話を聞くと、ゆっくりと立ち上がつてついてこいと言

うように洞窟から出ると、雪の上で四肢に力を入れ牙をむき出しにして戦闘態勢をとつた。捕まえたければ力づくりでこい、ということか。グレッグルがずいっと前に出た。さすがは手持ちきつての戦闘好き。なおヨクバリスはまだ足りないのかさつきからずつと氷をかじっている。お腹壊すなよ。

「ウルルツ！」

「グレッ！」

アブソルが飛びかかり爪で切り裂こうとするのをかわし、どくばりを放つ。身をよじって回避したアブソルが後ろ足で雪を蹴り上げて簡易煙幕に隠れる。グレッグルの行動が一瞬鈍った隙に煙から飛び出しグレッグルの顔面を前足で打ち、付けていたピントレーンズをどこかに弾き飛ばした。あれは『はたきおとす』の技だ。

「グレグレ……」

グレッグルは得意の『ちようはつ』からの『ふいうち』に持ち込もうとするが、ちようはつの視線を逸らされ回避される。仕方なく作戦を変更しどくばりを撃ち込もうと腕を振るうが、まるで最初からそう行動すると分かつていたかのようにグレッグルの手を頭の角で止めたではないか。驚くグレッグルに目にも止まらぬ早さで体ごと突っ込んだ。

「ウルルウ！」

『みきり』からの『でんこうせつか』だ。一瞬ぐらりと揺れるグレッグルにアブソルが浅く息を吐く。だが、ニヤリと笑うのを見てアブソルは気づいた。身体をがつちりと掴まれていて動けない。『リベンジ』だ。

「——グレッ！」

グレッグルはアブソルを腰から持ち上げ、自分の頭上を通して後方に投げ落とす。ナゲキというポケモンが得意とするともえ投げの要領だ。ギヤンと甲高い鳴き声と共に距離をおくアブソル。格闘タイプの攻撃は悪タイプに抜群に効く。うかつに接近すると危険と判断したのか、隙を伺つて間合いをとつている。と、くわえていた何かを目元に装着した。

「ンッパ！」

それはグレッグルからはたき落としたピントレンズ。さつき投げられた時に拾つたらしい。急所に当たりやすくなるアイテムだ。ルンパツパがさすが！ と言いたいそうにサムズアップをアブソルにした。当のアブソルは何とも言いがたい顔をしているが。

このアブソルの特性はおそらく『きょううん』。この特性だけで攻撃が急所に当たりやすくなる。ピントレンズもまた急所に当たりやすくなる道具なので、今のアブソルは本来よりも攻撃が急所に当たりやすくなっているということだ。

「グレ……！」

警戒するグレツグル、それでもリベンジ狙いで腰を落とす。それを見たアブソルは思いきって飛びかかり、鋭い爪で切りかかる。互いに長期戦はないと判断したのだろう。渾身の一撃だ。アブソルの爪はグレツグルの腹部を切り裂いた。グレツグルはよろよろと千鳥足になり、手を伸ばしてリベンジを発動しようとしたが、痛みが上回つて仰向けに倒れてしまった。本当に急所に当ってきたらしい。さすがである。

「キリリ、キリ？」

戦闘が終わつたと判断し、ずっと黙つて見ていたコロトックがアブソルに声をかける。アブソルもそれに応え、何か会話をしているようだ。その間にルンパッパがグレツグルを助け起こしている。なおヨクバリスはふてぶてしい顔の眉間に深くシワを刻みながら両手で土を握りしめ、前屈みになつたままピクリとも動かない。冷や汗が額を一筋伝つてゐる。……やつちまつたか。

「キキリ」

コロトックが荷物の側に行き、いつもポフィンケースを入れているポケットを手で示している。ポフィンか？ 示されるまま取り出すと、コロトックはアブソルに目を向けて。なるほど、アブソルにあげればいいのか。ポフィンを二個取り出すと、皿に乗せて

アブソルから少し離れた所に置いた。その間も警戒していたアブソルだが、ゆっくりと皿に近づいていく。

「バリスツ……！ バツ……、バリ……ス……！」

ポフインに向かつて這いずつて進もうとするヨクバリスをルンパッパとコロトック、そして弱っているグレッグルが三匹がかりで必死に止めている。おいおいホシガリスの頃はそこまでじやなかつただろう。何がお前をここまで食の権化へと駆り立てた。……顔の青さと冷や汗の多さから本気でまずいと判断し、胃腸薬をヨクバリスの口に叩き込んでおいた。

「…………。ウルル…………」

アブソルはためらわずにそつとポフインを口にした。ん、と思う。ガラルのポケモンはポフインを知らないことが多いので、ルンパッパも最初は警戒したのだがアブソルにその様子はない。もしかしてポフインを食べたことがある？

そんな思考をよそにゆっくりとポフインを食べ終わると、アブソルがとても静かで悲しい声を出した。その目が潤んでいるようにも見える。

……もしかしたらこのアブソルはシンオウからこの土地に来て、首の傷が原因かは分からぬけど、ひどい形で捨てられたのかもしれない。それでも人間への情を捨てられず、もう一度と言う目の前の人間のことを見極めたかったのかもしれない。アブソルに

とつて、ポフインは懐かしいものだつたのだろうか。だからあんな声を出したのだろうか。

もしポフインがアブソルの何かを教えてくれたとしたら、それは言語も文化も、そして種族も越えて、料理というものが一つの縁を結んでくれたのではないだろうか。そう思つたらまた涙腺が緩む。大人になると一度涙が出ると止まらなくなるから困る。目をこすつていたら、足元にすり寄る影。アブソルがこちらを見上げている。表情は柔らかく、触つても逃げなかつた。

「バアリイスウ！」

あ、ヨクバリスが元気になつた。元氣ついでにポフインをよこせとジエスチャーで訴えてくる。芸達者になつたな、お前。ちようど良い、みんなでポフインを食べよう。

さあ、ついに悪タイプを手に入れた。待つていろラテラルタウン。リベンジマツチだ。

決戦、オニオン！

「ま、また……、いら、したんですね……」

ラテラルシティジム、スタジアム。中央で再会した相手はゴーストタイプ使い、オニオンさん。一度負けた相手だ。

「ホシ、ホシガリスは……？」

「大丈夫です。ご心配をおかけしました」

「良かつたあ……。でも、その、ジムチャレンジなので、また、倒しちゃうと思います

……

仮面の奥に、紫色の瞳がぼうつと怪しく灯つた。

「お願い……、デスマス」

オニオンさんのダークボールから飛び出したのは石板の破片から黒い全身が伸びているポケモン。ガラルのデスマスだ。

「行けっ、ルンパッパ！」

オニオンさんが仮面越しに目を揺らす。前回負けた時にオニオンさんは最後のポケモンまで出してきたので手持ちは見てている。デスマス、ミミツキュ、サニゴーン、ゲンガー。ただ、最後のゲンガー以外は知らないポケモンだったので調べたところ、何とかデスマスだけはタイプが分かつたのだ。ガラル地方のデスマスはゴーストと地面。ゆえのルンパッパだ。

「た、対策したんですね……。デスマス、たたりめ」

「ルンパッパ、あまごい！」

ルンパッパが奇妙なステップを踏む周りに紫色の炎がユラユラと現れ、ルンパッパを炙っていく。そこに空からポツポツと雨が降ってきて炎を消した。

「デスマス、かなしばり……」

「ルンパッパ、バブルこうせん……、うつ！ 読まれてる……」

デスマスの目が怪しく輝くと、ルンパッパは一瞬映画のフィルムが止まつた時のように動きを止める。だが問題なくバブルこうせんは放たれ、デスマスはあつけなく吹き飛んで戦闘不能となつた。しかし代償付きの勝利だ。

「これで……、あまごいで威力の上がったバブルこうせんは……、連続で出せませんよ……」

かなしばりの効果は『同じ技を連続で出すことができない』というもの。あまごいコンボを止められてしまつた。そして、前回と同じ流れになつていることに歯噛みする。

今までのジムリーダーと違い、オニオンさんの指示が早い。こちらの行動を予測して先に手を指示してくる。今まではこちらの指示を見てから応対してきたので、考える余裕があつた。しかしオニオンさん相手にその余裕はない。これがワイルドエリア全部解放の対価。『これぐらい勝てるだろ』という無言のプレッシャー。

「（ルンパッパは引っ込めばかなしばりの効果はなくなるけど、続投する！ 次のポケモン、はつきり言つて次のポケモンが訳分からなからこその続投！）

「ごめんねデスマス……。おいきミミツキユ……」

出た、こいつだ。ピカチュウの形をしたずだ袋をかぶつたようなポケモン。ゴースト単体なのかと思つてグレッグルが『ふいうち』したけど効果は普通だつた。何かの複合なのは間違いない。

おまけにこいつ、最初の攻撃を受けたとき、首が変な方に曲がつただけで無傷であるかのような動きのまま戦闘続投したのだ。オニオンさんは『ばけのかわ』とか言つてたけど、特性のことか？

「ミミツキユ、つめとぎ……」

「ルンパッパ、ギガドレイン！ ぐつ、攻撃力と命中率を上げる技……！」

『ばけのかわ』を打ち破る技は……、も、持つてなさそだつたので……』

ルンパッパがギガドレインを放つが、やはりミミツキユのずだ袋がくたびれるだけ。あの特性、一回は攻撃を受けてもほぼ無傷でしのげるのか……？ とにかく次だ！ 撃てるようになつたバブルこうせん……、いや、前回は使わなかつた技だ！

「ミミツキユ、かげうち……。先制で、倒して……」

「耐えて、ルンパッパ！ 耐えてからのおどろかす！」

ミミツキユのかぶつてる袋がわずかにめくれ、下から影でできた手のようなものが目にも止まらぬ早さで飛んで来る。それは先端が銳利にとがつており、つめとぎの効果を雄弁に語つていた。ルンパッパはステップと雨の力でどうにかかわそうとするも、背中を深々と切り裂かれてしまつた。動けなくなつた、そう見えたルンパッパだが。

「——ンンッパア！」

「ミツ……!?」

かつと目を見開いて一喝、ミミツキユは本気で驚いたらしく全身がビクツ！ と震える。効果抜群だつたらしい。その様子に満足したらしくルンパッパはサムズアップする、ばたりと倒れた。

「よくやつたルンパツパ。次だ、グレッグル！」

天気はまだ雨。グレッグルの『かんそそうはだ』で持久戦ができるはず。効果があると分かつたゴースト技はあいにく持っていないけど、粘つて倒す！

「グレッグル……。ふいうちがあつたつけ……。ミミツキユかげうち……。素の早さはこつちが上……」

「分かつてました、そう来るのは！　どくばりだよグレッグル！　あの影に刺してやれ！」

おそらく『ふいうち』を警戒してそれを上回る先制技を出すと踏んで、あらかじめ先制しない技を準備させておいたのだ。初めてオニオンさんの行動を読めて内心ガツツボーズしながら指示を出す。

「グレッ！」

グレッグルはそもそもリベンジに慣れているため耐えるのは得意、かげうちを受け止めそのまま影を掴むと直接どくばりを影に突き刺した。暴れる影がすだ袋の中に収納されるが、毒が入ったのかフラフラしている。と、そこに涼しげな鈴の音が響いた。

「か、かいがらの……、すず……」

攻撃が当たつたときに少し体力を回復する道具。ピントレンズをアブソルに取られ

てからグレッグルにはこつちを持たせていた。雨と鈴で二重に回復し、相手には毒を与えて長期戦へ持ち込む。ねちっこいけど仕方ない、勝つための作戦だ！

「ミミツキュかげうち……。今度こそふいうち……してくるから……。ダメージ少なくして……勝ちたいですよね……」

「ぐぬう、グレッグル、ふいうち！」

接近するグレッグルに影の手が迫り、足を掴んで転ばせようとしてくる。掴まれることは回避したものの鋭い爪が足に刺さつた。声を漏らしながらもどうにかミミツキュに近づくと、袋の下部分、つまり本体がいるであろう場所に回し蹴りを叩き込んだ。ミツキュが悲鳴を上げながらオニオンさんの元へ逃げ帰る一方、グレッグルも限界だったのかその場に倒れこんだ。

「(なんて威力だ、つめとぎで上昇した攻撃力……！　まさかグレッグルが二回の攻撃でやられるとは……。毒が入らなかつたら倒しきれなかつたかもしない)」

「ごめんねミミツキュ……。おいき、サニゴーン」

次に出てきたのは半透明のポケモン。地面に何かが割れた破片のようなものがあり、そこから半透明の風船のようなものが伸びている。中に悲しい顔をした本体のようなもののが入っているその姿はユニランを思わせるが、底知れぬ暗さがゴーストタイプだと雄弁に語っている。

「ここが出番だ！ アブソル！」

「アブ、ソル……。捕まえて……。カンムリ雪原まで……？ マ、マフラーしてると

……」

「死ぬかと思いました」

「死んだら……『ここ』においで……」

やめて本当にやめて。全身鳥肌が立つた。

「それじやあ……。サニゴーン、のろい……」

「アブソル、み……、のろい！？ まずい、つじぎり！」

のろい。『鈍い』と『呪い』。ゴースト以外が使えば鈍化するが攻撃などが上がる技。しかしゴーストが使えば己の体力を対価に相手を呪う技。呪われれば問答無用でこちらも体力を削られる。

「お前の方が早い！ 急所を狙え！」

「サニゴーンの靈体は……、触れば……、動きを鈍くしますよ……。で、できますか……？」

前回はコロトツクを先鋒、ルンパッパ、グレツグルと続き、ここでホシガリスを除去全滅した。互いに最後の一匹を出してホシガリスが戦意喪失、負けとなつたのだ。今回はまだアブソル、コロトツク、ヨクバリスが残っている。ここでアブソルに落ちても

らつては前回の二の舞だ。呪われる前に倒す！

「ウォルル！」

ピントレンズを付けたアブソルは前足の爪で恐れることなくサニゴーンの靈体を突き刺し、その向こうの本体を切り裂いていた。ゴーストタイプに悪技は効果抜群、サニゴーンは悲鳴を上げてぐずぐずに崩れ……いや、違う。崩れた靈体がアブソルにまとわりついている！

「サニゴーンの特性『くだけるよろい』……。もう戦えませんけど、冥土の土産に……、呪つておきますね……」

本来のくだけるよろいは一撃もらうと速度が大幅に上がるものが、速度を上げる代わりに呪いを込めてアブソルにまとわせたらしい。アブソルの体力がなにもしてないのにみるみる減っていく。

「まずい、アブソル戻れ！ コロトツク頼む！」

「寒い……。寒いよ……。一人になるのは嫌だよ……」

一度交代すればのろいの効果は消える。アブソルの代わりに出たコロトツクはこの後のことが分かっているのか、腹を一度鳴らして気合いを入れる。そう。ついに出てくるのだ、因縁の相手が。

「みんな飲み込んで……。みんな一つになっちゃえ……。ゲンガー、ゲンガー……。キヨダイマックス、全て飲み込んでおしまい……」

大きくなつたボールに振り回されるように後方に投げるが、一見ボールから何も出でこない。しかしこートから黒い影が伸び上るとゲンガーの巨大な口となり、ゲラゲラという笑い声をスタジアム中に響かせながらその姿を現した。

「ゲンガー、キヨダイゲンエイ……！ 逃がさない、誰も逃がさない……！」

「ごめん、コロトック！ アブソルにいいきずぐすり！」

コロトックが一瞬振り返り、気にしないでと首を横に振ったように見えた。でもそんな素振りは見間違ひだつたかのように羽を広げると、あつという間にゲンガーへ向かつて突つ込んでいく。その間にボールからアブソルを出すと道具を使つて体力を回復させた。

「ゲゲゲー！」

ゲンガーの勝ち誇つた笑いが響く。ゲンガーの周囲に靈体の椅子や机が出現し、コロトックにぶつかつてコートに叩き落とす。墜落したコロトックが地面から沸き上がつた黒い怨念に飲み込まれていく。その姿から目をそらす。勝つための犠牲。コロトックにしか頼めない、辛い役回りだ。

「ごめんよコロトック、ありがとう……。敵討ちだアブソル！ 粘れ！ つじ……」

「つじぎりですよね……。ゲンガー、ダイアシットド……」

読まれていようがもうここまでくれば関係ない。ゲンガーは大きく口を開けて息を吸い込んでいく。アブソルは飛び上がってゲンガーの額を切り裂く。ゲンガーは一瞬ひるむが、アブソルめがけて毒液を吹き出した。紫色の液体ごと吹き飛ばされたアブソル、コートに叩きつけられた瞬間に受け身をとつて立ち上がったが、ギャンツと苦悶の声を上げる。まさか。

「ゲンガーだつて……。どくタイプとの複合なんです……。本来はダイアシットドに……毒効果はないんですけど……、呪いで免疫が……減りましたね……」

グレッグルがやつたことの意趣返しを受けたか。アブソルがちらつとこちらを見てくる。その目はまだやらせろ、と告げていた。

「ゲンガー、ダイウオール……」

「アブソル、つじぎり……!」

ダイウオール？ まだ見たことのない技だ。どんな技だ。アブソルがゲンガーに迫ると、突然見えない壁が出現した。アブソルはそれにぶつかって攻撃が中断される。絶対防御の技か。

「まもる！ いや、範囲が広い、ワイドガード……!」

「それよりも広いです……。ダ、ダイマックス技も……防げますから……。連発すると、は、外れやすいけど……」

アブソルが後方に下がると、ゲンガーが元の大きさに戻る。前回はここまで来られなかつた。ここからはどうなるか分からない。ゲンガーが本来持っている技を何も知らないのだから。

「ゲンガー……、ベノムショツク……」

「アブソル、みきり！ つと、あぶないっ！」

ゲンガーがまたしても口から毒液を吹き付けるが、アブソルはあらかじめ分かつていたかのようにかわしてみせる。しかし、ベノムショツク。相手が毒状態の時に威力が倍になる技。そんなピンポイントな技を覚えているなんて、さすがはジムリーダー。無駄のない技構成だ。

「(どうする、アブソルは毒で少しづつダメージが蓄積する。でもベノムショツクを受けたら間違なく落ちる。だからってみきりは連発すると外れやすくなる。こつちは先制技にでんこうせつかがあるけど、あれはノーマル技だからゴーストタイプのゲンガ一にはそもそも当たらない!)」

「ぐうう、アブソル、みきり！」

「やつぱり……。ゲンガー、しつぺがえし……」

「しつ、しつペがえしも覚えてるの!?」

ゲンガードが黒い光のビームを放つが、今度もアブソルはかわした。しかしギリギリの回避。次はかわせるか分からぬというのが本音だ。それにしてもしつペがえし。相手が先に行動していた場合、ダメージが二倍になる技。これは追い込まれた。

こつちのみきりが失敗、相手がベノムショックの場合、毒でダメージ二倍のためアブソルが負ける。

こつちのみきりが失敗、相手がしつペがえしの場合、先に行動してダメージ二倍のため、アブソルが負ける。

こつちがつじぎりで相手がベノムショックの場合、向こうの方がそもそも早いのでアブソルが負ける。

こつちがつじぎりで相手がしつペがえしの時のみ、耐えてこちらの攻撃が通る。

つまり、相手はベノムショックを選べば間違いなく勝つのだ。アブソルに逆転の目はない。だから入れ替えを考える。……ここまで間違いなく読んでくる。そして最後の一匹もオニオンさんは知っている。でも、一つだけオニオンさんが知らないことがある。そこに、賭ける！

「やつぱり入れ替え……。じゃあホシガリスですね……。ゲンガード、ベノムショック

……」

「アブソル戻れ！ そしてホシガリスじゃない！ —— 出でこい、ヨクバリス！」

「えつ……!?」

初めてオニオンが動じた。ボールから出てきたのはホシガリスではなくヨクバリス。ずしつと着地しゲンガーを見て、一瞬後ずさりそうになる。でも踏みどまり、まだ尻尾に隠してあつたポフインを食べて平常心を取り戻した。食べ終わつたところにベノムショツクが吹き付けられたが、ヨクバリスは嫌そうな顔をしつつもまだ余裕がありそうだ。

「進化したんだ……。おめでとう、乗り越えたんですね……」

「ありがとうございます」

「じゃあ、ゲンガー……、改めて『こつち』の世界に誘つてあげて……。もう一回ベノムショツク……」

「ヨクバリス、進め！ そして噛みつけ！」

ヨクバリスが勇ましく駆け出す。ゲンガーのベノムショツクを全身で浴びるが、尻尾からオボンの実を食べ、特性ほおぶくろでさらに回復する。そしてにつくきゲンガーをギロリとにらみつけると、尻尾にがぶりと噛みついた。

「ゲンッ!?」

「ヴァリスー！」

ヨクバリスの瞳にメラメラと怒りの炎が燃え上がっている。ゲンガーはとにかくもがいてもがいて大暴れだ。ゲンガーの特性『のろわれボディ』によつてかなしぶりが起きたようだが、とにかくかみつきをやめないために特性が発動できない状態のようだ。

「ゲツ……、ゲン！」

「バリツ、ス……！」

ゲンガーが尻尾を激しく振つて、ヨクバリスを引きはがす。二度のベノムショックで実は限界が近かつたヨクバリス、さすがに抵抗できなかつた。両者はあはあと荒い息をついている。ちら、とヨクバリスがこつちを見た。えついいの？ と問うがヨクバリスの意思是硬い。うなずくと、ヨクバリスはニヤッと笑つて前を向いた。

「ゲンガー、しつペがえし……！」 ヨクバリスを回復してくるから……、直後を狙つて……！」

「ヨクバリス……、ごめん！」

「えつ、まさか……!?」

いいつてことよ、と言いたげな大きな背中を見せ、ヨクバリスは黒いビームに貫かれた。その間にもう一度アブソルを出し、いいきずぐすりを与える。ずずん、とコートを揺らしてヨクバリスが倒れると、仮面越しに驚くオニオンさんが見えた。

「て、てつきり……、ヨクバリスに、勝たせると思つたのに……」

「そのつもりでしたよ。……ヨクバリスが自分を犠牲にしろと言うまでは。さあこちらも最後のアブソルです。毒は残つてますけど、ほぼ全快。——勝負です」互いに手は分かつていて。あとは、当たるかどうかだけだ。

「……ゲンガ一、ベノムショツク！」

「アブソル、つじぎり！」

アブソルが駆け、ゲンガ一が毒液を吐く。当たる、と思つた瞬間アブソルがギリギリで身をよじつて回避した。みきりも合わせて何度も何度も見たからこそ、土壇場で底力を見せたのだ。驚愕するゲンガ一。アブソルはすり抜けるようにゲンガ一に肉薄し、その尻尾を、ヨクバリスに噛まれて傷の残つていた尻尾を切り裂いた。急所への一撃だった。

「ああっ、ゲンガ一……！」

それでもまだあがこうと、アブソルを睨み付ける。アブソルも毒が苦しいのか体勢を崩している。手を伸ばすも、ガクンと力が抜け、ゲンガ一はどうどうコートに倒れこんだ。勝つた。勝つたのだ。

「ホシガ一……、進化しちゃつたけど、ホシガリスポーズウ！」

疲れきつた体だけど、最後の気力でホシガリスポーズを決める。アブソルもちよつとだけ後ろ足で立つと、前足の肉球を頬に当ててポーズをしてくれた。お前もできるの!?

いつ教わったの!?

「負けましたあ……。か、勝てると思ったんですけど……。ヨクバリスが時間を作つたの、よ、予想外でした……」

手を差しのべてくる。握手する後ろに、拍手をするレイジさんが見えた。

「がんばってくださいね……。さ、最後まで行けるように……、応援しますから……」
オニオンさんの言葉に笑顔を返せたと信じたい。最後まで行くことは、もう無理なのだ。

ここまでかかった時間と今回の戦闘の結果から、どんなにあがいても最後のジムまでたどり着けないことは、誰よりも自分が一番分かっているのだから。

本日は、休憩日和

青い空、白い雲。絵に描いたような晴天。漂うのはカレーの匂い。ワイルドエリアのうららか草原は本日も平和である。だが、ここにある一つのテントでは主とポケモンがそろつてごくり、と睡を飲み込んでいた。

紅色の雲をまとつた、巨大なカレー。

キヨダイパウダーで作つたカレーを見て即断する。これは、店に出すもんじやない。

ラテラルジムクリアの翌日。再びエンジンシティに戻り、そこからワイルドエリアでキャンプをしていた。今日は一日ここでカレーの研究をして過ごす予定だ。ジムチャレンジの最中ではあるが、ポケモン達を休ませる必要があると判断したからだ。

オニオンさんとのバトル。全員が全力を出して、からうじて掴んだ勝利だつた。もう一回同じメンバーで戦つたら間違いなく負ける。オニオンさんの手持ちを知つてて、アブソルがいたから勝てた戦いだつた。

『ゴーストの弱点、あくタイプばかり捕まえて行けば楽に勝てたのに』

本来はそうすべきなのは分かっている。その時の手持ちで勝てないならメンバーを整えて挑み、勝つ。今回はあく、次のジムはまたポケモンを調整して挑む。それなら勝てるが、それは理想論だ。そこにかかる費用と捕まえたポケモンをすぐに懐かせる才覚とタイプや特性が分かる知識があれば、できるだろう。

自分はそこまでのトレーナーではないし、そこまでになるには時間がなさすぎる。

第一に、道中もトレーナーに負けたりバイトをしたり、オニオンさんのジムチャレンジでもリトライしたりと順調とは言えなかつた。このペースだと次のジムが一発で勝てても次の次までしかいけない。ジム攻略の準備に時間がかかるなら次が限界だ。

第二に手持ち。確実に勝ちたいなら、ヨクバリスとコロトックを外すべきだろう。

もつと戦闘に特化したポケモンを探して捕まえる必要がある。それこそシロナさんのガブリアスやダンデさんのリザードンのように。じゃあ入れ替えるヨクバリスとコロツクは逃がすのか？ それは嫌だ、でも何匹も育てる金も環境もない。それを打破する方法も、またない。

「キリリ？」

カレーを食べる手が止まっていたのか、コロトツクが声をかけてきた。見ればみんな心配している。キョダイマックスカレーを食べるのに躊躇してると思われたのだろうか。確かに躊躇しても仕方がない威圧感ではある。ごめんね、考え方してただけと告げると安心したのか食事に戻つていった。……やっぱり今のメンバーを替えたり逃がしたりはしたくない。この先お店を開く時にも一緒にいてほしい。

だからとダンデさんに会わずに帰るつもりはないし、この先のジムチャレンジを諦めるつもりもない。でも、今まで次のジムに勝てる可能性は限りなく低い。オニオンさんとのバトルは、それを痛感させられた一戦だった。だつたら何ができる。同じ負けるにしても、やるだけのことをやつてからじやないと踏ん切りがつかない。

『ポケモンセンターに技を思い出させてくれるスタッフさんがいるよ』

前にどこかの町で聞いたことは引っ掛かっていた。ポケモンの思い出し技。ポケモンは戦いの中で複数の技を習得していく。でも、十や二十の技の中から一つを指示され

てとつさに使おうとするとき、なかなか思い出せない場合があることが研究で明らかになつていて。基本的に四つまで、四つまでならスマーズに行使できるのだ。その普段は覚えさせてない技を思い出させるのが思い出し屋である。

それと、わざマシンとわざレコード。前にここでゴーストとあくタイプを探して戦つたりした時に、少しだけ手に入れた分がある。これらを駆使してある程度対策された技に変える必要がある。後はフェアアリータイプの調査。シンオウにはフェアアリータイプはほとんどいないので全く知らない。どこかで知識を得ないと有効打すら分からぬ。『トップトレーナー』というのは絶え間ない努力、神に愛された才能、そして天に祝福された運の三つを持ち合わせた人間なんだ』

父の言葉がよみがえる。今ならより分かる、それがどれだけ恵まれたことか。それを持ち得ない自分でもやるだけやつて、それからシンオウに帰ろう。何かしら動かないと、ダンデさんに会うこともきっとできないから。

よし、気合い入れよう。キヨダイマックスカレーを一口。うーん、インパクトと食べたことのない味はポイント高いけど、それだけ。やつぱり店には出さない方向で。

一日キャンプで過ごし、夜はスポミーインでゆっくり静養した翌日。本屋とCD

ショッピングの併設された大型店舗で目当てのものを見つけた。ガラルカレーの歴史の本とレシピ本。あと、かつてフェアリージムリーダーだったポプラさんの名バトル集DV D。

「お買い上げ、ありがとうございました」

ずつしりと重たくなった荷物に満足する。これは今必要なものと、未来に必要なもの。ジムチャレンジが終わつたからつて全てが終わる訳じやない。そのためにこのガラルでできることを、後悔しないためにやれるだけやっておきたい。……ガラルに未練を残さないために。

「キリリリ」

いつの間にかボールから出ていたコロトックが一度腹を鳴らす。それは勇壮だけど、どことなく悲しいメロディ。さすが相棒、分かっている。それは激励だ。『後悔だけはするな、きっとダンデさんに会うために』。すつからかんになつた財布を握り、コロトックとハイタツチ。その足である場所に向かつた。

「これに決める口ト?」

ポケモンセンターにあるパソコンと融合した口トム、通称口トミ。そこにアクセスするとポケモンの力を借りて仕事をしたい企業からの求人ならぬ求ポケ情報が見られる。それがポケジョブ。ポケモン達も少し成長できるし賃金ももらえると聞いたので、今回

はこれを利用することにしたのだ。

「選んではるのはターフ農場の収穫手伝いだ口ト。むしタイプを募集してて七匹まで一緒に手伝いに行ける口ト。じやあ、行つてくる口ト！」

手持ち全部をパソコン転送してもらう。期間は一番長い一日を選んだ。久しぶりに手持ちが一匹もいなくて心細くなるが、そもそも言つてられない。自分は自分でキルクスタウンにある『ステーキハウス おいしんボブ』で日雇いしてもらい、肉の大切さをこんこんと説かねがらバイトした。

「だから、今年は僕の方針に文句を言わない約束でしよう？ 今もジムチャレンジは順調です。だから僕のスタイルに口を出さないでください」

「何言つてるのさ、口を出してるんじやないよ。助言をしてるの。もう少しジムトレーナーにレベル高いポケモンを出させても大丈夫なんだつて。ネズくんが降りてからジムチャレンジ七番目を担当するの、初だろう？ 去年はあたしがやつたし」

「そうですよ、そうですけど現状で問題ないって言つてるんですよ」

本日の昼は一時間だけ貸し切りとのことで、なんとの街のジムリーダーが女性と口論しながら食事してる。岩がどうとか氷がどうとか運営がどうとか。あの女性、何者なんだろう。

翌日ロトミからポケモン達を受け取ると、賃金と共にレトルトカレーをもらつた。気前良いな、ガラルの企業。それともう一つびっくりしたことが起きたけど、それは後で確認しよう。

と、急にスマホが着信を告げた。相手は『防波亭』だ。電話に出ると、急いで来てほしいとのことで飛んでいいってみる。

「ごめん、急遽ヨロイ島に行つてほしいんだ。マスタード道場の女将さんにお弁当30個頼まれてて、運べる人がいないのよ。てことで前払いとチップと君の分のお弁当とカレーに使うしつぽのくんせい。……もちろんヤドンのしつぽだよ。ヨロイ島にはた一つくさんヤドンいるから、君にも損はないんじやないかな？　んじや出前よろしく～！」

……調子いいなこの人！

でもヤドンのしつぽは気になる。前金もたんまりもらつたし、現地の人にもヤドンのしつぽの流通聞いておきたい。ええい仕方ない、いざヨロイ島へ！

お弁当です、ヨロイ島

砂浜に打ち寄せる波。どこまでも広がる空と海。ゆっくりと流れる時間。

空飛ぶタクシーを降りて目的のマスター道場に着く。ガラルヤドンがぬぼーつとたたずんでいるのを横目に、扉を叩く。

「デ・デ・デ・デター！」

突然足元にデイグダが飛び出し尻餅をついてしまった。何でこのデイグダ、髪の毛生えてるの？

「いやー、ありがとねえ。配送できる人が見つからないって言われた時はびっくりしちゃつたけど、急遽『防波亭』の手伝いに来ててくれたんだって？ わざわざヨロイ島ま

で持つてきてくれて、ワシちゃん大感激！」

「ほんとうにもお、助かっただわー！ ほら、セイボリーちゃんとクララちゃんがついにジムチャレンジのジムリーダーに選ばれたじやない？ 二人で一人みたいなもんだけどさ、ウチで修行してた子達がここまで来たと思うと嬉しくって、今日はパーティーしようつて話してたのよ！ 一人はいないけど」

「ミツバちゃん、さすがの目利き！ おいしそうだねこのお弁当！」

「でしょうダーリン！ さあ、もうドリンクは準備できてるから、飲むわよおー！」

空飛ぶタクシーで到着したヨロイ島のマスター道場では、歳の差夫婦が待つていた。お弁当をキツチンまで届けると女将さんは準備に入る。お、と思わずしげしげと眺めてしまったのはステープが煮込まれている鍋。具材に紅色のキノコがあるのは見ないふりをして、その鍋は使い込まれてるがかなりの品だ。どこで買えるのだろう。

「あら、分かる？ その鍋カロスで仕入れたの。テフロンとかは使つてないけど元々の鉄がいいから焦げ付きにくいし、昔扱つてた品の中でもイチオシの一つよ」

扱つてた？

「昔ね、貿易会社の社長やつてたのよ。ダーリンに一目惚れしてやめちゃつたんだけど。

……え？ お店を開きたいの？ —— そうだつ！」

ミツバさんはガシツとこちらの肩を掴む。その細腕のどこにそんな力が、と言いたく

なるくらいの、まるでゴーリキーに掴まれていると錯覚するような怪力だ。そして
に一つこりと笑う。もう泣きそう。

「ここで会つたのも何かの縁だし、後で少しお話しない？　ちょーっとパーティーの間
にワットを集めてくれたら、絶対損させない情報あげちゃうわ！　お店を開く力に
なること間違いなしよ！」

え、それは大丈夫じゃないのでは？　その話聞いたら後から悪徳業者に高額請求され
ない？　……この既視感、ルリナさんとソニアさんに会つた時も感じたやつだ。

「ミツバちゃん気合い入つてるね～。島を回つてワットを集めてくれるど、ミツバちゃんが
助かるのよ。……その格好、ジムチャレンジ途中？　ならむしろ良い話じやないのつ！
ほら、野生のポケモンも出てくるからそれと戦わせれば自分のポケモンも強くなる
し、ジムチャレンジも進みやすくなるなる。ね、ワシちゃんからもお願いつ！」
……無理、断れない。この夫婦、別の意味でできる。

あの後道場の門下生の人が出で来て、

「怖がらせて申し訳ないっス。女将さんは本当に昔はやり手の社長でしたし、師匠もめ

ちやくちや強いポケモントレーナーなだけで、黒づくめの人達に拉致されるようなことはないっス。だから安心してワット集めて欲しいっス』

と言われた。結局集めることは確定なのか。やるけれども腑に落ちない。

ダイマックスの巣を調べてワットを集めながら現地のエリアスタッフにヤドンのしつぽについて聞いてみる。うーん、確かにすぐ生えかわるから生態に問題はないけど、店に出すほどの供給はないな。これも却下で。

などと考えながら島を歩いていると、向こうからシザリガーが走つてくるのが見えた。敵対する気まんなんだ。よし、ちょうど良い。試させてもらうとしよう。

「出番だよ、——ドクロッゲ！」

ボールから出たのはグレッグルを一回り以上大きくし、頭部に角が生えたグレッグルの進化系、ドクロッゲ。ポケジョブで十分な経験値を得たらしく、帰つて来たとたんに進化したのだ。嬉しいサプライズをどこかで試したかつたので、この敵襲をありがたく活用させてもらおう。

「ドクロッゲ、どくづき！」

シザリガーに接近すると、指の中で一本だけ鋭利になつた真ん中の指を硬い殻の隙間に突き刺す。シザリガーはびっくりしてみずでつぼうを撃つてきたが、『かんそーはだ』のドクロッゲには回復にしかならない。

「リベンジ！」

シザリガーを掴んでぼーいと海まで投げた。圧勝である。強くなつたことは素直に嬉しい。ただ、これがどこまで通用するかは別だというのも分かつている。それでも今は進化するまで頑張つたことを讃める。

「グレグレ」

あれ、鳴き声変わらない……？　うちのヨクバリス、あいつなんで「バリス」になつたの……？

ワット集めをしている間に森の奥まで来てしまつたようだ。この島はかなり複雑な地形で、森の奥の方が海辺につながつてゐるかと思えば別の出口からは洞窟に通じている。なかなか地理の把握が難しい。踊るドレディアに手を振りながら進むと、突然空から何かが落ちてきた。

「○？・☆！」

形容しがたい鳴き声で叫ぶのは異様な見た目をしたポケモンだつた。灰色、赤、青の縞模様を羽のような突起の先端に持つ全体的に黄色を基調としたポケモンで、尾羽にあたる突起も同様の色をしている。顔があるべき場所には真っ黒な細長い器官に緑の一

つ目が見えるが、それと同じ目が腹部と思われる円形の部分にも二ついている。ワイルドエリアで見たような気はするが、名前などは知らないポケモンだ。

「ギアー！ ギアー！」

木々に覆われわずかに見える空には、二匹のエアームドが見える。どうやらエアームドに繩張りから追い出されたらしい。幸い森にまで追いかけてくる気はないようだ。しばらく上空を旋回した後、チャレンジロードの方へ飛んでいった。

「▲★■◆……」

謎のポケモンは起き上がりろうとするも、怪我がひどいのか飛び上がることができないようだ。もつとも、怪我してるかもよく分からぬのだが。このままなのもかわいそうなので、いいきずぐすりを使ってあげた。

「…………」

謎ポケモンはふわっと浮かび上がる。これはエスペータイプの動きだ。そう考えていると、ゆるゆると羽のような突起物を動かしながらこちらをじいっと見つめてくる。しばらくするとスースと森の奥へ飛び去つて行つた。今度はエアームドに見つからないことを願うばかりだ。

島の様々な場所を巡るうちに夕方近くになり、道場に戻る。パーティはもう終わつていて、今日はお開きということで門下生達は部屋に戻っていた。ミツバさんにワットを渡すと感謝され、その場で新しい設備が買えるとかで電話を始めている。

「ふう、おまたせ！　さて、ガラルカレーとポフインを売るお店なのよね、今考てるのは。ドリンクは……、なるほど、モーモーミルクを使つたラッキーか。それはいいわね、シンオウはモーモーミルクあるから。水もテンガンザンから良質なものが出てるだろうし……」

さつきまでの『女将さん』といつた柔らかい態度から『キヤリアウーマン』の凜とした姿勢に代わる。メモに書き付けながらタブレットを操作する姿は彼女の才覚がまだ衰えていないことを示していた。

「いいわね、久々にこういうのやると楽しい～！　……ああ、いいのよ、あたしがやりたいから無理矢理あなたを捕まえたんだから気にしないで。んく、どういうコンセプトがいいかしら！　少人数経営だからコストは抑えないとでしょ、だけどメニューに幅は欲しいわよね。となると……」

ミツバさんが楽しそうに仕事する後ろではお子さんだろうか、男の子がパソコンを作して何かをやっているようだ。血は争えないということらしい。一方のマスターさんはテレビゲームをやっている。本当に強いポケモントレーナーなのだろうか。好

好爺にしか見えない。

「あ、今日は泊まつてつて！ ジムチャレンジの途中なんだつけ？ ダーリン、アドバイスだけでもしてあげてちょうどいい。あたし今からちよつと集中するわ」

「あらら、ああなつちやうとミツバさんはテコでも動かなくなつちやうからね。ジムチャレンジ、セイボリーちゃんかクララちゃんとはバトルしたのん？ ……セイボリーちゃんを選んだのね！ どうだつた？」

バトルの様子を話すと、マスタードは目を細めてうんうんと聞き入つてゐる。正に孫の活躍を聞いて喜ぶおじいちゃんだ。

「そうかそうか、しつかりやれてるんだねえ。ワシちゃん嬉しいよ。話してくれてありがとねえ。じゃあチミは次どこに行くの？」

アラベスクタウンです、と答えた時、本当に一瞬だけ瞳がぎらつと輝いた……気がした。きっと氣のせいだろう、うん。

「フェアリーだね、あそこは。でもチミのふるさとシンオウはフェアリーあんまりいなによね？ ……やつぱり。ワシちゃんも手持ちにいたことはないんだけどねえ」

あまり助けちやうのも良くないけど、これだけならいいか、と首をひねつて呟いていたマスター。一回しか言わないと前置きすると。

「フェアリータイプはあく、かくどう、ドラゴンに効果抜群。逆にはがねとどくに弱い。

ほのおタイプにはフェアリーの攻撃が通りづらく、逆にむしタイプの攻撃はフェアリーに効果が薄い。……後は自力で頑張るんだよ』

大慌てで今情報をメモにとる。ばつ、と顔を上げるとマスターDはすでにゲームに戻っていた。ミツバもまだまだ集中している。そつとお借りした部屋に下がる。これはまずいことになつた。

フェアリーに効果を出せるのが、どくとはがね。

手持ちで条件を満たすドクロツグも、かくとうとの複合なので大きなダメージを受けてしまう。また、あくは向かないということはアブソルは出しづらく、コロトックもむしなのでダメージが通りにくい。ルンパッパとヨクバリスは相性の上で有利も不利もない。前回のオニオンさんとのバトルをかえりみれば、はつきり言つて勝ち目はないだろう。

新しく六匹目のポケモンを捕まえる？

ポケモンは餌がなくても生きていける訳ではない。人がパートナーにするなら育成環境を整える義務が生じる。今までコロトックとグレッグルだけだつた。でも今はグレッグルもドクロツグに進化し、さらにヨクバリス、ルンパッパ、アブソルと増えている。すでにポケフード代がかなり圧迫してきているのに、もう一匹？

その日は答えが出ないまま、疲れぬ夜を過ごすのであつた。

ちよつと待つてよ、ハンサムさん

「そこまでだ！ やつと見つけたぞ！ 逮捕する！」

拝啓お父さん、お母さん。生まれて始めて手錠をつけられました。もうシンオウに帰れないかもしません。

翌朝。泊めてもらつたお礼を言うと、ミツバさんがファイルに綴られた分厚い資料を渡してくれた。中を見ると店を開く初期費用の概算、各地の個人経営店の店舗例、カラーに対する客層の調査結果、原材料の仕入先候補などがざらざらと綴られていた。一夜で作つたとは思えない分量に唖然とする。

「いくつかは少し古いデータを使つてるわ。すでに調べてあつたヤツを流用したりね。それでも参考になるわよ。ただ、これで終わりにしちゃダメ。情報は生き物なの。自分

でその先を調査していかないと店を維持することはできないからね』

「昨日はセイボリーちゃんの話を聞かせてくれてありがとね。ワシちゃんが直接行ければいいんだけど、そもそもいかないのよ。ほら、ガラルスタートーナメントの時かなり長い間ここを空けたから、またつてのは、ねえ?」

ねえと言われても。とはさすがに言わずに曖昧にうなずいておく。

「そうそう、アレよ、アレ」

いざ駅へ向かおうと後ろを向いたら、その背中に声が降ってきた。

「——普段できないことが本番でできるということは絶対にない。逆に今まで得たものは必ず戦いに活きる。その全てをぶつけきつて戦いを終えることを、有終の美を迎えたと言うのだ」

えつ、と振り返るがマスタード夫婦は道場に入るところだつた。都合の良い幻聴だつたのだろうか。首をかしげながらヨロイ島に唯一ある駅へ向かうと、待合所に一人の男性が座っていた。トレーンチコートを着ているその人はこちらを確認したとたん、走りよってきて手錠をかけ、冒頭の発言をしたのである。

「さあ、大人しく遺跡から盗んだ品を出せ! もう調べはついているんだ!」

何のことだ。神に誓つて悪事など働いたことはない。人にとがめられるようなことなんて、子どもの時にお母さんが作つていたケーキをつまみ食いしたことぐらいしかな

い。遊んでて隣の家のガラス割った時もきちんと謝った。冤罪だ！

「ん？ あれ、シンボラーがいないな……。まさか、お前は盗掘団じやないのか!?」

逆に何を決め手にして人を逮捕したのか。

「いや、ガラルの人間じゃない奴を狙つて……」

それだけか！ ひどい！

「申し訳ない！ 私はハンサム、国際警察だ。この度イツシユ地方のリゾートデザートから新しい遺跡が発掘されてね。そこの貴重な出土品が先日盗まれたんだ。ガラルのジムチャレンジにかこつけて盗品売買が行われることまでは掴み、盗掘団の部下達は捕まえたけどリーダーと品物がまだ見つからないんだよ」
手錠を外してもらひながら説明される。

「犯人はガラルの人間じゃないことは分かつて、近くに必ず野生のシンボラーがいるはずなんだ。シンボラーはその遺跡を守つてたシンボラーのうちの一匹らしいんだけど、遠路はるばるこのガラルまで飛んで追いかけて来てね。このヨロイ島に行つたことは分かつてるんだけど、そこから行方が判らなくて……」

シンボラー。知らないポケモンだ。昨日は島中を歩いていたからもしかしたら見ているかもしれない。特徴を聞いてみた。

「一度見たら忘れないよ。黄色っぽい体に生き物らしさを感じないフォルム。黒い顔に

縁の目が一つ、腹には二つ！ 真似できないような鳴き声なんだ

……そいつ知ってる。

「ええっ!? 昨日助けた!? ……エアームドに襲われて森に避難してたのか。ありがとう、貴重な情報だ！ シンボラーはどうちに飛んだ!? ……なるほどあつちか！ ちょっと失礼。……こちら0836、シンボラーを目撃した民間人を発見、チャレンジロード方面を固めてくれ！」

無線機のようなもので連絡をとっているらしく、何やら早口で会話している。しばらくすると「よしつ！」とガツツポーズを決めた。

「ありがとう！ 見つかったよ！ チャレンジロード沖にドローンロトムを飛ばしたら見つけた！ 見つけてしまえばもうこっちのものだ。一時間もすれば逮捕間違いないな。君には改めて謝礼をしたいから少し待つてくれるかな」

しばらく言われるままに待っていたのだが、このハンサムさん、なんと昔の手持ちがグレッグルだったとのことでドクロッグを出してあげたら大喜びしてくれた。グレックルトークに花を咲かせていると沖からボートがやってきた。仲間のボートらしい。そして確かに昨日見たポケモンが船の上を飛んでいる。

「あれがシンボラーだよ。あいつがずっと追いかけてくれたおかげで捕まえることがで
きたようなものだ。あの盗掘団、今までもあちこちで盗んでたから締め上げれば違法バ
イヤーとかまで一斉検挙できるかもしね。本当に、協力感謝する！」

ボートから女性捜査官が降りてきて、例の出土品らしい物をハンサムさんに見せてい
る。間違いないらしくうなずくハンサムさんの周りをシンボラーがぐるぐる旋回して
いる。本当にあれを取り返すために、イツシユからガラルまで飛んできたのか。時にポ
ケモンの行動力には驚かされる。

「連絡先を教えてくれるかい？ シンオウのノモセ警察署に話を通しておくから、そこ
から謝礼金を受け取ってくれ。今は……、これくらいしか渡せるものはないな」
すごいきずぐすりをもらつた。地味に嬉しい。

「よし、シンボラー、お前もお手柄だぞ。一緒にイツシユに帰ろう。これは私が責任を
もつてリゾートデザートの遺跡に戻すからな。……ん？ どうした？」

シンボラーはハンサムさんの側を離れると、こつちに来た。そのまま自分の頭の周り
を高速旋回している。本当にどうしたシンボラー。こつちじやないぞ、ハンサムさんは
あつちだ。こつちにいてもアラベスクタウンに行くだけ。しかもその後の行き先はシ
ンオウで、イツシユに行く予定はない。あ、目が回りそう。

「うーん、これはシンボラーは盗掘品を取り返すという目的を果たしたから、遺跡に戻る

必要はなくなつたつてことかな。君さえ良ければ連れてつてあげてもいいと思うよ。
もちろん無理なら私がイツシユに連れていく。どうする？」

どうする、と言われても。はがねかどくのポケモンを探すつもりだつたのだが。この
ポケモンはどんななのだろうか。

「シンボラーはエスパーとひこう。そらをとぶを覚えるから移動は楽になるな。……は
がねかどく？ 確かラスター・カノンを覚えるんじやなかつたかな？ あとはがねのつ
ばさ。他のエスパー技はだいたい行けると思うけど」

はがね技覚えるのか！ それはありがたい。ひこうとエスパーもフェアリーとは問
題ない。それに空が飛べるポケモンはシンオウでは重宝する。あそこはここみみたいに
空飛ぶタクシーなどないのだ。店を開いた後も間違ひなく飛べるポケモンは戦力にな
る。

「どうやら問題ないみたいだね。それじゃあどうも、お元気で！」

ハンサムさんはボートで他の仲間と共に去つて行つた。シンボラーに改めて聞いて
みる。フェアリージムのために力を貸してほしい。終わつた後も、シンオウで店を開く
から一緒にいてほしい。

「□☆○▽◇」

やつぱり何を言つてるかは分からぬけれど、ボールには大人しく入つてくれた。つい

に六四。嬉しくなつて、帰る前に顔合わせもかねてカレーを食べようとテントを出す。今日のカレーはレトルトめんを使つたしぶ口インスタントめんカレーだ！ みんなの前に皿を並べる。ヨクバリスが真っ先にカップを持ち上げて喉に流し込み始めた横で、シンボラーはカレーをじーっと見ると。

カレーが、カップの中から消えた。

え？ とまばたきするが、夢じやない。カレーなど入つてなかつたとばかりに中身だけがぱつと消えたのだ。汚れ一つ残さずに。シンボラーは体のどこかを動かした様子はない。高速で食べたわけでもない。ただ、中身がなくなつているのだ。

「……ン・パ？」

ルンパツパはシンボラーを二度見した後、「ナイス手品！」とサムズアップをすると何事もなかつたかのようにまた食べ始めた。コロトックは「また新しいタイプの癖の強い新入りか」と言わんばかりの落ち着きでシンボラーを一瞥すると、気にする様子もなく食事を再開する。

「バリス、バッ……！ バッ……バ……」

ヨクバリスは喉に詰まらせてかすれた声を上げていたが、ルンパツパがバブルこうせ

んを口めがけて放つたため九死に一生を得たようだ。シンボラーの方を見る余裕がなかつたからか、気にした様子もなくルンパッパと二人でハイタツチしてゐる。

「…………!?」

アブソルだけがシンボラーの謎な食べ方に目を白黒させ主人とシンボラーの間を何度も何度も視線を往復させていたが、ドクロッグが「諦めろ」と言わんばかりに優しく肩を叩いて首を横に振つた。おい待てコロトックとドクロッグ、そんな顔をするんじやない。シンボラーの食べ方（？）は主の指示じやないぞ。

こうしてヨロイ島で最後のポケモンをゲットし、本島に帰還した。ジムチャレンジ終了まで一週間ちょっと。もう少し準備したら、いよいよ挑む。勝つても負けても後悔しないよう、全てをぶつける！

決戦、ビート！ 前編

『久しぶりだなあ。ジムチャレンジ、どこまでいったよ？』

アラベスクタウンジムに挑む前日。電話の相手はシンオウのノモセジムリーダー、マキシ。

『四つ！ やつたなあ！ 俺も推薦の依頼を出したのが誇らしくなるぜ。……で、本題があつて電話したんだろ？ なんだ、言つてみな』

アラベスクタウンジムのチャレンジは、クイズに答えて正解の道を選びつつ、ジムトレーナーとの勝負の最中もクイズが差し込まれるという何とも言いづらいものだつた。

『問題！ ジムリーダーのビートが今朝飲んだ紅茶の銘柄は？』

……誰が分かると言うんだ。

おかげで防御力がめちゃくちや下がつてルンパッパがワンパンされた時は肝が冷えた。何とか勝ったけど。そして今スタジアムに入る前の通路で手持ち全員を出して最終確認をしている。

シンボラー。最後に加わったポケモン。はがね技のラスタークノンはわざレコードで覚えさせた。

アブソル。今回は向いてないバトルではあるが、だからって出さないということはできない。技も少し調整した。

ルンパッパ。こいつも少し調整はしてある。とはいって、元々のポテンシャルはトップなので頼ることになる。

ヨクバリス。やることは変わらない。木の実はイアの実に変え、さらに秘策を一つ仕込んでみた。

ドクロツグ。唯一フェアリーに効果抜群のタイプであり、同時に弱点もある。相手を見るしかない。鍵を握るだろう。

コロトック。精神的支えだが、戦闘では今回も難しい役どころ。それでも久しぶりに技を見直した。

わざマシン、わざレコード、思い出し技。持ち物も特性も再度確認した。ポプラさんの名勝負DVDをホテルで何度も見て少しはフェアリータイプを研究してみた。ビー

トさんははなかつたから仕方ない。

全員の回復もすんでる、そしてこれが最後のジムチャレンジになる可能性が高いことも伝えてある。もうやり残したことはない。

『チャレンジャー、ジムリーダー、入場してください』

さあ、ガラル最後の戦いを始めよう。

「ガラルの人ではないですね。遠くからわざわざご苦労様です。今日ここを受けるということは到底ファイナルリーグには間に合わないということは分かつてますね？」

ビートという人は顔こそ整っているものの、めちゃくちやとげのある若者だった。そんな嫌われるようなことをしただろうか。

「分かつてます。分かつててここに挑みに来ました」

「そうですか。投げやりな試合だけはやめてくださいね。僕はそういうの大嫌いなので

互いに距離を取る。ボールを構えた。

「いきなさい、クチート！」

クチート！ ポプラさんも使つていたポケモンだ。はがね技も使つていたからおそらくはがねとフェアリーの複合。となると出すポケモンは。

「いけっ！ ルンパッパ！」

現れたルンパッパにクチートが後頭部の口から牙を見せて威嚇する。特性『いかく』だ。攻撃力が下がる。それでもはがねにとつて、水は数少ない等倍以上のダメージを与えられるタイプだ。初戦で出したくはなかつたが仕方ない、一応クチートが来る可能性も考えて技も――

「クチート、地面技に気をつけてください。おそらく対策として覚えていてます。当たりさえしなければ驚異は少ない」

ヒュツ、と喉が鳴った。嘘だ。何でここまで一瞬で分かるの。確かにルンパッパには今回『マツドショット』を覚えさせていたのだ。冷静に考えれば分かるかもしれない。ルンパッパは草と水の複合だから、フェアリー対策をするならタイプ不一致技を何かしら用意するだろう。だけどこつちだつてクチートが来ると分かつていた訳じやない、念のためで仕込んだ技なのだ。なのにどうして確信を持つて言える。

「うつ……、ルンパッパ、あまごい！」

「当然そうきますよね。クチート用ウエポンを警戒されれば次の手でくる。ルンパッパなら当然あまごい。雨で特性を発動させるのは大事ですから。クチート、じゃれつく。」

多少命中率が低いこの技ですが、あまごいして避けにくいルンパッパになら当たります」

「まだ。また完全に読まれているし、相手の技も正にこちらの弱点を突くものがきている。どうしてだ。」

ルンパッパがステップを踏んで雨を呼ぶが、たたつと接近してきたクチートが体を密着させてぐりぐりと押し付けてくる。地面に転がされるも、どうにか雨を呼ぶことができた。

「地面に触れたなら……！」 ルンパッパ、マツドショット！」

「クチート、地面にアイアンヘッドで飛び上がりなさい。落下しつつかみくだく」

へ、と思うのもつかの間、クチートはその巨大な口に鉄をまとわせると地面をぶつたき、反動で飛び上がる。その下をルンパッパが起こした隆起する地面が通り抜けていく。落ちながら大きな口を開け、ルンパッパの頭にかじりついた。

「る、ルンパッパ！」

「噛みつき続けなさい。もし振り落とされたなら地面を転がつて足元にじやれつく。雨で上がつてる機動力を削ぎますよ」

そんな戦い方あるのか。そんな指示の出し方ができるのか。何手先を見て指示を出しているんだ。ウチのトップ、ルンパッパが手も足も出ないのか。

「なら、なら、えーと、いつそ掴め！ 扱んでバブルこうせん！」
「アイアンヘッドで離脱」

手を伸ばす瞬間に噛んでいた口が離れ、ルンパッパをつつく要領で距離を取る。頭を押さえながらもバブルこうせんを放つが、クチートはたくみにかわしていく。

「（こ）ここまでクチート無傷、ルンパッパはもう半分以上ダメージ……。どうして、どうしてこんなに読まれちやうの……？」落ち着け、相手のペースに呑まれたらもう何もできない！ よく見てよく考えて、どうせ読まれるなら読めたままでも戦うしかない！」

せめて一回はマツドショットをクチートに叩きつけないと、クチートに全滅させられるかもしれない。よく見ろ、よく考えろ！ ポプラさんのバトルを思い出せ！

「……ルンパッパ、バブルこうせん！ 下向きに狙え！ アイアンヘッドで飛び上がることを狙うように！」

「クチートかわしなさい。少し距離をとればそれくらい問題なくかわせますよ」

ルンパッパはちょこまかと動くクチート目掛けてバブルこうせんを放つ。泡はコートに飛び散っていく。

「そろそろ技の切れ目ですね。クチート、疲労したルンパッパにとどめのじやれつくです。撓乱しながら行きなさい」

距離を取つていたクチート、ぱつと駆け出すとルンパッパの正面に出ないように左右にせわしなく動きながら距離を詰める。ルンパッパはバブルこうせんを疲れきるまで撃ち、とうとう咳き込んで攻撃が止まる。その瞬間飛びかかろうとクチートが——、雨に濡れたコートに足をとられてバランスを崩した。

「——ま、マツドショットオ！」

とつさに叫んでいた。ルンパッパも一拍遅れて大地に手を触れて隆起させる。はつと目を見開いたクチートだが、さすがにかわすことができず直撃した。泥を浴びたクチートの素早さが下がる。怒っているのか後頭部の口をガチガチ噛み合わせながら突進してきた。

「ギガドレイン！」

「足元を悪くして動きを封じるとは。偶然だとしてもやりますね。クチート、かみくだきなさい」

本当に偶然なのだから悲しくなる。せめて少しでもダメージを。ルンパッパが体を緑色に光らせ、クチートも同じ色に輝く。だが大した回復もできないまま巨大な口に噛みつかれ、振り回されて地面に叩きつけられた。ルンパッパはぐぐつと上体だけ起こすと、クチートではなくこつちを見る。

「……ンツッパ！」

いつものように笑顔で、楽しかったと言うように。サムズアップすると、そのままバンヤツと雨の中に沈んだ。

「ルンパッパ……？」

「この雨、クチートと相性良くありませんね。戻りなさいクチート。代わりに行きなさいサーナイト。常にサイコパワーで少し浮いているあなたなら、雨に転ぶようなことはないでしよう」

ビートはポケモンを入れ替えた。サーナイト。自分が知つてるのはエスパータイプだつたが、おそらく後からフェアリー・タイプの素質もあると判断されたのだろう。つまりはエスパー・フェアリーの複合。天候を考えてもここで出すしかない。

「頼む、ドクロッグ！」

相変わらずの『かんそうはだ』と雨のコンボ。本当はフェアリー単体がいればそっちに出したいが、ビートが持つている保証もない。それに最高のコンディションでポケモンを選ばないと、一撃すら入れられないことはもう分かっている。雨が降っている間に少しでも有利にする！

「わざわざエスパーに極端に弱いドクロッグを出すなんてね。『かんそうはだ』狙いで

しようけど。サーナイト、サイコキネシス』

サーナイトは全身を虹色に輝かせる。サイコキネシス。エスパー技上位の一つ。対象が視界に入る限り当てられるこの技は障害物の陰に隠れるか、あなをほるやダイビングのように身を潜める技なら回避もできる。だが、スタジアムでは無理だ。ドクロツグにかわす術はない。

「どうせダメなら……、ドクロツグ、どくづき！」

せめて毒の継続ダメージを。ドクロツグが突進して毒の爪を撃ち込もうと迫る。一手及ばずサーナイトが技を放とうとした瞬間、ドクロツグが泥を蹴つて飛び上がった。大ジャンプしてサーナイトの視界から姿を消す。主人である自分も初めて見た、四つ足でのジャンプだった。

「——グレッ！」

サーナイトが振り返るより早く着地したドクロツグ、横に腕を振り抜く要領でサーナイトにどくづきを撃ち込む。たまたま当たった先はサーナイトの胸にある赤い突起。それはサーナイトの心そのものとも呼ばれる大事な器官。サーナイトは目を見開き、パニックになつたようにならにサイコキネシスを発動した。吹き飛ぶドクロツグ。「よく僕のサーナイトに一撃を与えましたね。毒まで与えるとは、特性『シンクロ』も無駄になりましたか。でもここまで……、へえ、やるじゃないですか」

なんとドクロツグ、戦闘不能になつてもおかしくない負傷をしながら立ち上がつたのだ。向こうがパニックになつたおかげで威力減衰したことに救われた。リリンと鈴の音が響く。かいがらのすずと雨のおかげで動ける程度には回復したらしい。そうは言つてもたいあたり一発もらえば間違いなく落ちるくらいボロボロだが。

「サーナイト、めいそう」

「ドクロツグ、ふいうち、あつ……」

ドクロツグが接近して腕を振り抜くが、目を閉じ動かなかつたサーナイトの横を空気を殴るのみ。ふいうちは『相手が攻撃してきた場合、その攻撃に割り込んで先制攻撃する』というもの。めいそうは攻撃ではない。なのでふいうちは不発となり、サーナイトは特攻、特防が上がつてしまつたのだ。

「（まづい、ヘタに）ちようはつして攻撃だけにすると、能力の上がつた攻撃が飛んで来る。だからつてもう一回めいそう積まれたら次からの手持ちも一撃もらうだけでやられることになる。相手には毒が入つてゐる以上回避に徹してもダメージは出続ける、だつたらやるしかない！」

逡巡する間に雨が上がり、スタジアムが本来の天気を取り戻していく。こうなるとドクロツグの『かんそのはだ』は意味をなさなくなる。

「ドクロツグ、ちようはつ！」

「サーナイト、サイコキネシス。……あなたはこの僕のポケモンなんですから、あんな見え透いた挑発なんて無視しなさい」

ドクロツグがびよんびよん飛び跳ねて挑発するのを見て、サーナイトは少し迷つているようだ。そして気づく。おそらくサーナイトはめいそう以外にも何か補助技を持っているのではないのだろうか。だからビートさんは挑発に乗ることを許さない。それならこつちだつて、やつてやる。

「ドクロツグ！ 思いつきり笑つてやれ！」

「ゲーロゲロゲロ！」

赤い喉をふくらませて痛快に笑う。サーナイトの目がつり上がつたのが見えた。ビートがやれやれと呆れている。虹色の光がドクロツグ目掛けて飛んで来る。攻撃が当たる直前ちらとだけこちらを見ると、バチンとウインクをした。それは初めてここに来てレイジさんに見せたような、楽しげなウインクだった。そして光に呑まれ、戦闘不能になる。

「ドクロツグ……！」

もう気づいていた。ルンパッパもドクロツグも、これが最後だと察している。その上で主である自分の指示に満足し、感謝を伝えているのだ。唇を噛み締める。

「…………」

一方のビートもその様子を見て、あごに手を置いて何か考えている。その表情からは読むことができない。

「ありがとう、ドクロッグ……。出てこい、アブソル！」

「アブソルですか……。サーナイト、マジカルシャイン」

「今、みきりつ！」

サーナイトが技の準備行動に入ろうとした瞬間、それを分かつていたかのようにアブソルがサーナイトの頭を前足で叩いて揺らした。くらくらと揺れる視界に技が不発になる。そう、せつかくドクロッグがちょうどはつしてくれたのだ。相手が必ず攻撃をするのなら、『相手が攻撃してきた場合、先制してそれを防ぐ』みきりが必ず一度は決まる。

「そこに、でんこうせつか！」

目にも止まぬ早さで体当たり。サーナイトは毒もあつて荒い息をついている。

「ちよこまかと邪魔ですね。ここで仕留めなさい。マジカルシャイン」

「アブソル、シャドークロー！」

今回のために入ってきた技、ゴーストタイプのシャドークローだ。飛びかかって切り裂こうとしたが、相手のサーナイトの方が早い。マジカルシャインを全身に受けるもか

ろうじて爪を振り下ろす。しかしそれはかわされてしまった。

「粘りますね。どうせ見切られるなら。サーナイト、サイコキネシス」「みきり！ そこからでんこうせつか！」

もう一度サーナイトの攻撃を無効にし、素早くでんこうせつかを決める。しかし再度のマジカルシャイン。これはもうどうにもできない。桃色の光が直撃し、アブソルは自分すぐ横まで吹き飛んできた。

「アブソル……！」

アブソルは頭を持ち上げると、手にそつと顔をこすりつけてきた。それができたことに満足すると、くたつと動かなくなる。

「サーナイト、それ以上は毒が効いてきてまずいですね。下がりなさい」

サーナイトをボールに戻す。次に出したのはさつきのクチートだつた。こつちの残りは三四。ここで出せるのはこいつしかいない。ボールを握りしめて、名を呼んだ。

ここまでルンパツパ、ドクロツグ、アブソルが戦闘不能。ビートの手持ち、全員健在。この勝負、どうなるか。

決戦、ビート！ 後編

アラベスクタウンジム、ジムリーダー・ビートとの対戦。クチートとサーナイトにルンパッパ、ドクロツグ、アブソルが負けるも相手を瀕死には追い込めていない。ビートがクチートを再度出したところで、こちらは切り札を切ることにする。

「出てこい、シンボラー！」

最後に仲間入りしたシンボラー。はがねタイプを含むクチートにはヨクバリスもコロトックも有効打を持つていない。切り札を一足先に出すしかない。

クチートは再び特性『いかく』を放ち、シンボラーの攻撃を下げる。
「……クチート、かみくだく」

「引き付けて！」
クチートが飛びかかるうと走つてくるのを、浮遊し後退しながら距離をつめさせる。

トンツとジャンプした瞬間がきた、ここしかない。

「ラスター・カノン！」

シンボラーの腹部の前に鉄の輝きが収束し、ビームのようになつてクチートに直撃した。吹つ飛んで転がるも、ぜいぜいと荒い息をつきながら立ち上がる。タフなポケモンだ。

「……あなたのポケモン、このジムへの対策技を一つずつくらい備えているようですね。マツドショット、どくづき、シャドークロール、そしてラスター・カノン。残りの手持ちも何かしらフェアリー対策は持つているようだ」

クチートに待つよう指示しながら、観客には聞こえない声で話しかけてくる。

「でも、それだけだ。はがねタイプのポケモンがいるように見えないし、どくタイプだつてドクロッゲだけ。そもそもアブソルなんてフェアリー相手には不利でしかない。そうでしょう？」

怒っている。彼は怒っている。こちらに向かつて、怒りをぶつけてきている。それは分かる。でも、どうして。

「——その程度の努力しかできない人が、この先に進めると思わないでください！」

その程度。今、その程度って言つたのか。

「クチート、かみくだく！」

このバトルにかけた準備が、ここまで来る道中が、『その程度』と呼ばれてしまうものなのか。

「早くシンボラーに指示を出しなさい！ こちらが連続で攻撃しますよ!?」

そりやあ、フェアリーにとつて弱点となるタイプは手持ちにいない。シンオウに戻つて店を開くのに、鉄を食べるはがねタイプや身体から毒を出すようなどくタイプは近くにおけないからだ。今いる六匹はそれらも加味した上でのメンバー。そりやそうだ。強いメンバーじゃなくて、未来のためのメンバーなんだ。

「……もういい、クチート、かみくだく！ 当たらないならアイアンヘッドを地面に当て飛び上がりなさい！」

こつちはトレーナーで食べていく訳じやないんだよ。生きていくために仕事しないやだし、トレーナーとしての才能だつてない。ここまで勝てたのは年の功、子どもじやできない経験則からの行動ができたからだ。それもなけりやここにすら来られてない。ポケモンバトルだけで生きていくないんだよ、こつちは。

「えっ、ちょっと、あなた何をして……？」

完全にバトルだけを考えて準備して来なくつて悪かつたね！ シンオウに戻ることを、バトルの後のことを考えなくていいなら、もつともつと強いポケモンたくさん捕まえ「★？▼◆♯」

……へ？

「★？▼◆♯」

目の前に、シンボラーが飛んでいた。あれ？ バトルの最中では？ 何で？ クチートは？

「★？▼◆♯」

さつきから同じ鳴き声。何を言つているのか分からず、思わず声を上げようとしたが、できなかつた。羽のような突起で、額をトンと突かれていた。まるで『そこまで』とでも言うように。

「○●■△？☆、◇★◎▽▲※○」

分からぬのはずなのに、こんどは分かつた。『戦いに集中せよ』だ。そうだ、冷静になれ。さつきのビートさんの言葉だつて、ジムリーダーとしてと考えるなら『もつときちゃんと努力すれば上に行けるのに、中途半端な状態で来るんじゃない』と言いたかつたのだ。勝手に自分のことだと思つてしまつた。

「チャレンジャー、そのシンボラー、勝手に行動しますが……。棄権ですか？ それとも、シンボラーをボールに戻しますか？」

審判に声をかけられはつとする。シンボラーはわざわざ発破をかけるために敵に背を向けここまで来てくれたのだ。確かにこれはシンボラーにしか無理だろう。ここまでの道中のことを何も知らないからこそ、このタイミングで主に説教できたのだ。

「すみません、大丈夫です。戦闘続行します、シンボラーで続投です！」

「次やつたらそのポケモンは失格扱いにするので気をつけてください。では、再開！」
シンボラーがこちらに背中を向ける。あっ、と声が出る。そこにはクチートのかみくだくを受けた傷が残っていた。弱点技だ、間違いなく辛かつたはずなのに少しもそんな素振りを見せなかつた。……もしかしたら顔に出ないタイプなだけかもしれないが。

「シンボラーにきずぐすりを使う時間は必要ですか？」

「いいえ、自分のミスなので、このままでいいです」
「分かりましたが、そのせいで負けたなんて言わないでくださいね。クチート、かみくだく！」

「シンボラー！ サイケこうせん！」

大きな口を開いて飛びかかるクチートに、シンボラーは虹色のビームを放つ。クチートは身をよじつて回避しようとするが、執拗に追いかけるビームにどうどう撃ち抜かれ

た。さすがにもう立ち上がり難いらしく、起き上がつてくることはなかつた。

「戻りなさいクチート。おそらくシンボラーが切り札です。倒しなさい、サーナイト」「その通りだからこそ、交代、ヨクバリス！」

やはりさきほどのサーナイトが出てきた。めいそうの効果はリセットされているが、同時にちようはつの効果もリセットされている。まだ見ていない四つ目の技が何なのか。温存するためにヨクバリスに代える。果たしてどうなるか。

「ヨクバリス……。隠し玉はあるつてことですね。サーナイト、ねがいごと」

しまつた、とほどを噛む。てつきり最後の技は『まもる』のような防御技だと思つてヨクバリスに代えたが、ねがいごとは回復技。次のターンの終わりにダメージを回復するというものが、回復量がとても多い。残り一ターンでサーナイトを倒せればいいが、ここでシンボラーに戻したところで間に合わない。となるとやることは一つ。「ヨクバリス、のしかかり！」

ヨクバリスが接近し、ばつと飛びかかつて上から潰そうとするが、サーナイトに軽くかわされてしまつた。シンボラーを続投させてラスター・カノンを撃つておけば良かつた、とは思うが後の祭りだ。

「無理か……！　ならたくわえる！」

「サーナイト、サイコキネシス」

尻尾から食べ残した物を口に入れて体に力を入れる。その体が虹色に輝き、地面から少し浮かされてギリギリと締め上げられる。その間にサーナイトの体に空から聖なる光が降り注ぎ、体力がぐーんと回復した。毒こそ残っているものの、ラスター・カノン一撃では落とせないくらいの回復だ。

「もう一回たくわえる！」

「悪あがきですね。こちらもサイコキネシスをもう一度です」

ますます持ち上げられるがヨクバリスの頬袋は膨らむばかり。ぐぐつと腕を動かして尻尾からイアの実を取り出し口に入れ、特性『ほおぶくろ』でさらに回復した。回復には回復だ。

「サーナイト、おそらく向こうの切り札は、はがね技のジャイロボール。体を回転させなければいい。そのままサイコキネシスで絞め上げなさい」

ヨクバリスの体がさらに持ち上がった、これ待っていた。サーナイトの顔の前まで移動するのを待っていた！

「ヨクバリス！ —— ゲップ！」

ヨクバリスは任せとけとばかりにニヤリと笑う。

「バ～～リスト～！」

サーナイトの人間観点で整っている顔面目掛けて思いつきりゲップをした。サーナ

イトは目が落ちるんじゃないかなってくらい見開いた後、思わずサイコキネシスを中断して顔を押さえてコートにうずくまつた。急所に入つたらしい。涙目になつてゐる。「なつ、何で発動に条件がいらなくてより効果的なジャイロボールじやなくて、ゲップを覚えさせてるんですか!?」どう考へても鈍足なヨクバリスならジャイロボールでしょう！」

そう。『ジャイロボール』は『相手より速度が遅ければ遅いだけ威力が上がる、体を回転させて突つ込む』技。一方『ゲップ』は『木の実を食べた後にしか使えない』という特性のある技。倒されるタイミング次第では使いたくても使えない癖のあるものもある。その代わり発動できれば威力はとても大きいものとなるのだ。ヨクバリスなら間違いなく食べると信じて良かつた。

「ジャイロボールのわざレコードは手に入りませんでしたから。無理でした」

「無理でしたつて……! そこはベストを尽くすのが一流トレーナーでしょう!」

どうせ一流じやありませんよ。どうせ副業ですよ。でも、今は動じない。ヨクバリスが作つたこのチャンス、活かさなくてはヨクバリスに顔向けできない!

「ヨクバリス、のしかかりつ!」

「サーナイト、動きなさい、マジカルシャインです!」

ヨクバリスののしかかりが今度はサーナイトに炸裂した。ドツスンと音を立てて

サーナイトの上に腹から落ちる。サーナイトは驚き目を白黒させるも、桃色の光でヨクバリスを遠くに吹き飛ばした。ゴロゴロと転がるヨクバリスはもう限界だ。くるつとこちらを向く。

「ヨクバリス……？」

目が合うと、両手を高く上げ、頬に下ろして『ホシガリスピーズ』をした。嬉しそうにニッコリと笑いながらそれをやると、指示も確認せぬままサーナイトの元へ突っ込んでいく。

「ヨクバリス、ヨクバリス……！ もう一度、ゲップ……！」

「サイコキネシスで沈めなさい！ 口を開かせるな！」

サーナイトが虹色に発光し、ヨクバリスを地面に叩きつけた。目を回して戦闘不能になつたヨクバリスの後ろでサーナイトが肩で息をしている。

「ヨクバリス、このおバカ……。頼むシンボラー！」

「やはり出ましたか。サーナイト、マジカルシャイン！」

「ラスタークノン！」

サーナイトの桃色の光が放たれる前に、シンボラーの銀色の光がサーナイトを貫いた。どおつと音を立ててサーナイトが倒れる。やつと半分を倒せたが、こちらは四匹やられていてシンボラーも手負い。まだダイマックスも控えている。

「あなたは何なんですか、どうしてジムチャレンジをやっているんですか、何が目的でそんなメンバーと態度で僕と戦っているんですか！　イライラしますね！　行きなさいギヤロップ！」

ギヤロップ？　確かにほのお単体のポケモンだつたはずだと思いかけ、ここまで記憶から答えを出す。リージョンフォーム。正解だと言うようにボールから出てきたのはギヤロップ同様の四つ足でありながら額の角がもつと長く、たてがみが燃える炎から紫、桃、水色を織り混ぜたような色に変わつたギヤロップだつた。

「（フェアリーと炎の複合か……？　もしそうなら、はがね技はあまり効果がない。シンボラーもそう何発も耐えられないからよく考えないと！）」「ギヤロップ、マジカルシャイン！」

「シンボラー、サイケこうせん！」

ギヤロップの角から桃色の光が放たれる。シンボラーも空中から虹色の光線を放ち、両者の攻撃はぶつかり合つて相殺しつつ互いに当たる。シンボラーはよろけたがギヤロップはどこ吹く風だ。

「（炎じやない、あの反応、エスパーかあくか、はがね！　でも体を見るにあくもはがねも要素が無い……。サーナイトと同じ、エスパーとフェアリーの複合か！）」「ギヤロップ、でんこうせつか。ラスタークノンにそなえてすぐに下がりなさい」

「シンボラー、ラスタークノン……、ぐううつ！」

シンボラーが反応するより早く接近、体ごとぶつけると素早く下がり、ラスタークノンをかわす。ヒットアンドアウエイ。このままではじり貧だ。なら。

「あなたはここで何か打開を、と考える。そうですよね？　なら回避が難しくなる。ギヤロップ、とつしん！」

「シンボラー、おいかぜ……、かわせないつ！？」

ギヤロップが角をシンボラーに向け、一心不乱に突っ込んでくる。シンボラーは翼のようなくちを揺らして風を起こす。かわすこともできず、シンボラーの腹にギヤロップの角が刺さった。強まつた風が倒れるシンボラーを少し動かす。その目はこつちをじつと見つめている。

「……ありがとう。もう大丈夫」

ただ静かに目を閉じた。戦闘不能だ。

「シンボラー……」

「最後の一匹ですよ、どうぞ」

おかげの効果は『しばらくの間味方サイドの素早さが上がる』もの。つまりここで出す最後のポケモンもその恩恵を受ける。素早いギヤロップを追い抜けなくともかなり近づくはず。また、ギヤロップはとつしんの自傷ダメージを受けている。ここで追い

込むしかない。

「最後は君に決まつて。コロトック」

姿を見せた、ガラルにはいない。ポケモン。大事な相棒。腹を鳴らして身構えるその背中は、何も言わなくていい、と伝えていた。

「コロトック、飛び回れ！ 逃げながらエコーボイス！」

「ギャロップ、マジカルシャイン！」

羽を広げ、風を利用しながら飛び回る。その間に腹を一度強く弾く。紙一重で桃色の光が飛んで来る。

「二度目のエコーボイス！」

「マジカルシャイン！」

少しずつ体に光が被弾するようになつてきた。コートにコロトックのメロディが響く。風が弱まる気配がする。もうすぐ追い風が終わるだろう。

「コロトック、風に乗つて！ 最後の風に乗つてギャロップにシザークロス！」

「でんこうせつか！ やられるより前に突き刺すのです！」

風を羽に受け、あらん限りの力で羽ばたく。そこに光の早さで突撃してくるギャロップ。コロトックが腕を交差し――。

「し、下に潜つたですって！」

ギヤロップに衝突する寸前、ぐつとギヤロップの角より低い位置に飛び込んだのだ。それはルリナ戦で見せたアズマオウを掻い潜る飛び方で。足の間を抜け様に、シザーカロスを腹にお見舞いした。

『——普段できなきことが本番でできるということは絶対にない。逆に今まで得たことは必ず戦いに活きて。その全てをぶつけきつて戦いを終えることを、有終の美を迎えたと言うのだ』

「ありがとうございます、マスター・ドさん。……でも」

倒せない。地面に着地したコロトックはかなり疲弊しているが、ギヤロップは首を振りながらこちらに向き直る。それなりにダメージは与えたが倒すには足りなかつた。

「そのポケモン、動きが良いですね。それだけは褒めてあげましょ。ギヤロップ、とつしん」

「コロトック……！ きりさく！」

コロトックに用意した今回用の技はきりさく。ノーマルタイプの何の特別な効果も

ない技。だけどシザークロスが通じない時に対応できるように入れておいた。それを繰り出す。しかし追い風のないコロトツクよりギヤロップの方が素早い。それはつまり。

「キリ……」

鎌は空を切り、ギヤロップの体がコロトツクを捉えていた。勢いのままに空中に撥ね飛ばされたコロトツクはもう羽を広げることもかなわない。そもそもあまり戦闘好きではないコロトツクにとって、高速で飛び回りながら戦うのは負担が大きすぎる。それでも、それでも主の最後の戦いにと死力を尽くして戦つたのだ。

「コロトツク……！」

ダメだ、そんな顔をしちゃダメなんだよ。これで未練をなくすんでしょう。あなたと共に戦つた我々に心残りはないんだ、だからどうか、悲しまないで。

……今鳴らしたこの音で、この想いがあなたに届くことを願うばかり。

『――勝者、ジムリーダー、ビーート！』

墜落し動かないコロトツクを確認すると、審判は勝負の結果を高らかに告げた。ギヤロップが高くいななく。万雷の喝采を浴びながら、コロトツクをボールに戻した。そして。

『そうよ。俺達プロレスラーもやる。引退する時こそ、それが自分を象徴するポーズだと思うなら、最後だからこそやるんだ！ それがファンの、お前を支えてくれたみんなの、そしてお前と共に戦つたパートナー達への最大の感謝になるんだからな！』

両手を高々と突き上げた後、頬に付け。コートに同じポーズをしてくれる仲間がいないことが、こんなにも悔しいなんて。

「ホシガリス、ポーズ！ ……ありがとうございました！」

紅茶の香りに、ポフインを添えて

十年前。

「——野生のトレーナーだな!」

俺が叫ぶと、その子はすごくびっくりした顔をして固まつた。うーん、何か驚かすようなことをしたかな。後ろのリザードンが顔をおおつている気がするけど、どうしたんだろう。

「……\$?%ΔΓΩ?」

しまつた、シンオウの言葉は分からぬ。ポケットからケータイロトムを呼び出し翻訳してもらうことにした。

「……すみません。トレーナーではあります。ポケモンでもありませんので、ボールを投げないでください」

草むらかきわけて出てきたから思わずボール用意したけど、人間は捕まえられないよな。うーん、テンション上がりすぎてて変なことしてる。だってシンオウのチャンピオ

ンと戦えるんだぞ、興奮しない方がおかしい！

「すまない、ボールは投げない。ところでここはどこだろう？ すっかり迷つてしまつて。こここのスタジアムに行かないといけないんだけど……」

持つっていたシンオウの地図を渡して見てもらう。渡したその場で地図を半回転された。ん、また地図を逆さに見てたか？

「えーと……、あ、行き先が同じです。道も分かります。一緒に行きますか？」

「それは助かる！ さつそく案内してくれ！」

リザードンに二人も乗つたら試合前に疲れさせてしまう。だからボールに戻そうとすると念のために上空を飛びながら一緒に行くという。帰りのことを考えているのか。ははは、心配性だな。

「……あなたはトレーナーなんですか？」

「ああ。ガラルのな。君は？」

「ポケモンは好きだし。ポケモンバトルを見るのも好きですけど、他に夢があつてトレーナーの旅には出てないです。トレーナーってどんな感じなんですか？」

「トレーナーは素晴らしいぞ。ポケモンとの信頼、バトルの手に汗握る駆け引き、負けた時の悔しさもあるが、それ以上に勝利の喜びはどんなものにも代えられない。トレーナーを目指して得られたものを挙げればきりがない」

「そんなに……」

「君もどうだ？　他の夢があるにしろ、大きな経験になることは間違いないぞ」「…………」

深く何かを考えている間、黙つておく。こういう時は邪魔をしちゃいけない。ソニアがそうだから間違いない。

「…………ジム巡り、やつてみようかな」

「ああ。やつてみると良い。努力することを忘れなければきっと続けられるさ。俺はまたきっとシンオウに来る。その時もし君がポケモントレーナーだつたら、こんな嬉しいことはない。その時はトレーナー同士再会しよう！」

それからも会話を重ね、スタジアムが見えたところで別れた。だからダンデは知らない。その時の子どもが十年の時を経て、今、同じガラルにいるということを。

「ピンクじゃないね」

ジムバトルを見終わつて思わず呟いた一言を聞いた者はいなかつたようだ。ルンパッパを先鋒に出したトレーナーとの試合を見て、ポプラは呆れていた。あんなのを見

せられたらたまつたものじやない。

「マホイップ。ちよつと頼まれてくれるかい。ああ、あとマダドガスも。……全く、あのジジイに影響されたかねえ。気になつて仕方がない」

この後のバトルをビートがしくじるとは思えないが、今の対戦相手とのやりとりはあの子にとつて無視していい問題ではない。丁度いいとも言える。利用させてもらおう。次のチャレンジャーが来たとの放送に、ポプラは意識を切り替えた。

「着いた……」

アラベスクタウンジム。今日完敗したジムだ。そこの裏口の前に立つてゐる。なぜかと言えば、呼び出しをくらつたからだ。匿名の人物に。

バトルに負けてポケモンセンターで回復させた時、一匹の見慣れないポケモンが近づいてきた。一見野生のポケモンのようだが手紙を渡そうとしてくる。手紙にはこう書いてあつた。

『今夜七時、アラベスクタウンジム裏口前に来ること。逃げたらじやれつくよ』
どういう意味なの。

「あら、野生のミブリムつてことは……。あなた、今日はお手紙の通りにした方がいいわ

よ。何ならポケモンセンターの個室貸してあげるから、町から出ない方がいいわね。ルミナスメイズの森で行方不明になるかもしれないわ」

めちゃくちゃ怖い。ジョーイさんは手紙の主に心当たりがありそなうだが、含み笑いを浮かべるだけで教えてはくれない。仕方ないのでポケモンセンターでぼーっと過ごして現在午後六時五十分。

「……来たね」

「うわあっ!?

ギリギリまでインターほんは鳴らさないでいいか、と立つていたらなぜか中からガチャリと開いた。しかもその開けた人物に見覚えがあった。DVDで研究した那人、ポプラさんだつたのだ。予想外すぎて変な声が出てしまう。

「あ、あの……」

「さあ入りな。あたしを知ってるなら自己紹介は省かせてもらうよ。……あなたのことは今日の試合で知ったのさ。あたしはこここの試合は全部に目を通してるからねえ」

どうして呼んだのか、何で十分前に来ると分かつたのか、手紙を運んだ野生のポケモンは何なのか、じやれつくつてどういうこと。質問は山ほどあつたがそれをさせない不思議な圧力がある。口をパクパクさせながら後ろに続くと応接間に通された。大きめのテーブルの上にはディナーが並べられている。

「サンデーロースト！ 良い焼き色……！ こつちはグリーンピースのポタージュ、根

菜のバターソテー、食前酒は……！」

「辛口のロゼさ。飲めるかい？」

「大丈夫です。良いピンク色ですね」

「ああ、良いピンクだね」

席につくとイエツサンがやつてきてワインを注いでくれた。グラスをかかげて乾杯。食事が始まるもポプラさんから話す様子はない。

「あのう……」

「まずは黙つてお食べ。料理人ならこの料理、舌で記憶しておいて損はないよ」

「えつ、どうして料理人だつて……」

「次はないからね、お黙り」

「ハイ

もうやだ。

でも確かにこの料理、例えばポタージュは新鮮な豆を使つて色味が飛ばないよう弱火でゆつくり柔らかくなるまで煮ている。そして何度も裏ごしすることで均一な舌触りを作つてゐるのだ。さらにロゼが甘くないことでますます料理が際立つてゐる。他の料理も手間がかかつており、今の自分にこの味を再現することはできそうにない。と

ても良い勉強になる。

「わあっ……！」

食事が終わつて配膳が下され、次に出てきたものに思わず声を上げてしまつた。ケーキスタンドと一緒に出てきた淡い紫色のティーセット。スタンドにはサンドウイッチ、マカロン、スコーンなどが色鮮やかに置かれており、ほのかに香る紅茶が心を落ち着かせてくれる。この反応は彼女としては正解だつたらしく、叱責を受けずにすんだ。

「分かる相手だと出したかいがあるね。普段試合中に飲んでたカツプと違つてこつちは来客用のセットさ。ビートに見せてもつまらないんだよ。今審美眼を鍛えているところだけど」

「ビートさん……。今日戦つた、彼ですね」

「そうだよ。今日呼んだのはあの試合のことさ。ああ安心しな、戦術やら何やらについて言いたいんじやない。そういう助言は必要ないだろう？」

ポプラさんは上品な仕草で紅茶をする。

「……ビートが不用意な発言するまで、自分の未練の大きさに気づいてなかつたね？」
全てを見透かされている。そう感じた。

「あの子が言つた『この程度の努力』。その言葉にひどく動搖してたね。ビートの言いた

かつた意味とは違う聞こえ方をしたんだろう？——ポケモントレーナーに『ならない』人間としては、できる限りの努力をしたはず、そうだろう？

「……そうです。シンオウから来たのですが、このジムチャレンジが終わつたら帰らなくてはいけません。帰つたら仕事もあるし新しい夢もあるから、ポケモントレーナーにはなれない。その前提条件がある中で、できるだけのことをしてこのジムチャレンジに挑んだつもりです」

「そうだね。だけど、あの時本当の心の声に気づいたんじゃないのかい？」

「…………」

続きは自分で言えということらしく、ポプラさんはただただこちらを見つめるばかり。こうなつたら大人しく言うしかないだろう。

「……そうです。これでトレーナーが終わりだなんて、嫌なんです。料理人の夢を諦めたくはない、だけどもうあの興奮が得られないのも嫌だと思う自分がいるのも事実です。もつともっとポケモンバトルがしたい。いつそバトルだけをしたいとすら思うんです」

あの歓声を。あの高揚を。あの刺激を。一度覚えたたら病みつきになつてしまふ。

「ダンテさんに会うために一時的に始めたトレーナーが、今ではとても大きなウエイトを占めていて。叶うなら料理人とプロのトレーナーを両立したいと……」

「やめておきな」

思わず熱くなる語りに水を差された。あまりに冷たいその言葉に心が冷えていく。

「料理の腕がどんなもんかは知らないさ。でもね、ポケモントレーナーを甘くみるんじゃないよ。両立なんてできない。忙しいからとかじゃない、あんたにポケモントレーナーの才能がないからさ。今日の試合を見たからこそ分かる。あんたは一流のトレーナーになれない」

「そ、それは……」

「まず手持ちのポケモンが温和すぎる。ポケモンは人間を見るよ、戦える人間には戦うポケモンが集まるもんさ。今日の試合、手持ち全員負ける直前そつちを向いてたね？ あんなことやる余力があるなら一撃でも多く叩き込まないと。それを指示できない時点で勝利への貪欲さが足りないよ」

確かに、ポケモン達のあの想いに対して『そんなのいいから攻撃しろ』とは言えない。そんなこと、できない。

「次に良くも悪くもバトルに工夫ができる。ポケモンの特性や性格を把握するのはプロになるなら初步中の初歩。プロはそこからポケモンのバトルセンスを伸ばし、一つの技からできることを増やしていくんだ。ビートのクチート、アイアンヘッドを回避や移動に使つたろう？ ああいう気付きの多さが才能の差だよ」

「ぐつ……」

「そして最後に。……例え時間やお金があつてジムチャレンジをクリアできたとしても、本気になつたプロトレーナーには勝てないよ。だつて、あなたの心は本当はもう決まつているからさ」

その言葉を待つていたかのようにな扉が開き、イエツサンが入つてきた。金縁の美しい皿に乗せられているのは、なんとポフィン。ふわっと漂う香りが食欲をそそる。ポプラさんは手だけで食べるよう促した。恐る恐る一口かじり、思わず椅子を蹴つて立ち上がりがつてしまふ。

「こつ……、これ、セシナの実を使つたポフィン!? カしこさを上げるから高値で買う人もいるけど、味は微妙なはずなのに……！」

「なのに?」

「これ、おいしいんですよ！ 苦味がアクセントになつてる！ 酸味はほとんど感じない！ ジョウトにあるお茶文化に近い、苦味を楽しめる味になつてる！ 調理法はそこまで違わないはずなのに、しつとりさせることで苦味が緩やかに舌の上に広がつて……」

はつとする。ポプラさんはわざかに笑みを浮かべながら「それだよ」と告げる。
「情熱の比率がポケモンバトルより料理にある。その時点で、一流トレーナーにはなれ

ないのさ。あたしもそのお菓子いただこうかね。……おや、おいしい。これはいい味だよ。さつき雄弁に語る姿、なかなかピンクだつたじやないか」

「ピンク……？」

「もうあたしのお節介はいらないね。ホテルにお帰り。……そうそう、これを渡さないと。このお菓子を作ったパティシエからで、使った材料を書いた紙。作り方はあえて書いて無いから自分で研究するようにな」

もらつた封筒にはもう一枚何かが入つていて。目で訴えるとニヤリと笑われた。

「もう一つはファイナルリーグの観戦チケット。ジムチャレンジ参加者は裏でモニターで見る権利はあるけどね。あんたはちゃんとその目で見てござらん。本当のプロトレーナーつてやつをさ」

まさかこんな物までもらえるとは。感謝しつつどことなく不安になる。ここを出たとたんに黒塗りの空飛ぶタクシーに連れ込まれて違法な契約書にサインとかされないだろうか。……これもう三回目か。

「安心おし。これはあんたを利用するだけ利用したお代。たっぷりと有効活用させてもらつたからもう充分だよ。ああ、もしこの事を誰かに他言でもしたら……、じやれつくよ」

全身鳥肌が立つた。

「……入つておいでよ」

珍妙な客が帰つたのを確認し、声をかける。応接間の入り口を開けて入つてきたのはビートだつた。

「やつぱりあれは、わざと僕に聞かせるために呼んできただんですね」

「そうだよ。丁度あんたに足りないものだつたからね。見世物になつてもらつたのさ」「……僕は間違つたことを言つたつもりはありませんし、撤回するつもりもありませんよ」

「どうして撤回する必要があるんだい。分かつてないねえ。あたしは叱るためにここに呼んだんじゃないんだよ、ビート」

あからさまに怪訝な顔をするビートに、あからさまに呆れた顔で応対するポプラ。

「覚えておきな。ポケモンバトルをする人間全てが強くなるために戦うんじゃない。意地や未練という他人から見たら意味すらないもののためには勝ち上がろうとする人間もいるつてこと。目の前にいる人間がどういう意思でそこに立っているのか、それを分からないうちはまだまだピンクは遠いよ」

「……じゃあポプラさんはどうやつてあの人のことと調べたんですか。あの人人が料理人だつてことや最後のその焼き菓子のこととか。魔術師とか言わされてましたけど、実はヤラセなんじやないんですか」

「ビート、本当に全く……。バトルのセンスはチャンピオンにも劣らないのに、人の内面を見る力がなさすぎる。そんなんじやファイナルリーグは二回戦で辛くも負けるくらいの結果になるよ」

「何ですかその具体的な予言」

「……あのチャレンジャー、服や荷物から油の匂いとスペイスの匂いがしてた。あとカレーの染みも。それから右手に包丁タコ、左腕全体に複数の火傷痕。忙しい調理場で働いてる証拠。カバンのポケットから知らない甘い匂いがしてたのをマホイップや外にいる野生のペロリームらが指摘してたね。嗅ぎ慣れない匂いつてことはよその地方のポケモン用のお菓子に違いない。買つたお菓子ならそこまで匂いは残らない、となれば自作。なら一つ前のラテラルに電話一本入れれば『シンオウからのチャレンジャーが一人いる』となつて、お菓子の正体はポフインになるのさ。……何か質問は?」

信じられないものを見る目でポプラを見るビート。ポプラは自慢げにすっかり冷えた紅茶を飲み干した。

「人間をよく観察しな、ビート。それはバトルに勝つことにもつながるよ。まずはウチ

のジムトレーナーたち相手に練習するんだね」

「……分かりましたよ、バ、ポプラさん」

「またバアさんって言おうとしたね!! 問題、バイバニラとダグトリオとナツシー、仲間はずれはどれ?」

「はいっ、バイバニラです! 一見進化すると頭の数が増えていく問題にも見えますが実際はナツシーとダグトリオにはリージョンフォームがありバイバニラにはない、が正解です! ……くつ、思わず癖できちんと答えてしまった」

ぎやーぎやー言いながら応接間を後にする二人。すっかり夜も遅い。アラベスクタウンを象徴する二人はまだまだ伸びていく。

自分の顔が夜のガラスに映つているのをぼーっと眺める。ポプラさんが手配していった空飛ぶタクシーに乗つて、さつきのことを考えていた。あのポフィンを食べて「それだよ」と言われたのは、まるで自分の顔面を殴られたような衝撃だつた。でも、その理由がまだ飲み込められてない。

あの瞬間自分がポケモントレーナーで『なくなつた』ことを受け入れるには、あまり

にこれまでの道のりに対して必死すぎたからだ。

それでも夜は明ける。

ジムチャレンジ、最終日の日が昇る。

ジムチャレンジ、終了

『いよいよ今年のジムチャレンジ、泣いても笑つてもあと一戦となりました！ チャンピオンの座をかけて戦うのはこの二人！ 一人目は現チャンピオン——』

ガラルで今年最も強い二人のポケモントレーナーが入場する。この試合が終われば、ジムチャレンジは終わるのだ。

『はい、こちらシユートシティのスタジアム前から中継です！ ご覧下さいこの人の数！ スタジアムの中も外も今日の試合を待ちきれない人々でいっぱいです！ 誰かにインタビューしてみましようか……、あつ、ジムチャレンジャーの方がいますね、でもガラルのご出身ではなさそう……。すみませーん！ 少しよろしいですかー!?』
綺麗な女性がカメラマンを引き連れてすっ飛んできた。コワイ。生中継、何それ、あ

ああ緊張して何言えばいいのか分からぬ！

『シンオウからいらしたんですか！ アラベスクタウンジムで敗退、惜しかつたですね！ ゼひまた来年もチャレンジしてください！ ガラルは待つてますよ！ ……はい、貴重な別の地方の方のお話でした！ では次は？！』

インタビューから解放され千鳥足で歩いていると「良いコメントだつたボルよ」とボール人間に誉めてもらつた。何なんだろうかこのコスプレ。ちらつと見ると他のテレビ局の中継も入つていてるようだ。また捕まつてたまるかと慌てて席へ向かう。

セミファイナル、つまりジムチャレンジャーの中で一番強いトレーナーを決める戦いが終わり、正真正銘最後のバトルであるファイナルリーグを見るためスタジアムは満員御礼だ。この戦いに臨むのはチャレンジャー代表を除くとジムリーダー九人。

ヤロー、セイボリー、クララ、ルリナ、オニオン、ビート、マリイ、マクワ、そしてキバナ。

チャレンジャー入れた十人を勝ち抜いたたつた一人がチャンピオンに挑む資格を得る。その半数は一度は戦つた相手だ。だが、彼らが試練としてのジムリーダーであつたことを、試合が始まると嫌というほど思いしらされることになる。

「やれ、ルンパッパ！ ねこだまし！ ひるんだ隙を逃しちゃいかん！ たきのぼりで打ち上げるんじや！」

ヤローさんがルンパツパを使った時は、同じポケモンを持っているのに全く違う使い方で正にトレーナーとしての差を突きつけられた。あまごいをしなくても先制をとつて試合の流れを引き寄せ、たきのぼりにつなげている。そんな発想したこともない。

セイボリーさん、ルリナさん、オニオンさん、ビートさんもジムバトルとは違ったポケモンを使い、より思考の先を見据えた指示を出している。それらに感心し始めた自分自身に気付き、あつと小さな声を出してしまった。少し前までの自分なら何か吸収できるものはないかと探していたはずだつたからだ。

「さあやるよ、ドクロッグ！　ドレインパンチで回復しながら反動で距離をとる！　よかよ！」

スパイクタウンジムリーダーだというマリイさんも自分の手持ちと同じドクロッグを持つっていた。動きのキレが別物だつたがそれに嫉妬することもなく純粹にすごいと思える自分がいる。そのマリイさんは今年のファイナルリーグを勝ち、今からチャンピオンと戦うことになつていた。

「今年も素晴らしいバトルばかりですね。ダイマックスも落ち着いてますし」

「そうですね、おばあさま。あ、これが終わつたらホップがカンムリ雪原で調べてきたことについてお話ししたいんですけど、いいですか？」

「ええ。あなたも彼もがんばりますね。無理はいけませんよ」

なんか聞いたことあるような声がしたけど、思い出せない。誰だつたつけ。

「モルペコ！　きばつとよ！　オーラぐるま！」

マリイとチャンピオンの試合が目まぐるしく進む。彼女達の目には何が見えているのだろう。最後は互いにキヨダイマツクスのぶつかり合いになり、結果はチャンピオンの勝利に終わった。父がトレーナーを諦めた時の気持ちが今なら分かる。この頃にはすでに、他の観客のように純粹に楽しむことができていた。

『来年のジムチャレンジはどのようなドラマが待っているのでしょうか！　全てのジムチャレンジャー、そしてジムリーダー、チャンピオンに改めて拍手を！』

わあああ、と割れるような拍手。自分もまた笑顔で拍手を惜しむことはしなかつた。この拍手は昨日までの自分、『ポケモントレーナー』の自分へ送る決別の拍手なのだから。

試合が終わつても、しばらく立ち上がることができなかつた。終わつた。終わつたのだ。ジムチャレンジが、ガラルでの旅が終わつたのだ。ダンデさんに会うという最大の目標を果たせないまま、明日の午後飛行機でシンオウに帰る。

それでも不思議と心が落ち着いているのは、昨日ポプラさんに夢への指針を改めて示

してもらえたからだろう。料理人とポケモントレーナーの二つをどうするのか。自分が選んだのは料理人。その夢を叶えるためにこれから進むのだ。

「……もしもし。具合が悪いんじゃないなら、あなたもそろそろ帰られた方がいいと思いますよ」

はつと顔を上げると隣に座っていた人が声をかけてくれていた。見れば同じように残っていた客がスタッフに帰宅を促されている。

「大丈夫なようですね。良かつた。では失礼します。……ローズ委員長の配下じやないスタッフに声をかけるの、オリーヴ、無理」

お礼を言つて立ち上がり、女性は足早に去つていった。最後の方は何を言つてるのか聞き取れなかつた。何だつたんだろう。

帰るために人もまばらになりかけているスタジアムの連絡通路を抜ける。と、観客にぶつかつて転んでしまつた。幸い互いにケガもなく謝り、立ち上がつてふと強烈な違和感に気づく。

腰のモンスター・ボールが一つ足りない。

チエツクするとシンボラーのボールがない。今のどさくさに紛れて腰から外れてしまつたようだ。あちこち視線を動かすが見つからない。その時通路の奥からシンボラーの特徴的な鳴き声が聞こえた。慌てて駆け抜ける。そこには自分のボールから出

ているシンボラーと、ボールを持ちながらシンボラーを優しく撫でている男性の姿が。それを確認した瞬間、心臓が止まつた。

「やあ、すまない。君のシンボラーか？　ボールだけ落ちてたから中を確認したんだ。安心してくれ、何もしてないさ」

董色の長髪、蜂蜜色の瞳。紛れもない、ダンデさんがそこにいた。

「良い生育環境のシンボラーだ。毛……はないけどさわり心地がとても良い。自分に合うものを食べさせてもらつてるんだな」

「□◇☆○」

「そうかそうか、満足か。良い主に恵まれたな。さあそつちに戻るんだ。さつきから主人が固まつて動かないぞ？」

動かないのではなく動けない。あれほど追いかけ、焦がれ、手を伸ばした人が、今ここでいる。絶好のチャンスだ。

あなたに忘れ物を届けるためにジムチャレンジに参加しました、ポケモントレーナーとして会うという約束を守りたくてここまで来ました、アラベスクタウンジムで負けたけど頑張つたんです。

「さあ、シンボラーのボールだ。大事なポケモンなんだろ？　なくさないように気を付けてな」

喉まで出かかつた、散々準備し練習したセリフを全て飲み込む。ダメだ。言うことはできない。もうポケモントレーナーじゃないのだから、夢を叶えていないのだから、ジムバッジ集めてバトルタワーに行けてないのだから、言つてはいけない。再会は、夢を叶えてから。だからこそ、こう言うのだ。

——ありがとうございます。ずっと前からあなたのファンでした。

この誰でも言いそうな言葉を聞いて、ダンデさんもまた誰にでもやつているであろう爽やかな笑顔を浮かべて「ありがとうございます」と返す。たつたそれだけで。あれほど願つた再会は終わつた。ダンデさんの姿が完全に見えなくなつたのを確認し、はああと息を吐いてずるずると座り込んだ。

「▲◇★▼○」

シンボラーが横に来て、小さく鳴き声を上げる。何となく言いたいことが分かつた。そう、あの人に会いたかつたんだよ。会えたけど会えたことにはしない。だけど、忘れ物を返さないと。

手紙を書こう。本来ならそれで済む話を未練と可能性にかけてここまで来て、結局そこまでだつたんだ。だから手紙に全てを書こう。それと同時に今度こそ誓うんだ。店を開いてあなたを待つつて。

「◎◎◎◎◎！」

シンボラーをボールに戻し、スタジアムを出るために駆け出した。手紙はガラルで出さないと国際料金がとられる。無駄なお金をかけるわけにはいかない。すぐにレターセットを買って手紙を書いてポストに出さなくっちゃ。あ、封筒は大きめでないと忘れ物が入らないよ。

さつき座っていた場所には小さな小さな水滴が一つ落ちている。最後に残つていた夢を自ら諦め、心から追い出した一滴の涙。だからもう迷わない。一つの夢を供養して、もう一つの夢に向かつて走るだけだから。

「よう、お疲れダンデ」

「キバナか。君もお疲れ様」

シユートシティにあるバトルタワーの最上階展望台。まだまだ熱氣冷めやらぬガラルを見守るダンデの元に、アポもなくキバナがやつてきた。それは良くあることなのかダンデも気にせずあいさつをする。

「今年はマリイ君がファイナリストだつたな。君は大丈夫か？ ネットは荒れてないか？」

「予想範囲内の荒れ方だよ。今年のクジ運が悪いって擁護の声も多い。まあ俺サマ初っぱなからチャンピオンだつたからな、相手。負けるつもりはなかつたがやつぱつええなアイツ。次やる時は対策完璧にしてぶつ倒す」

瞳をギラギラと輝かせるライバルを見ると思わず「なら俺でその対策試してみるか？」と言いたくなるのをぐつところえる。今日はさすがにダメだ。変にここでキヨダイマックスしたら大騒ぎになる。キバナもそれは分かつてるのでダンデをあおることはない。

「ところでよお、今年のジムチャレンジ、お前の真似してオリジナルポーズしてた奴がいたんだつてよ。知つてるか？」

それはこの前直接会いに行つたシンオウのトレーナーのこと。実際のところ今日まで忘れていたのだが、朝たまたまニュースの生放送にそいつが映つたのだ。ビートのところで負けたと言つていた。自分のところにも来ていない。つまり、バトルタワーでダンデと再会するプランは失敗したことを示す。なら、果たして直接会えたのか。気になつてしまつたので、わざわざ聞きにきたのだ。

「ああ、あれのことかな？ よそから来たトレーナーがやつてたやつだろ？ ヤローサンのとこの試合を全部チェックした時に見たな」「え、お前また全ジムチャレンジヤーのバトルチェックしたのかよ？ 何試合あると

思つてんだ……」

「未来のチャンピオンがいるかもしないんだ。苦になどならない、むしろ毎年の楽しみなんだぞ。今年ファイナル出た子はやつぱり最初から光つてたしな。……本当は스타ジアムで直接見たいが、俺が動くと色々問題になるって言われてる」

「あつたりまえだ。フットワーク軽すぎるのも問題だぜ。忘れもしねえ、去年それやろうとしたお前をなぜかキルクスタウン近くの氷山の上で見つけた時は心臓止まるかと思つたんだぞ！」

軽口を叩きながら心では違うことを思う。やつぱり会えなかつたんだな、と。

「話を戻そう。それは——」

ダンデは両腕を上に伸ばすと、拳を握つて自分の頬にくつつける。それは紛れもなくあのポーズで、キバナは思わず間の抜けた表情をしてしまつた。

「あれ？　君が言つてるポーズつて、このポーズじやなかつたか？」

「ああいやいや、それよそれ！　お前がバツチリ知つてるから驚いただけだ。それバズつたりしてねえのによく知つてたな」

「俺も不思議なんだ。そのジムチャレンジャー、はつきり言つてトレーナーとしては凡庸だつたんだが妙にこのポーズが心と記憶に残つてな。まるでのチャレンジャーから誰かへの、自分を見つけてくれというアピールに見えたんだ。言い換えるならメツ

セージかな」

「メッセージ？」

「届け！ ホシガリスピーズ！ ……つて俺には聞こえたんだよ」

キバナは小さく口を開く。しかし、開いた口は何の音も作らないまま閉じられた。
「さつきからどうしたキバナ。口をパクパクしたり、動搖したりして。君らしくないぞ
？」

「……いや、柄にもなくセンチになつちまつてな。良かつたなあ、届いてて。確かに届い
てたぞ、ダンデに」

あさつての方向を向いてボソボソと呟くキバナ。ダンデはそんなライバルの様子に
さらに不安になつていく。

「キバナ……。きちんと三食食べているか？」

「いきなりどうした」

「睡眠は？ 休養は？ ネットでの心無い書き込みによるストレスか？」

寝具は良いも

のを使つてゐるか？ 自慢じやないがハロンタウンのウールー毛を使つた掛け布団は最高だぞ。今度送ろうか？」

「それ地元特産品の宣伝じやねえか。何だいきなりどうした、俺サマの母親にでもなるつもりか？」

「君の心身が健やかになるためならそれでも構わない」

「冗談に決まつてるだろ!?」

ぎやいぎやいと話すうちに、あつという間にシンオウのトレーナーの話題など流れていく。キバナもまた、自然と忘れていく。別に珍しいことではないのだ、夢破れて去つていく人間など。この世界では日常茶飯事。むしろ相手に届いていただけあいつは幸せだと言えるだろう。

翌日、ダンデはたくさんの郵便物の中から見慣れない封筒を見つけた。その手紙の住所はシンオウで差出人に覚えはない。だが、差出人の名前の下に書かれた言葉を見て目を見開いた。

『十年前のシンオウでお会いした『野生のトレーナー』より、ホシガリスポーズを添えて』

届け、ホシガリスピーズ

【拝啓 ダンデ様

突然の手紙で失礼いたします。私は十年前、あなたがシンオウにエキジビションマッチに来たときに道案内をした『野生のトレーナー』です。あの時の忘れ物をお返しするのと、実は今年のガラルジムチャレンジに参加していた顛末をどうしてもお伝えしたく、筆をとりました】

封筒の中には手紙の他に、古いシンオウの地図が入っていた。

シンオウに戻つてから寝る間を惜しんで勉強した。経理、料理、経営、流通、等々。貯金を切り崩してガラルに行つたため独立する資金がなかつたのもあり、平行してお金も貯めた。辛かつたり心が折れそうなこともあつたけど、それでもこの夢を諦めることは

できず歯を食い縛つて耐えた。この夢はもう一つの夢を犠牲にして選びとつた夢だから。

「ついに夢を料理人一つに絞つたんだな。だけど、コンセプトは変えないでいいんじやないか？ ポケモンバトルもできる飲食店。何もプロトレーナーだけがバトルする権利があるんじやない。今度公園に行つてごらん。どういう意味か分かるから」

ガラルから戻つてすぐ両親に夢を伝えた時、父はそう言つてくれた。もうただのガラルカレーとポフインの店にしようと思つてたのだけど、父の言うことが気になる。その週の終わりに公園に行つてみて、その意味を知つた。

「すみません、ポケモンバトルやりませんか？ 10on1で。……え、賞金？ ははは、ここでバトルしてる人はプロじやないから、お金のやりとりは禁止ですよ」

今まで公園なんて寄つたこともなかつたから知らなかつたが、週末になると純粹にバトルを楽しむ人が集まつていたのだ。ついこの前までガラルでやつてた自分からすると簡単に勝てる相手ばかりだ。でも、間違いなくあの時より気楽で、何より楽しい。

「そうね。バトルもできるお店の方がいいわよ。あなたとあなたのポケモン達、帰つたばかりより今の方が良い顔しててるもの。お父さんはバトルはもう辛いってやらなくなつちやつたけど、あなたはバトルそのものを楽しむことができる。それを忘れないで。頑張りなさい、お父さんもお母さんも食べに行くから」

やはり父はトレーナーの夢を諦めた時、たつた一人で苦しみの中、夢への想いを自らへし折ったのだ。それに対し自分はたくさんの人のおかげで、今もポケモンとバトルを好きでいられる。その事に感謝しつつ、だからこそ前を向いて走つていくことを誓つた。自分のようにプロになることを諦めた人でも楽しくバトルできるような店を作る！

「……久しぶりに入つてきて早々に土下座しながら金を貸して下さいなんぞ、今日日。ポケウツドでもやらないぜ。でもよ、その泥臭え必死さ、俺は好きだな。ガラルに行つて良い意味で一皮むけたじやねえか」

何年かしたある日、理想の物件が売りに出されたのを見つけてしまつた。それは十年前ダンデさんと出会つた廃墟であり、広さや立地も申し分なかつた。ただ、手持ちがない。でも逃したら一生後悔する。そこでノモセジムに突撃し、ジムリーダーにスライディング土下座を敢行したのである。

「それならこつちの条件次第で貸してやらんこともないぞ？　……ものは相談なんだけどよ、お前が開く店つて貸し切りとかできねえか？　アルコールもありやあ良いんだが。マキシマム仮面ご一行の打ち上げやりてえのよ。興が乗つてバトルになつても、そういう所なら問題ないしな。あとウチのレスラー達には安く飯を提供してくれ。レスラーも貧乏なやつは貧乏なんでよ。それが条件だ！」

二つ返事でOKを出した。隣のコロトックが無音で腕をシザーコロスの構えにした時は半殺しを覚悟したが、背に腹は代えられない！ 借金は少しづつ返す！ まずは拠点がないと次に進めない！

『ハァイ、ミツバです。……あら、久しぶりじゃない！ ……え？ 良い金融機関教えてほしい？ あらあらすつかり気合い入っちゃって！ いいわよ、少しアタシも貸してあげる！ その代わりアタシ御用達のとこの食器使つて。あとインテリアも。大丈夫、カレーに映えること間違いないから！』

二つ返事でOKを出した。アブソルがめちゃくちゃ心配そうな顔でこっちを見ている。後には引けない。もうマキシさんと両親とミツバさんにお金を借りてしまった。何が何でも売り上げを出さなくてはならない。そして経費を削るところは削る。つまり、スタッフは雇えないから、君たち六匹がスタッフだ！ そう告げた時、ヨクバリスが木の実を落として固まつたのが忘れられない。

最初は赤字も赤字からスタートだつた。店をオープンして数日は両親とノモセジムのメンバーだけがお客様。店の運営、SNSの更新、メニューの開発、仕入れの確認等々。日々より良く、と目を回しながら働いていたある週末、突然数組のお客さんが

やってきたのだ。喜びながら何でここを知つたのか聞いてみると。

「この店のSNS、ガラルのドラゴンストーム・キバナさんが紹介してたんです。彼は全国でもトップクラスのトレーナーだし、イケメンじゃないですか。それで来たんですよ」

まさかキバナさんがここを紹介してくれたとは。やばい、泣きそう。しかしこれで終わりにしてはいけない。このチャンスを活かしてリピーターを増やし、店を盛り上げなくては。それでこそ気にかけてくれたキバナさんや援助してくれた人達を安心させられるというものだ。

キバナさん効果で最初よりは人が来るようになつて半年ほどした頃。

「すみません。一人だけどいいかしら。あと……、カレー食べる前にバトルもお願ひしたいの。1 on 1。こつちはガブリアスで」

シンオウリーグチャンピオン、シロナさんが電撃訪問してきたのだ。泡吹いて気絶するかと思った。実際は考古学のフィールドワークの途中でここを見かけ、さらに言うなら自分のシンボラーを追いかけて入つてきたという。シンボラー、本当に何を考えてるのか分からぬ。

「うーん、おいしい！ 他所の料理がシンオウで食べられるのは嬉しい誤算ね。今度は四天王のみんなを連れて来ようかしら。……自分で片付けしないでカレー食べられ

るつて、素晴らしいことよね』

ガブリアスにワンパンでシンボラーが負けた後、料理をお褒めいただいた。さらに許可をもらつてツーショットを撮らせてもらい、お店に飾らせてもらうことに。写真効果とマキシさんがありピーターとして来てくれたおかげでプロトレーナーにこの店が認知されるようになつたらしく、他のジムリーダーや他地方からの遠征トレーナーご一行からの予約が少しづつ入るようになつた。酔つた勢いでバトルできる場所は貴重なんだとか。

【……かつてあなたに感化され、トレーナーを目指しましたがすぐに挫折。今度あなたがシンオウに来たら『トレーナーは無理だつた』と伝えて地図を返そうと思つていたのです。ところがその前にあなたがチャンピオンから陥落したとのニュースを聞きました。これではあなたに地図を返せない。正直に言いますと未練があつたのもあり、ガラルでもう一度トレーナーになつてあなたに『ポケモントレーナーの夢を叶えた』姿で地図を返そくうと思い立つたのです】

「店長！ お客様からバトルご要望ですよー！」

あれからさらに数年がたち、ようやくスタッフを一人だけ雇えるようになつていた。そんなスタッフから声がかかる。この店でバトルを楽しみたいお客様には客同士の了承、あるいは店長を指名して戦うようにしてもらつてはいる。なおスタッフはまだバトルは修行中とのこと。

自分が選ばれた時はドクロツグの出番だ。相変わらず楽しそうに戦つてくれる。ノモセのマスコットキャラなのもあり、出てくるとお客様の反応も良い。ああ見えて気遣い上手なのでバトルの後はファンサービスも忘れない。マキシさんのご贊頃でもある。

コロトックは厨房の手伝いと店のミュージック担当だ。普段はネズさんのCDを流してはいるけど、必要な時は演奏でムードを盛り上げてくれる。あと、なんと店の経営にも口を出すようになつた。新作カレーの案を容赦なくダメ出しするその姿は『この店の真の店長』とまで噂されるほど。店で一番強いのは間違いないコロトックだ。

ルンパッパはまさかの給仕担当になつた。ステップ踏みながらモーモーラッシーをこぼさず運ぶのはいつ見ても天晴れである。コロトックのメロディでルンパッパが踊るのはこの店の隠れた名物だ。ちなみにドクロツグとルンパッパは休日ノモセ湿原に出掛けで体を潤してくるのが何よりの楽しみなんだとか。

どこかへ行く時はシンボラーと必ず一緒に行く。一見背中に乗つて空を飛ぶをやつてるよう見えるけど、実際はサイコキネシスで固定されて浮かばれてるだけなので快適さはない。あと時々バトルしたがるのかドクロツグを押し退けて参戦するからちょっととびつくりする。なおバトルに満足するとどこかへ飛びさつてしまふので帰つてくるのかめちやくちや不安になる。

アブソルは遠出する時や何かを感じた時は必ず同行してくれるが、普段は店の屋根の上にいる。おかげで『マフラーしたアブソルがいるカレー屋さん』という特徴も出てしまつたのは嬉しい誤算。でも人間はあまり好きじゃないのは知つてるので「カメラが嫌なら逃げて良いよ」と伝えてある。逃げ先は大抵自分のベッドの中だ。

そしてヨクバリス。何とかお客様の料理を横取りするのはダメというのは覚えてくれたが、代わりに席を回つてはあの手この手でおひねりを求めるようになつてしまつた。今や木の実お手玉という新しい芸すら物にした。欲望に正直なやつめ。子ども受けがいいので家族連れが来ると大抵子どもに尻尾をモフられている。その時は超ドヤ顔する。

「はいこちら『ガラルカレーとポフインのお店・ホシガリスポーズ』です！　ご予約ですか？　……はい、確認するので少々お待ち下さい」

ここ『ホシガリスポーズ』の看板はもちろんホシガリスポーズをするホシガリス。シ

ンオウにはいないホシガリスというポケモンだが、ヨクバリスを見て「本物だー」と感動されるのもいつもの光景だ。実際は進化前なのだけど、細かいことは気にしない。同じように店がいつまで続けられるかとか、借金返済しきれるかとか不安は尽きないが、今はそんな細かいことは気にしない。必死に努力するのみだ。

【……私はポケモントレーナーにはなれませんでした。夢破れた私ではあなたに胸を張つて会えません。ですがもう一つの夢、ガラルカレーとポフインの店を出すことは、どんなことがあつたつて絶体叶えてみせます。だからどうかその地図を持つて、もう一度シンオウに来て下さい。その地図はあなたにシンオウに来てもらうための言い訳です。でも本気の言い訳です。その地図を見ながらシンオウに来て、ホシガリスピーズを目印にお店に来て下さい。必ず待っています】

今日も世界はたくさんの挫折と諦めを産み、供養されない夢が打ち捨てられていく。努力することも諦めないことも簡単ではなく、一つの夢のために多くの何かが犠牲にな

る。

それでも人は夢が叶った輝きに魅せられて、前を向いて進み続ける。そして自分に言い聞かせる。頑張れば夢は叶うんだと。

今日もホシガリスポーズの看板が風に揺れる。迷えるお客様を待ちわびて、カレーの匂いを風に乗せている。この話は、そんなよくある夢のために夢を犠牲にした、少しだけ人の巡りに愛された人間の話。この後どうなつたのか。それはまた、別の話。